

I はじめに

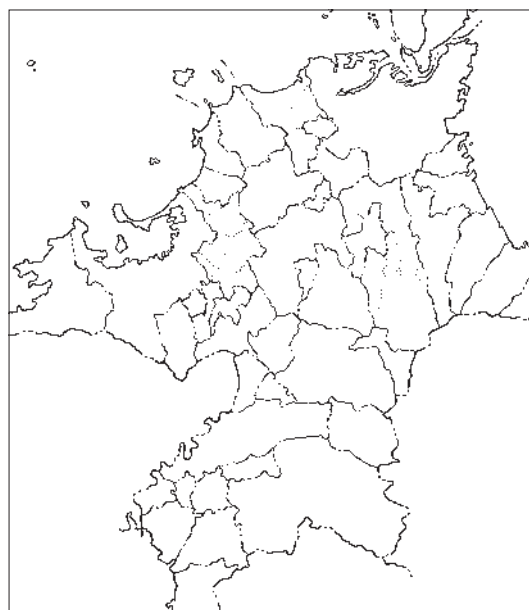
1 調査に至る経過（第1図）

福岡県柳川市では平成24年7月14日の九州北部豪雨災害により、沖端川が決壊し中山地区などに浸水被害を及ぼした。これを受け、災害工事に伴う埋蔵文化財の照会が南筑後県土整備事務所柳川支所から平成26年2月4日に柳川市教育委員会になされた。その中で沖端川に係る出橋の付替え工事では、まず仮設橋と迂回道路建設後に、新たに橋を建設する大規模な工事となり、出橋を挟んだ南北の久留米柳川線の両側約10m幅が確認調査対象となった。

平成26年5月22日に、柳川市教育委員会は上町・保加町地区の工事対象地内で確認調査を行った。その結果、遺跡を検出したため本調査が必要となった。

同年7月1日に県教育庁総務部文化財保護課と柳川市教育委員会で出橋の付替え工事に伴う発掘調査について協議した。その後、同年11月11日に調査を担当する九州歴史資料館・柳川市教育委員会・南筑後県土整備事務所柳川支所と詳細な協議を行った。その結果、まず出橋を挟んで北側の保加町遺跡について平成26年12月15日～平成27年1月7日に1次調査を、残りの大部分の保加町遺跡の第2次調査を平成27年4月15日～平成28年2月3日に行い、最後の箇所第3次調査を平成29年10月10日～12月7日にかけてそれぞれ九州歴史資料館が担当し、対象地内の調査を全て終了した。

出橋を挟んで南側の上町遺跡は、久留米柳川線を挟んだ西側の第3次調査を柳川市教育委員会が担当し、東側の第2次調査を九州歴史資料館が平成27年4月13日～10月30日にかけて調査を行った。



第1図 柳川市位置図

2 調査組織

平成27年度の発掘調査と平成28・29・30年度の整理・報告に関わる関係者は次のとおりである。

平成27年度		平成28年度	
柳川市教育委員会			
教育長	日高 良	日高 良	
教育部長	樽見 孝則	樽見 孝則	
生涯学習課長	袖崎 朋洋	袖崎 朋洋	
文化係長	野田 学	生涯学習課長補佐	堤 英幸
	堤 伴治	文化財保護係長	堤 伴治
文化係	須崎 精一郎	文化財保護係	橋本 清美（整理・経理担当）
	堤 智一		
	橋本 清美（調査・経理担当）		
	権丈 和徳		
福岡県南筑後県土整備事務所			
所長	吉瀬 幸一	松原 国浩	

平成29年度	平成30年度
柳川市教育委員会	
教育長 日高 良	沖 毅
教育部長 田尻 主範	田尻 主範
生涯学習課長 袖崎 朋洋	袖崎 朋洋
生涯学習課長補佐 堤 英幸	本吉 尊
文化財保護係長 堤 英幸（兼）	本吉 尊（兼）
文化財保護係 堤 伴治	堤 伴治
橋本 清美（整理・経理担当）	橋本 清美（整理・経理担当）
	大津 諒太（嘱託）
福岡県南筑後県土整備事務所	
所長 山本 潔	山本 潔

発掘調査にあたっては、発掘作業員の方々を始め、南筑後県土整備事務所柳川支所および福岡県文化財保護課、九州歴史資料館や多くの方々のご協力によって円滑に進めることができました。ここに記して感謝いたします。

Ⅱ 位置と環境

上町遺跡は、柳川市の中央部やや北西寄り、柳川の中心市街地に所在する、近世柳川城下町の遺跡である。旧城下町の全域が周知の埋蔵文化財包蔵地「柳川城郭跡」にあたり、確認調査により遺構を確認した拠点から随時、近世の旧地名に由来する現在の町名を与えた遺跡を登録している。

本遺跡が所在する本市は筑後平野南西部の有明海北縁にあたり、西を筑後川、東を矢部川に挟まれた三角州に立地し、標高0～5 m程度の平坦な低平地である。柳川市に面する有明海は干満差の激しい国内有数の干潟を有し、沿岸部には干拓地が広がる。柳川城の城郭を形成する城堀は、城下町の東辺にある3ヶ所の水門から二ツ川の水を取水して水路で繋ぎ、さらに城堀の南岸に複数の取水口を備え、二ツ川から市南部の宮永地区及び両開地区に再分配するための中盤施設の役割を果たす。

天正15（1587）年、立花宗茂が柳川城に入り、三潞・下妻・山門の三郡を支配した。慶長5（1600）年に関ヶ原の戦いで西軍に与した宗茂が改易されると、田中吉政が筑後国の領主として柳川城に入る。しかし2代忠政に後嗣が無く、断絶改易となった。そして元和6（1620）年、立花宗茂が再封され、以後幕末まで立花氏の支配が続いた。

近世柳川城下の構造は地理的な関係から、柳川城を中核に武家が集中する「城内」と通称される地区と、町人が主に居住した「沖端町」と「柳河町」の三地区に大別することができる。沖端町「城内」の南西部に、柳河町は北部から東部にかけて展開する。沖端町と柳河町には武家屋敷や寺社があり、純然とした町人地ではないが、柳河町では、足軽などが居住する地区を「弓小路」「鉄砲小路」

など小路の名前で呼ぶのに対し、町人が主に居住する地区は「瀬高町」「細工町」など「町」と呼び、いくつかの町を束ねて「本町組」「瀬高町組」という二つの町組が形成される。町組を統括するのは別当と年行司である。

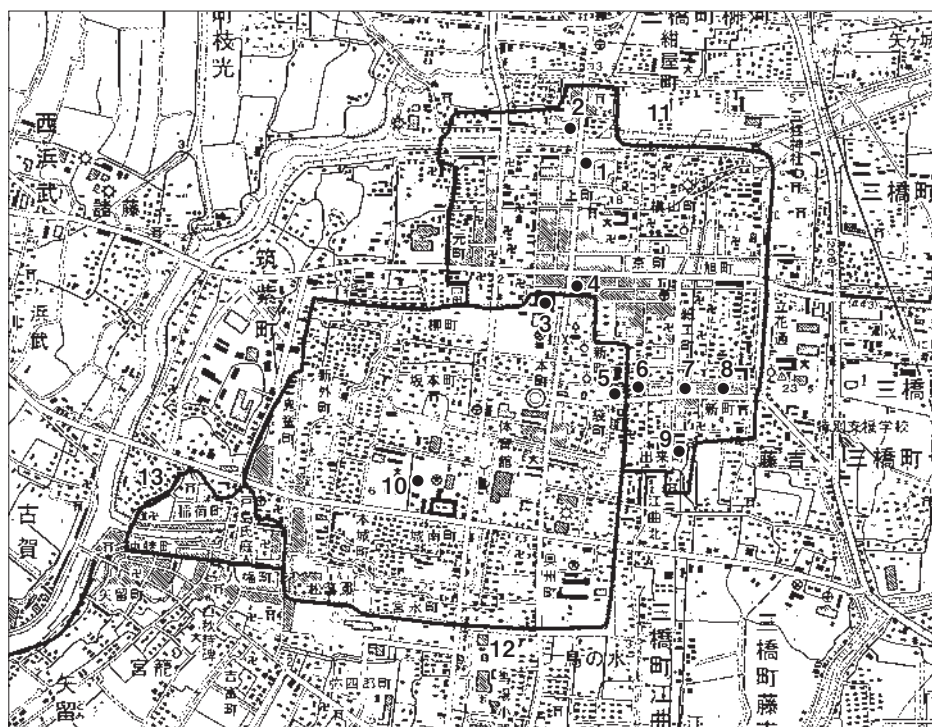
上町遺跡は柳河町の中でも本町組に属する町人地上町にあたる。近世の柳川城下町では、武家居住区や寺社地を除く一般の町人地が、一本の通りを挟んで町（チョウ）を組織する、いわゆる両側町の構成をとる。上町の中心を走る上町通りは北限に出の橋を基点として、南へ延び中町通りへ繋がる。この、上町通りの北の基点である出の橋は、柳川城の「総郭」の北口に位置する重要な城門であり、柳川城は矢部川の分流である沖端川・ニッ川・塩塚川の3河川と、南側の有明海海岸線によって囲まれる範囲を「総郭」とする。

また、出の橋は、陸上・水上交通の発着および中継点として、近接する本船津町・新船津町などとともに、その周辺は荷役や物資の輸送・取引きにより、活気を帯びていたと考えられる。その活気あふれる出の橋に程近い場所に、本調査地は所在する。

今回、報告する上町遺跡では東側で柳川市教育委員会が第1次調査を行った。

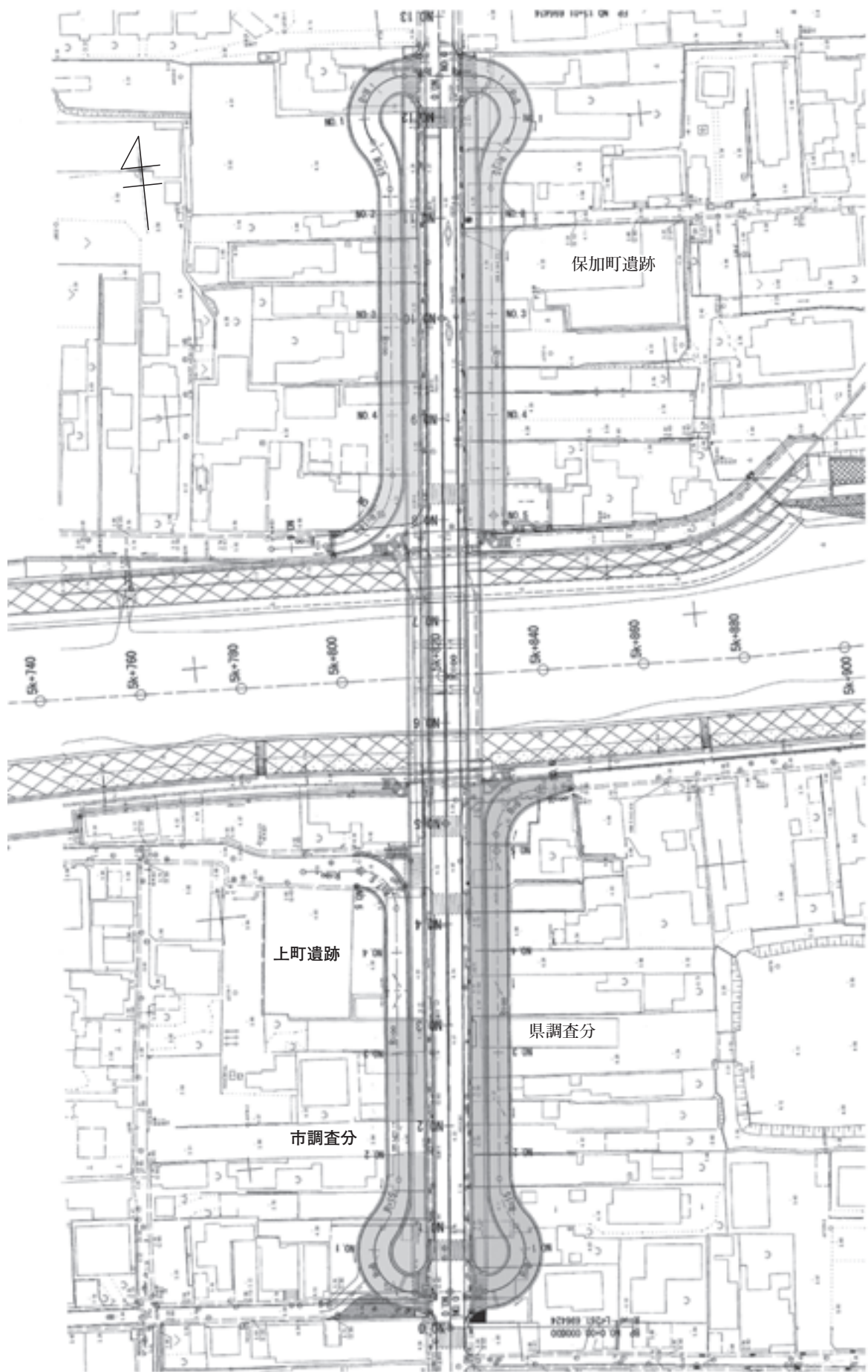
第1次調査では、17世紀以降～幕末にかけての土坑7基、溝2条、石積遺構などの遺構を検出している。溝は排水機能を目的とした遺構で、集水枡があり、そこに向かって伸びる竹樋が配置されている。出土遺物では肥前産の近世陶磁器・軒丸瓦、洪武通宝などの銅銭と木製品が出土している。木製品の中には下駄や曲げ物・漆碗・屋号の書かれた木札など町人生活の一端を示すものがある。

このように柳川市内中心部での発掘調査では、17世紀～19世紀にかけて遺構・遺物が集中して出土する。今後の調査により、柳川城下町の武家屋敷や町屋敷などの様相が新たに判明してくるのではないと思われる。



- 1 上町遺跡
- 2 保加町遺跡
- 3 本町遺跡
- 4 京町遺跡
- 5 本町袋町遺跡
- 6 南長柄町遺跡
- 7 細工町遺跡
- 8 新町遺跡
- 9 出来町遺跡
- 10 柳川城址
- 11 柳河（城下町）
- 12 城内（御家中）
- 13 沖端（港町）

第2図 周辺遺跡分布図（1/25,000）



第3図 上町遺跡・保加町遺跡詳細図（1/1,000）

西



南

西

Ⅲ 調査の内容

上町遺跡の発掘調査は、平成27年5月13日から重機による表土掘削を開始した。今回の調査では、福岡県教育委員会と、柳川市教育委員会が同時期に調査を行い、県道を隔てて、西側を柳川市教育委員会が発掘調査を実施した。調査区は、北側から1区、2区、3区、4区までとなった。調査にあたっては、道路拡張工事との関係や、安全に考慮し部分的に調査を行った。表土除去後は第1区から遺構検出作業を行い、順次遺構の掘削作業を進めた。遺構密度はそれほど高くはないが、調査区全面にわたっており、全体を1/20縮尺で実測し、各遺構のレベルを入れる作業を行った。また主要遺構については個別に実測図作成を行い、写真撮影も行った。調査が終了したのは平成27年11月12日である。

調査範囲は東西15m、南北60mで、調査面積は580㎡である。検出した主な遺構は、土坑、溝、掘立柱建物、小穴である。出土遺物は、近世陶磁器、青磁、白磁、染付、土師器、瓦質土器、瓦、木製品、銅銭、石製品、金属製品である。

以下、遺構面ごとに個別の遺構および遺物の説明を行う。なお、遺構面については調査時点での、各調査区における遺構面に統一が図られなかったため、本報告の中では各遺構面について再検討を行い、遺構面の統一を図った。調査時の各調査区の遺構面と、報告時の遺構面については表1のとおりである。

調査区及び調査時 遺構面 報告時遺構面 標高	1 区	2 区	3 区	4 区
	第1 遺構面 第2 遺構面	第1 遺構面	第1 遺構面	第1 遺構面
第1 遺構面 3.3m前後	第1 遺構面 第2 遺構面	第1 遺構面	第1 遺構面	第1 遺構面
第2 遺構面 2.8m前後	第3 遺構面	第2 遺構面		第2 遺構面
第3 遺構面 2.5m前後	第4 遺構面 第5 遺構面	第3 遺構面	第2 遺構面	第3 遺構面

第1表 遺構面对応表

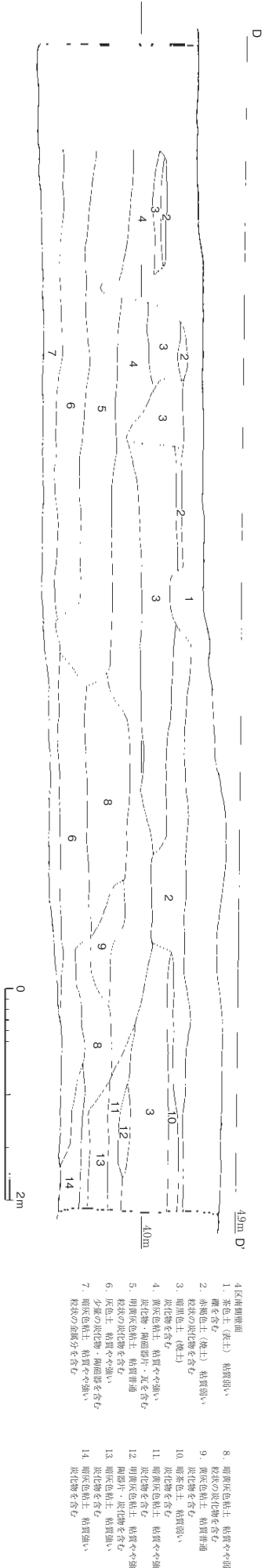
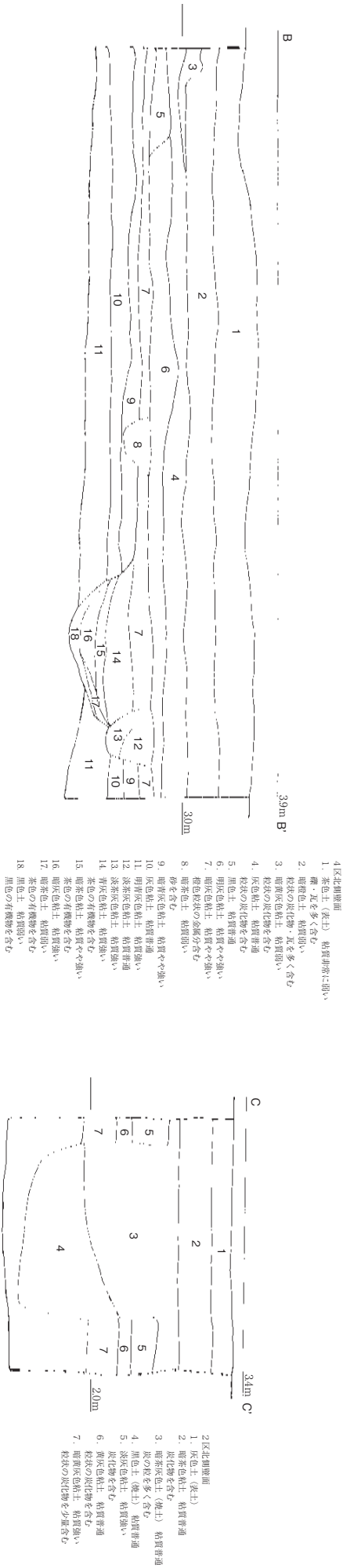
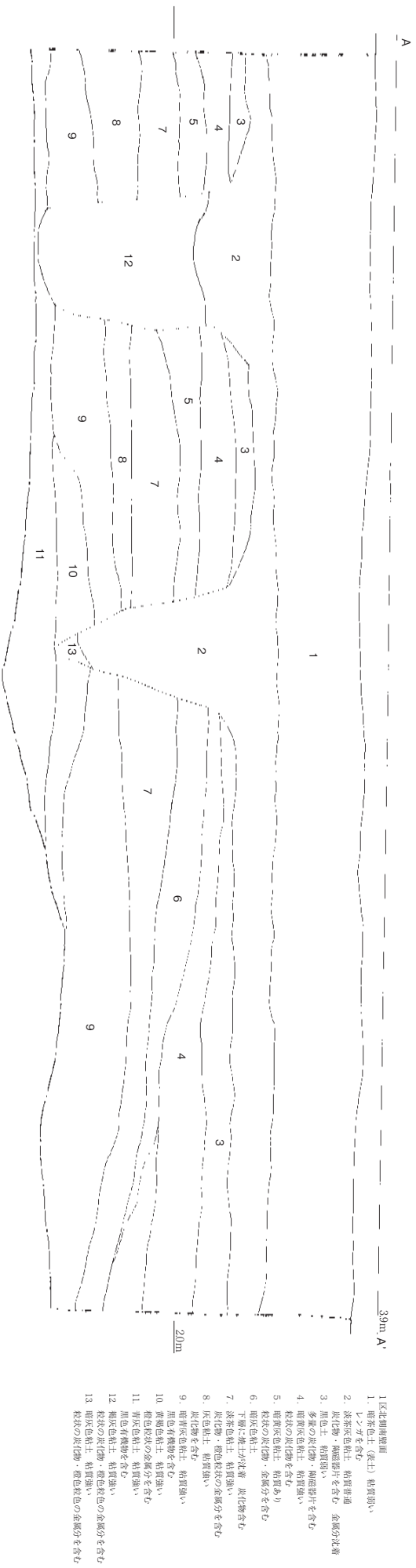
1 第1遺構面

SK-4（第7図）

第1調査区南の中央に位置する不正円形の土坑で、長軸0.9m・短軸0.8m、深さは最深部で0.1mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

出土遺物（第8図）

1は唐津系陶器の溝縁皿である。胎土は明茶色を呈する。外面及び内面は灰釉を施す。口縁部内面は窪み、外反する。



第5図 上町遺跡土層図 (1/40)

SK-6 (第7図)

第1調査区北の中央の南に位置する不正形の土坑で、南側の調査区外へ広がっているため全容は不明である。長軸0.12m以上・短軸1.2m、深さは最深部で0.12mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

出土遺物 (図版8、第8図)

2及び3は唐津系陶器の皿である。2の胎土は明茶色を呈する。口縁部内面に鉄絵による文様の一部を残す。3の胎土は暗灰色を呈する。内面に鉄絵による文様を描く。法量は、復元口径28.4cm、器高5.1cm以上を測る。

4及び5は唐津系陶器の播鉢である。4の胎土は茶色を呈する。口縁部内面及び外面は鉄釉を施す。外面下部はヘラケズリによる成形痕を残す。底部外面は、碁笥底状を呈する。内面は7本一単位の播目を施す。法量は、復元口径23.6cm、器高12.3cm、復元底径7.4cmを測る。5の胎土は暗褐色を呈する。口縁部内面及び外面は、鉄釉を施す。内面は10本一単位の播目を施す。法量は、復元口径32.4cmを測る。

SK-13 (第7図)

第1調査区北の北東に位置する隅丸方形の土坑で、長軸1.1m・短軸0.8m、深さは最深部で0.11mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

出土遺物 (図版8、第8図)

6及び7は、唐津系陶器の皿である。6の胎土は、明褐色を呈する。口縁部は波状を呈する。胴部外面下位は、露胎である。胎土目段階。法量は、復元口径12.4cm、器高4.3cm、復元高台径5.4cmを測る。7の胎土は、暗灰色を呈する。外面下部は露胎である。口縁は、波状口縁を呈する。内面に鉄釉による草花文を描く。絵唐津系。法量は、復元口径14.5cm、器高4.9cm、復元高台径4.5cmを測る。

8は陶器の播鉢である。胎土は暗灰色を呈する。口縁部内面及び外面のみに鉄釉を施す。内面に6本一単位の播目を施す。法量は、復元口径27.6cm、器高13.3cm、復元底径9.1cmを測る。

SK-15 (第7図)

第1調査区北の北東に位置する円形の土坑で、北側、東側の調査区外へ広がっているため全容は不明である。長軸1.25m以上・短軸0.8m以上、深さは最深部で0.08mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

SK-19 (第7図)

第1調査区南の中央に位置する不定形の土坑で、隣接する土坑に掘削を受けており全容は不明である。長軸0.95m以上・短軸0.7m以上、深さは最深部で0.15mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

出土遺物 (第10図)

9及び10は唐津系陶器の甕である。9の胎土は灰褐色を呈する。口縁は、L字に外反する。内面及び外面は、緑色の釉を施す。10の胎土は灰褐色を呈する。内面及び外面は、部分的に灰釉を施し、底部外面は釉を塗布せず、ケズリによる成形痕を残す。9と同一個体の可能性有。法量は、復元底

径20.4cmを測る。

SK-28（第7図）

第1調査区北の北西に位置する不正形の土坑で、隣接する土坑に掘削を受けており全容は不明である。長軸2.2m・短軸1.1m以上、深さは最深部で0.1mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

出土遺物（第10図）

11は漳州窯系青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。見込み及び口縁部内面に圈線を引く。外面に草花文を描く。

SK-29（第9図）

第1調査区北の南西隅に位置する不正形の土坑で、隣接する土坑に掘削を受けており全容は不明である。長軸1.65m以上・短軸1.3m以上、深さは最深部で0.08mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

出土遺物（第11図）

12は唐津系陶器の碗である。胎土は淡褐色を呈する。口縁は外反する。法量は、復元口径9.6cm、を測る。

SK-31（第9図）

第1調査区北の北東に位置する楕円形の土坑で、東側の調査区外へ広がっているため全容は不明である。長軸1.0m以上・短軸0.75m以上、深さは最深部で0.15mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

SK-108（第9図）

第4調査区中央に位置する不定形の土坑で、長軸1.1m・短軸0.5m、深さは最深部で0.3mを測る。底部は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

SK-109（第9図）

第4調査区中央、SK-108の東に位置する不定形の土坑で、長軸1.0m・短軸0.4m、深さは最深部で0.25mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

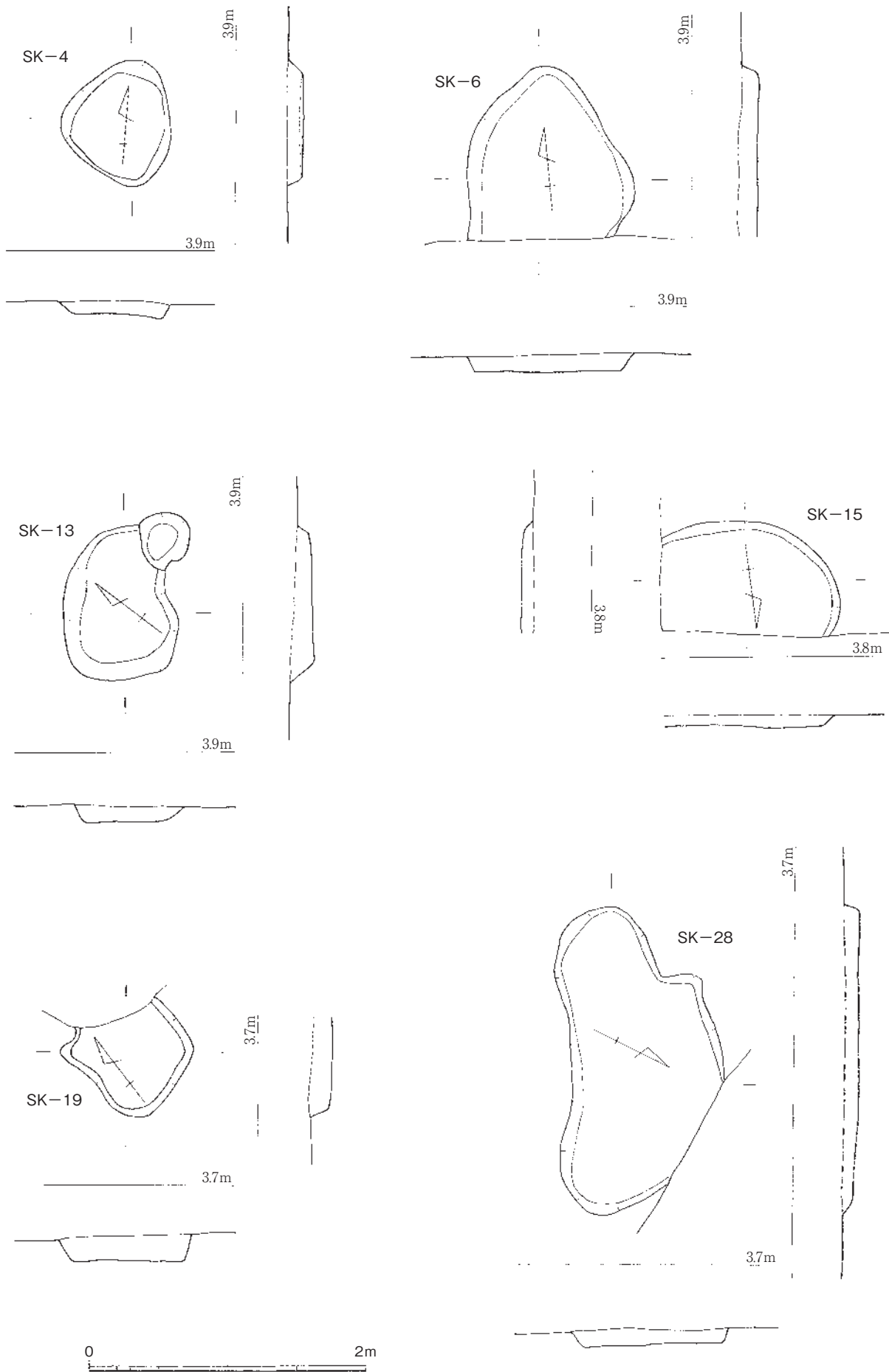
出土遺物（第11図）

13は中国産白磁の皿である。胎土は灰白色を呈する。口縁端部が外反し、丸く肥厚する。また、口縁外面に一部煤の様な痕跡が残る。法量は、復元口径13.0cm、器高2.18cm、復元高台径7.0cmを測る。

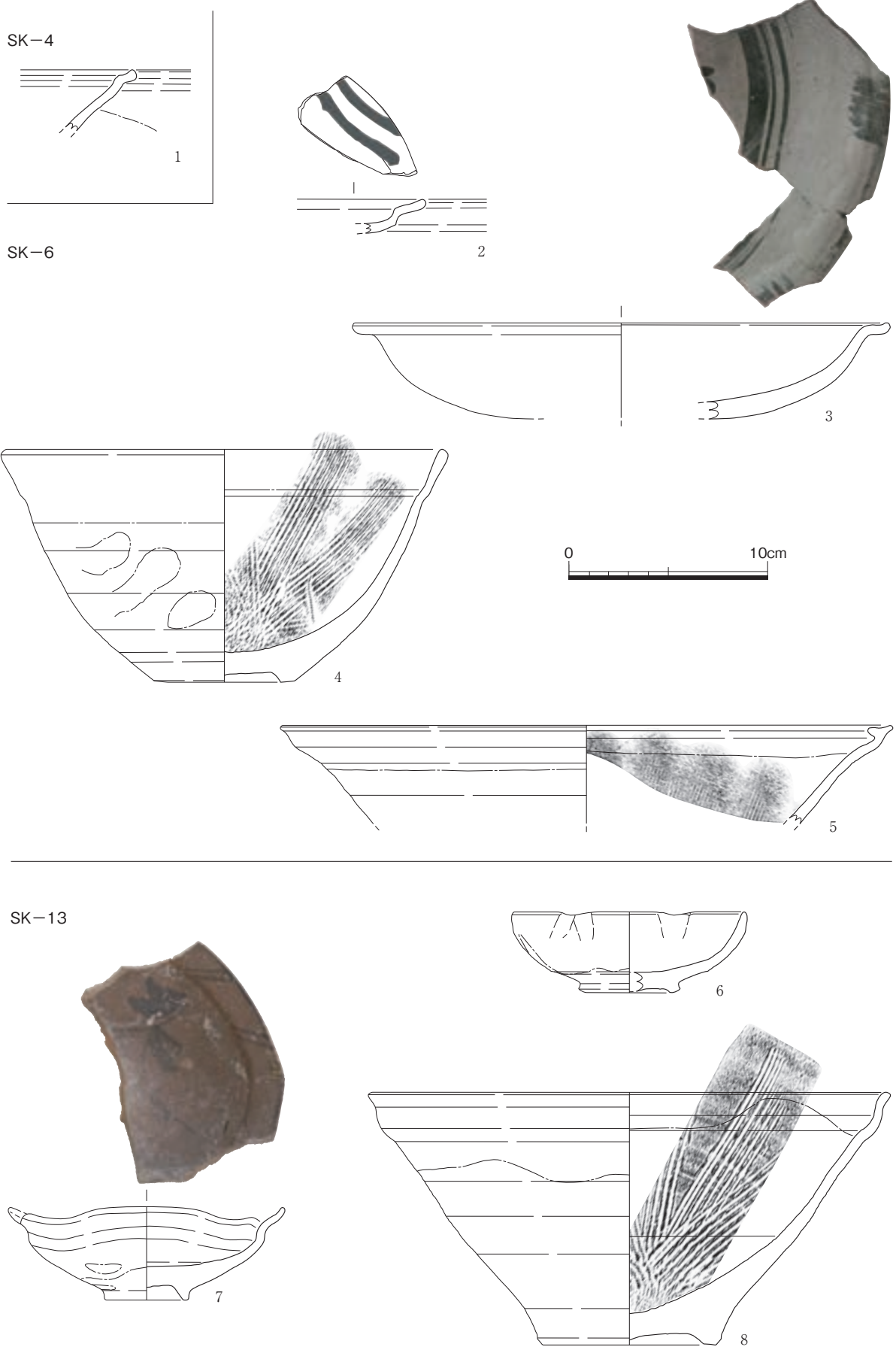
SK-111（第9図）

第4調査区中央、SK-109の南に位置する円形の土坑で、長軸0.6m・短軸0.5m、深さは最深部で0.4mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

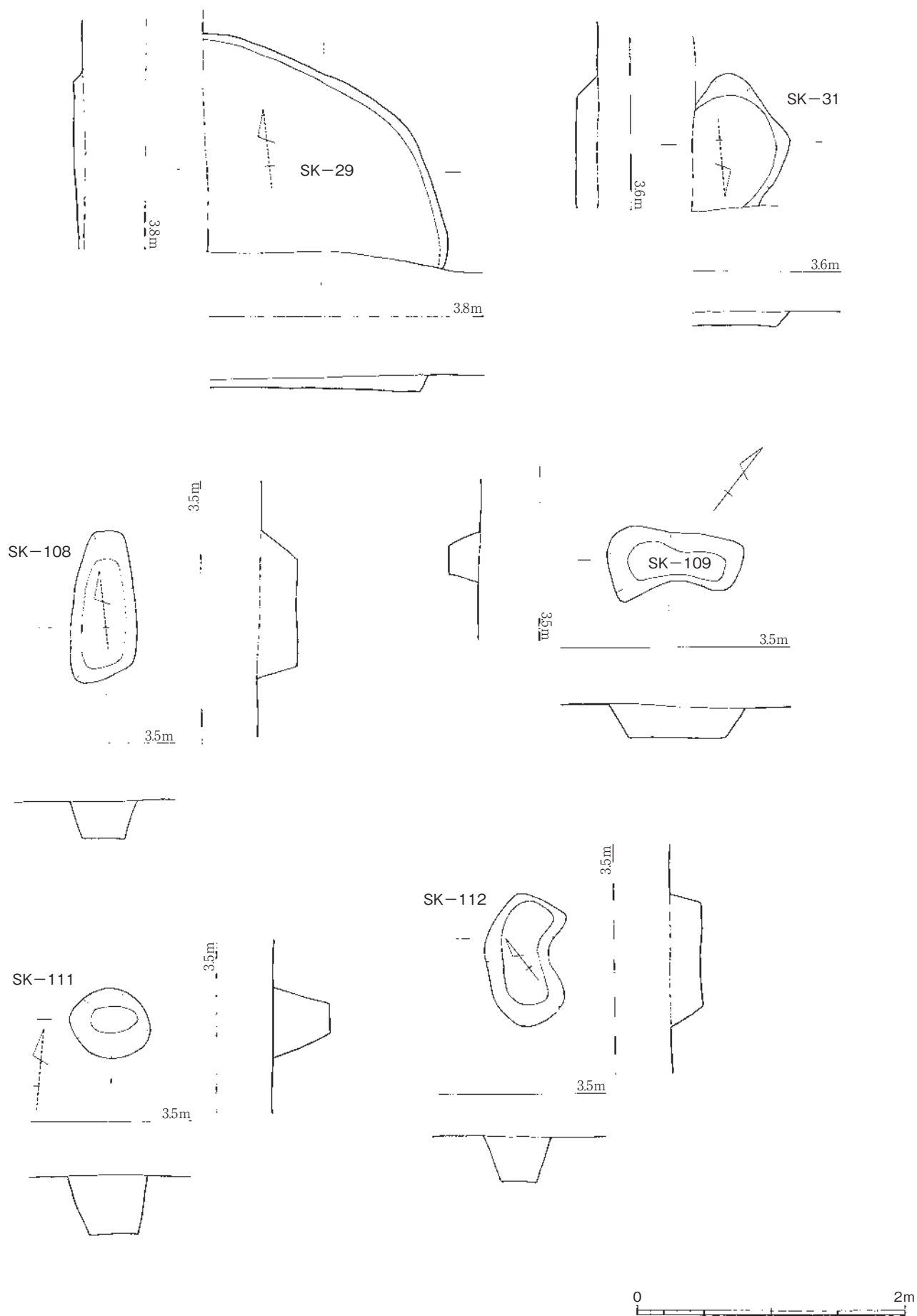
出土遺物（第11図）



第7図 SK-4・6・13・15・19・28 実測図 (1/40)



第8図 SK-4・6・13 出土遺物実測図 (1 / 3)



第9図 SK-29・31・108・109・111・112 実測図 (1/40)

14は瓦質土器の甕である。胎土は淡白褐色を呈する。口縁は直立し、口縁端部は水平をなす。内面及び外面は、ナデ及びハケによる成形痕を残す。

SK-112 (第11図)

第4調査区中央、SK-111の南に位置する不定形の土坑で、長軸1.0m・短軸0.5m、深さは最深部で0.3mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

出土遺物 (図版8、第10図)

15は土師器の皿である。胎土は淡灰黄色を呈する。口縁部内面及び外面に、わずかに煤が付着する。灯明皿として使用か。内面及び外面は、ヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は、糸切り痕を残す。法量は、口径6.4cm、器高1.4cm、底径4.0cmを測る。

SK-121 (第11図)

第4調査区西に位置する不定形の土坑で、長軸1.7m・短軸1.5m、深さは最深部で1.3mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは急な傾斜を呈する。

出土遺物 (第10図)

16は中国産白磁の輪花皿である。胎土は黄灰色を呈する。法量は、復元口径8.4cm、器高2.5cm、復元高台径4.0cmを測る。

SK-123 (第11図)

第4調査区西に位置する不定形の土坑で、長軸1.7m・短軸1.5m、深さは最深部で1.3mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは急な傾斜を呈する。

出土遺物 (図版8、第10図)

17は景德鎮系の青花碗である。胎土は灰白色を呈する。口縁部外面に圈線を引く。外面に文様を描く。

18は現川窯系陶器の小坏である。胎土はにぶい橙色を呈する。外面下部は露胎である。蚩手。19は唐津系陶器の皿である。胎土は明褐色を呈する。外面下部は露胎である。底部外面は、碁笥底状を呈する。内面は鉄釉による唐草文を描く。絵唐津。法量は、復元口径12.8cm、器高3.7cm、復元底径4.5cmを測る。20は唐津系陶器碗である。胎土は明褐色を呈する。

21は中国産白磁の輪花皿である。胎土は灰白色を呈する。法量は、復元口径10.0cm、器高3.0cm、復元高台径4.0cmを測る。

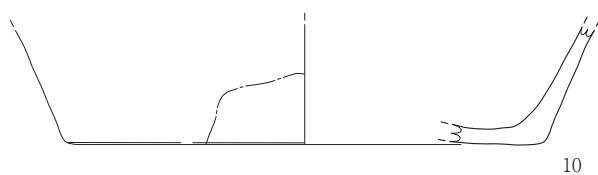
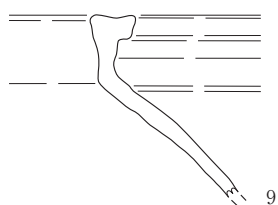
SK-126 (第11図)

第4調査区西に位置する不定形の土坑で、長軸1.6m・短軸1.1m、深さは最深部で1.45mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは急な傾斜を呈する。

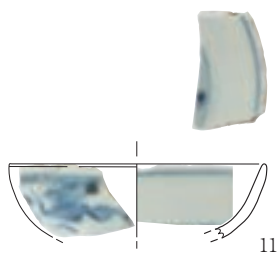
出土遺物 (図版8、第10図)

22は唐津系陶器の天目碗である。胎土は淡灰黄色を呈する。内面及び外面に鉄釉を施し、外面下部はケズリによる成形痕を残す。無釉である。口縁は端反碗の形状を呈する。法量は、復元口径11.0cm、器高5.2cm、復元高台径4.4cmを測る。

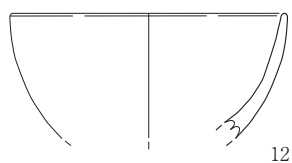
SK-19



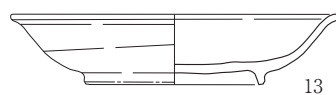
SK-28



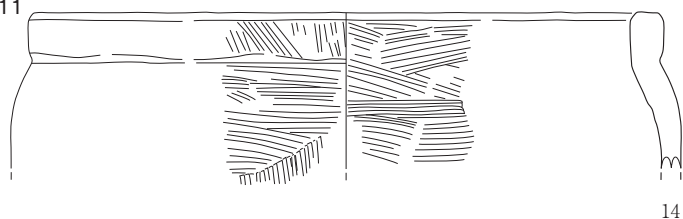
SK-29



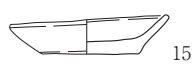
SK-109



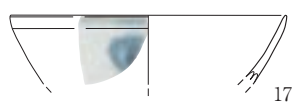
SK-111



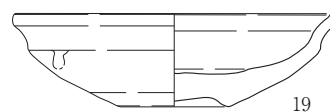
SK-112



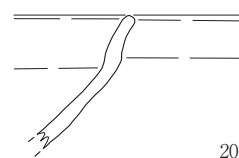
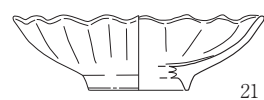
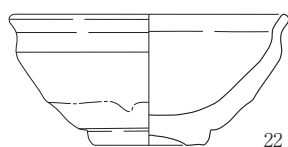
SK-123



SK-121



SK-126



第10図 SK-19・28・29・109・111・112・121・123・126 出土遺物実測図 (1 / 3)

SK-127 (図版2、第11図)

第4調査区西に位置する楕円形の土坑で、長軸1.0m・短軸0.85m、深さは最深部で0.4mを測る。

出土遺物 (図版8、第12～14図)

23は肥前系磁器染付の小坏である。胎土は灰白色を呈する。外面に網目文を描く。

24は陶器の小坏である。胎土は灰色を呈する。外面下部は露胎である。法量は、復元口径6.0cm、器高6.0cm、復元底径8.2cmを測る。

25は白磁肥前系の小碗である。胎土は灰白色を呈する。法量は、復元口径7.4cmを測る。

26は肥前系白磁の碗である。胎土は白色を呈する。法量は、復元口径8.9cm、器高4.8cm、復元高台径3.8cmを測る。

27は肥前系青磁の碗である。胎土は灰白色を呈する。法量は、復元口径13.6cmを測る。

28から33は肥前系磁器染付の碗である。28の胎土は灰白色を呈する。外面に雨降文を描く。外面の一部に煤が付着する。法量は、復元口径8.0cmを測る。29の胎土は灰白色を呈する。外面に草花文を描く。法量は、復元口径11.6cmを測る。30の胎土は灰白色を呈する。高台外面に圈線を引く。外面に梅樹雪輪文を描く。法量は、口径10.1cm、器高4.9cm、高台径4.9cmを測る。31の胎土は灰白色を呈する。畳付は砂が付着する。内面に煤が付着する。高台外面に圈線を引く。高台内面に渦福を描く。外面に梅樹雪輪文を描く。法量は、口径9.7cm、器高5.3cm、高台径4.2cmを測る。32の胎土は灰白色を呈する。畳付は砂が付着する。見込みに菊花文を描く。内面に網目文を描く。外面に二重網目文を描く。高台内面に渦福を描く。33の胎土は灰白色を呈する。畳付は砂が付着する。高台外面上部に圈線を引く。内面に渦福を描く。外面に草花文、丸に菊文を描く。法量は、復元口径10.2cm、器高5.3cm、復元高台径4.3cmを測る。

34は肥前系磁器の色絵碗である。胎土は灰白色を呈する。見込みに2条、内面上部、外面下部に1条の圈線を引く。外面に色絵で獅子、草花文を描く。

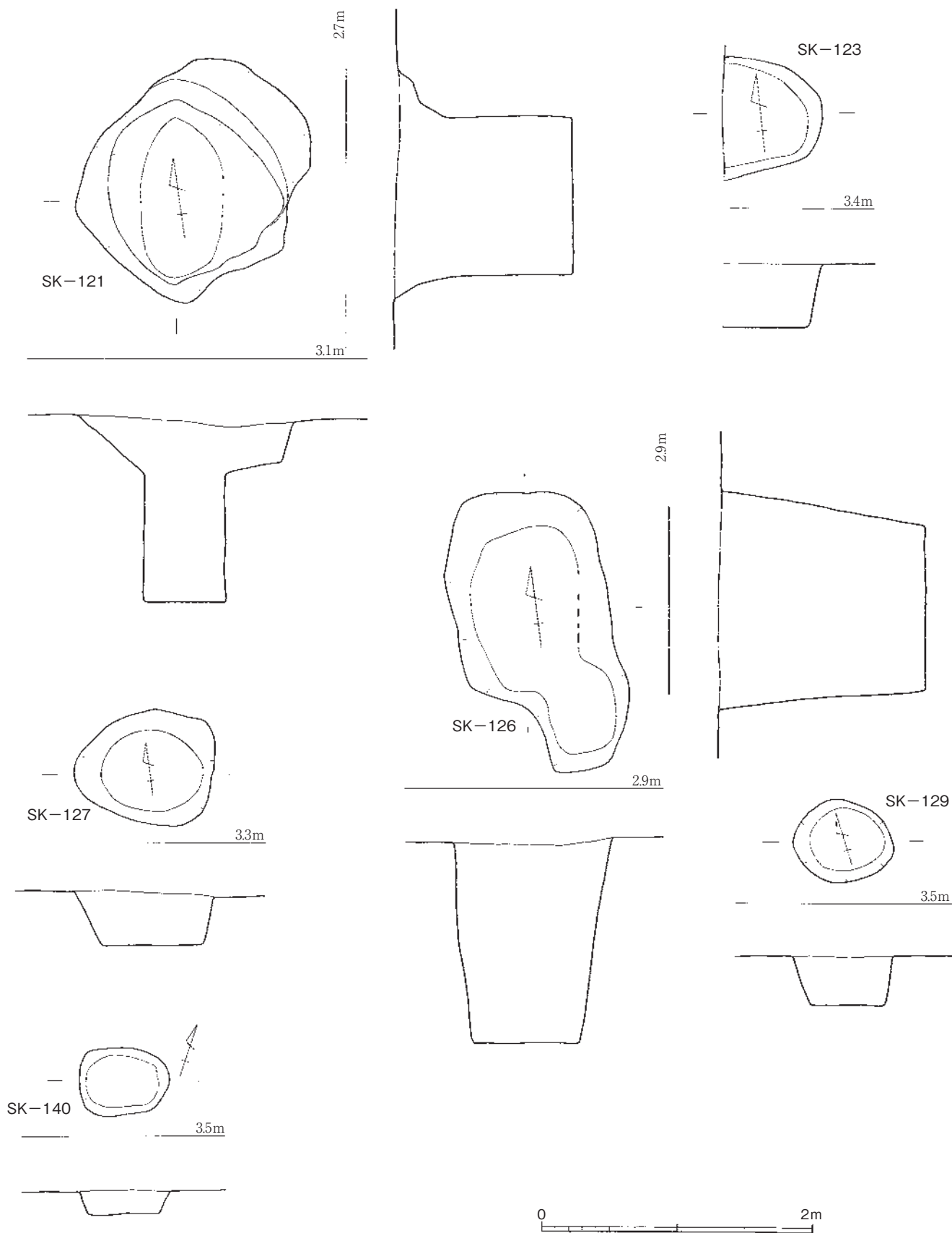
35は肥前系京焼風陶器の碗である。胎土は浅黄色を呈する。高台は露胎である。外面に鉄釉による山水文を描く。法量は、復元口径8.4cm、器高5.1cm、高台径3.8cmを測る。

36は肥前系陶器の台付皿である。胎土はにぶい黄灰色を呈する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。見込みに緑灰色の灰釉で、竹笹文の一部が見られる。法量は、復元高台径9.0cmを測る。

37は青花^{ツバ}の鐏皿である。胎土は灰白色を呈する。外面上部に圈線を引く。内面上部に草文を描く。外面に草花文を描く。

38から41は、陶器の碗である。38の胎土は灰白色を呈する。内面及び外面にハケ目文様を描く。肥前系の現川焼である。法量は、復元口径8.0cmを測る。39の胎土は灰白色を呈する。法量は、復元口径8.2cmを測る。40は肥前系京焼風陶器である。胎土は灰白色を呈する。高台は露胎である。見込みに鉄釉による山水文を描く。法量は、復元口径10.0cm、器高4.1cm、高台径3.4cmを測る。41は唐津系陶器である。胎土は淡茶褐色を呈し、外面下部は露胎である。法量は、復元高台径5.7cmを測る。

42は肥前系染付の角皿である。胎土は灰白色を呈し、型打ち成形である。内面及び高台内外面に圈線を引く。見込みに手書きの五弁花文を施文する。内面に草花文を描く。口唇部に口鍔装飾を施す。外面唐草文を描く。高台内面に「大明年製」を描く。芙蓉手的な文様の配置である。法量は、復元口径9.05cm、器高2.05cm、復元高台径5.8cmを測る。



第11図 SK-121・123・126・127・129・140 実測図 (1/40)

43は青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。畳付端部には荒い砂が付着する。見込み及び口縁部内面に圈線を引く。見込みに蛟と推察される文様を描く。法量は、復元口径10.3cm、器高2.2cm、復元高台径5.9cmを測る。

44及び45は肥前系磁器染付の皿である。44の胎土は灰白色を呈する。畳付は露胎である。内面に文様を描く。外面に唐草文を描く。法量は、復元口径12.0cm、器高3.7cm、復元高台径5.95cmを測る。45の胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。見込みに二重圈線を引く。見込みに五弁花文のコンニャク印判を施文する。内面に竹垣及び菊花文を描く。口唇部に口鏤装飾を施す。外面に唐草文を描く。高台内面に「大明年製」を描く。焼継ぎの痕跡が確認され、鉛ガラス部分に緑彩、その周辺に赤絵装飾が施されている。法量は、口径13.35cm、器高3.15cm、高台径8.25cmを測る。

46は朝鮮産白磁の皿である。胎土は灰白色を呈する。見込み及び畳付に、胎土目痕が残る。法量は、復元高台径8.0cmを測る。

47は関西系陶器の皿である。胎土は灰白色を呈する。内面は目跡が残る。外面は露胎である。内面に鉄釉による竹笹文を描く。法量は、復元高台径8.0cmを測る。

48は肥前系磁器の色絵の大鉢である。胎土は灰白色を呈する。口縁は輪花状を呈す。内面に色絵による舞鶴文、松を描く。外面に赤絵による桜を描く。法量は、復元口径24.0cm、器高6.9cm、復元高台径12.4cmを測る。

49及び50は肥前系色絵磁器の大皿である。49の胎土は灰白色を呈する。見込みは一部釉が落ちている。畳付には砂が付着する。見込みに「辛酉庚申押」を記す。法量は、復元高台径17.4cmを測る。50の胎土は灰白色を呈する。内面及び外面の一部に煤が付着している。内面に花文、窓内に赤絵による文様を描く。

51は唐津系陶器の壺である。胎土は暗灰色を呈する。内面及び外面に鉄釉を施す。口縁部に胎土目が残る。法量は、復元口径16.0cmを測る。

52は肥前系染付の団重の蓋である。胎土は灰白色を呈する。口縁端部は、釉剥ぎしている。外面に、円圈文を描く。法量は、復元口径10.2cmを測る。

53は肥前系染付の蓋物である。胎土は灰白色を呈する。口縁端部は露胎である。外面に山水文を描く。法量は、復元口径8.1cm、器高6.65cm、復元底径4.85cmを測る。

54は肥前系染付の蓋物である。胎土は灰白色を呈する。口縁端部は釉剥ぎする。畳付は砂が付着する。口縁部外面、胴部下位、高台に圈線を引く。外面に菖蒲、梅を描く。法量は、復元口径9.95cm、器高5.35cm、高台径5.8cmを測る。133と同一固体である。

55は肥前系染付の紅猪口である。胎土は灰白色を呈する。外面下部に草花文を描く。法量は、復元口径3.0cm、器高2.3cm、復元高台径2.4cmを測る。

56は肥前系白磁の紅猪口である。胎土は灰白色を呈する。法量は、復元口径6.3cm、器高3.3cm、復元高台径3.0cmを測る。

57は陶器の小播鉢である。胎土は赤褐色を呈する。内面は10本一単位の播目を施す。法量は、復元口径7.8cm、器高2.6cm、復元底径2.1cmを測る。

58は土師質の焼塩壺である。胎土は黄褐色を呈する。内面は指ナデによる成形痕を残す。外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、復元底径5.5cmを測る。

59は関西系陶器の土瓶である。胎土は灰白色を呈する。外面下半は露胎である。外面上部に草文

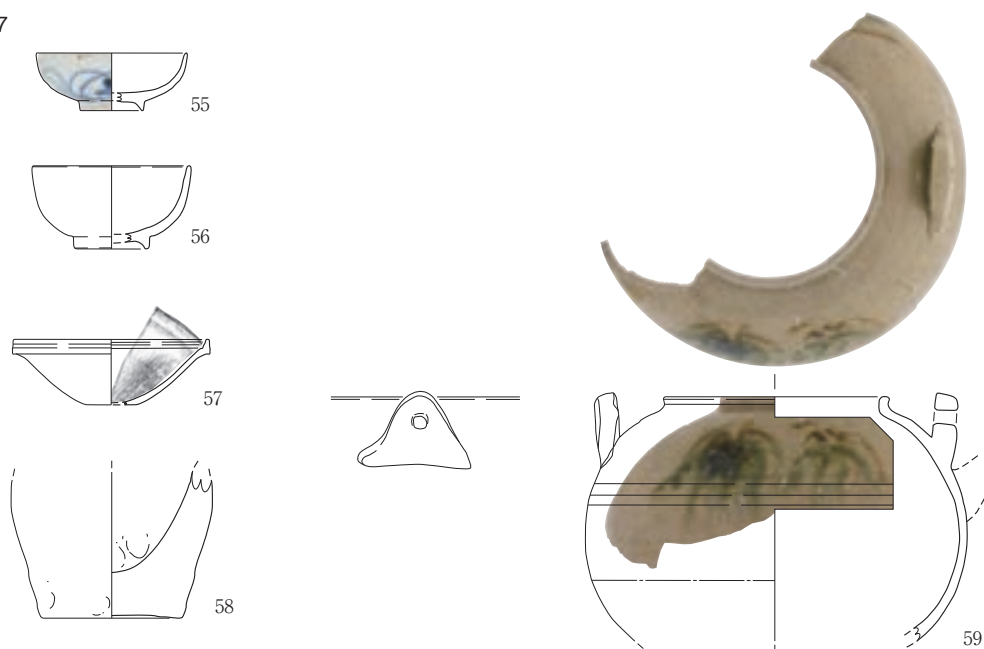


第12図 SK-127 出土遺物実測図① (1 / 3)

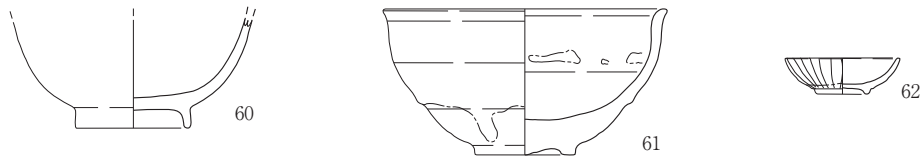


第13図 SK-127 出土遺物実測図② (1 / 3)

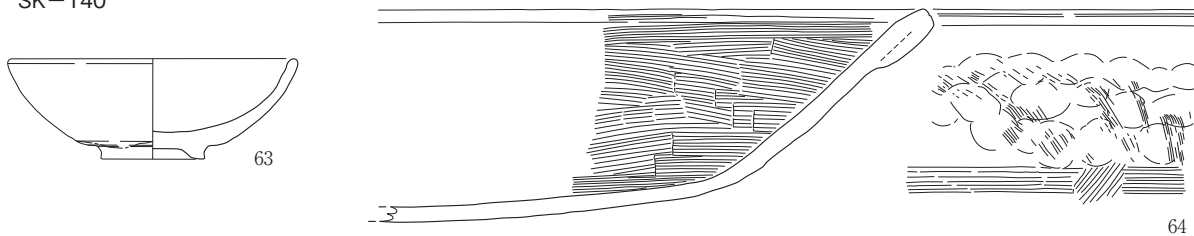
SK-127



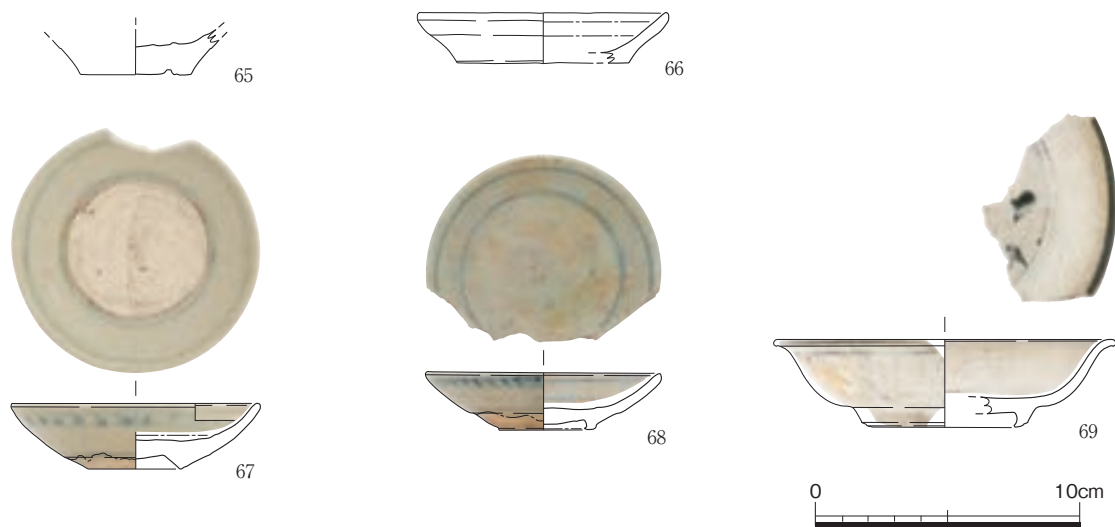
SK-129



SK-140



SK-318



第14図 SK-127・129・140・318 出土遺物実測図（1 / 3）

を描く。法量は、口径9.0cmを測る。

SK-129（第11図）

第4調査区南に位置する円形の土坑で、長軸0.7m・短軸0.6m、深さは最深部で0.35mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

出土遺物（図版8、第14図）

60は肥前系白磁の碗である。胎土は灰白色を呈する。法量は、高台径4.5cmを測る。

61は唐津系陶器の天目碗である。胎土は灰色を呈する。内面及び外面中部は鉄釉を施し、外面下部は無釉である。法量は、復元口径11.3cm、器高5.8cm、復元高台径4.0cmを測る。

62は肥前系磁器の紅皿である。胎土は白色を呈する。外面下部は無釉である。法量は、復元口径4.6cm、器高1.4cm、復元高台径2.0cmを測る。

SK-140（第11図）

第4調査区南東に位置する楕円形の土坑で、長軸0.7m・短軸0.5m、深さは最深部で0.2mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

出土遺物（第14図）

63は唐津系陶器の皿である。胎土は淡褐色を呈する。高台は無釉である。法量は、復元口径11.5cm、器高4.0cm、復元高台径4.1cmを測る。

64は瓦質土器の土鍋である。胎土は暗灰色を呈する。内面はハケ目後ヨコナデによる成形痕を残す。外面はハケ目及び指押えによる成形痕を残す。外面に煤が付着する。

SK-163（第15図）

第4調査区北に位置する不正形の土坑で、長軸1.1m・短軸0.7m、深さは最深部で0.35mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは急な傾斜を呈する。

SK-318（図版2、第15図）

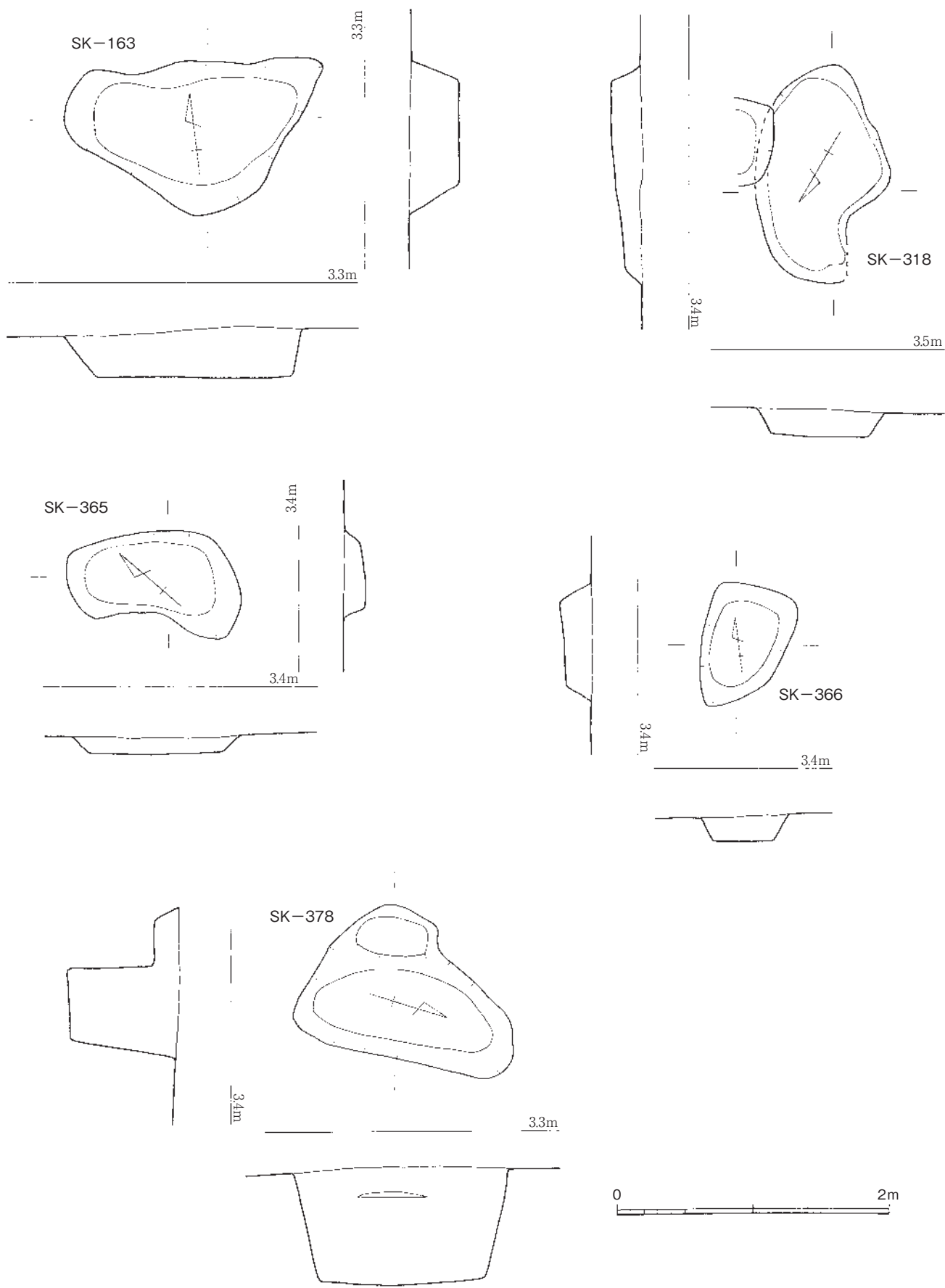
第4調査区中央に位置する不正形の土坑で、長軸1.1m・短軸0.7m、深さは最深部で0.35mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは急な傾斜を呈する。

出土遺物（第14図）

65は土師器の坏である。胎土は明褐色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、復元底径4.4cmを測る。

66は土師器の小皿である。胎土は淡褐黄色を呈する。内面及び外面は回転ヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、復元口径10.0cm、器高2.0cm、復元底径10.0cmを測る。

67から69は漳州窯系青花の皿である。67の胎土は浅黄色を呈する。見込み及び外面下部、底部は露胎である。口縁部内面、見込みに圈線を引く。外面口縁部文様を描く。底部は碁笥底状を呈す。法量は、口径9.9cm、器高2.6cm、底径3.7cmを測る。68の胎土は灰白色を呈する。外面下部は露胎である。畳付に一部釉垂れが残る。見込みに圈線を引く。外面口縁部に文様を描く。底部は碁笥底状を呈す。法量は、口径9.4cm、器高2.3cm、底径3.9cmを測る。69の胎土は灰白色を呈する。外面下部は露胎である。



第15図 SK-163・318・365・366・378 実測図 (1/40)

見込みに二重圏線を引く。見込みに草文を描く。口縁部外面に文を描く。法量は、復元口径13.6cm、器高3.5cm、復元高台径6.6cmを測る。

SK-365 (第15図)

第4調査区中央に位置する不正形の土坑で、長軸1.2m・短軸0.6m、深さは最深部で0.3mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

SK-366 (第15図)

第4調査区中央に位置する不正形の土坑で、長軸0.85m・短軸0.6m、深さは最深部で0.2mを測る。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは緩やかに傾斜する。

SK-378 (第15図)

第4調査区東に位置する不正形の土坑で、長軸1.5m・短軸1.1m、深さは最深部で0.9mを測る。底面は全体的に平坦であるが、西部分はテラス状に立ち上がり、急な傾斜を呈する。

SK-506 (第16図)

第3調査区東に位置する不正形の土坑で、東側の調査区外へ広がっているため全容は不明。長軸2.8m以上・短軸2.1m、深さは最深部で0.3mを測る。底面は全体的に平坦であるが、東、西部分はテラス状に立ち上がり、急な傾斜を呈する。

出土遺物 (第17図)

70は唐津系陶器の皿である。胎土は灰色を呈する。内面及び外面に灰釉を施す。畳付は無釉である。見込みに胎土目痕が1ヶ所残る。法量は、高台径3.8cmを測る。

SK-516 (第16図)

第3調査区北西に位置する不正形の土坑で、北側及び東側の調査区外へ広がっているため全容は不明。長軸2.8m以上・短軸0.5m以上、深さは最深部で0.1mを測る。底面は全体的に平坦で、緩やかに傾斜する。

出土遺物 (第17図)

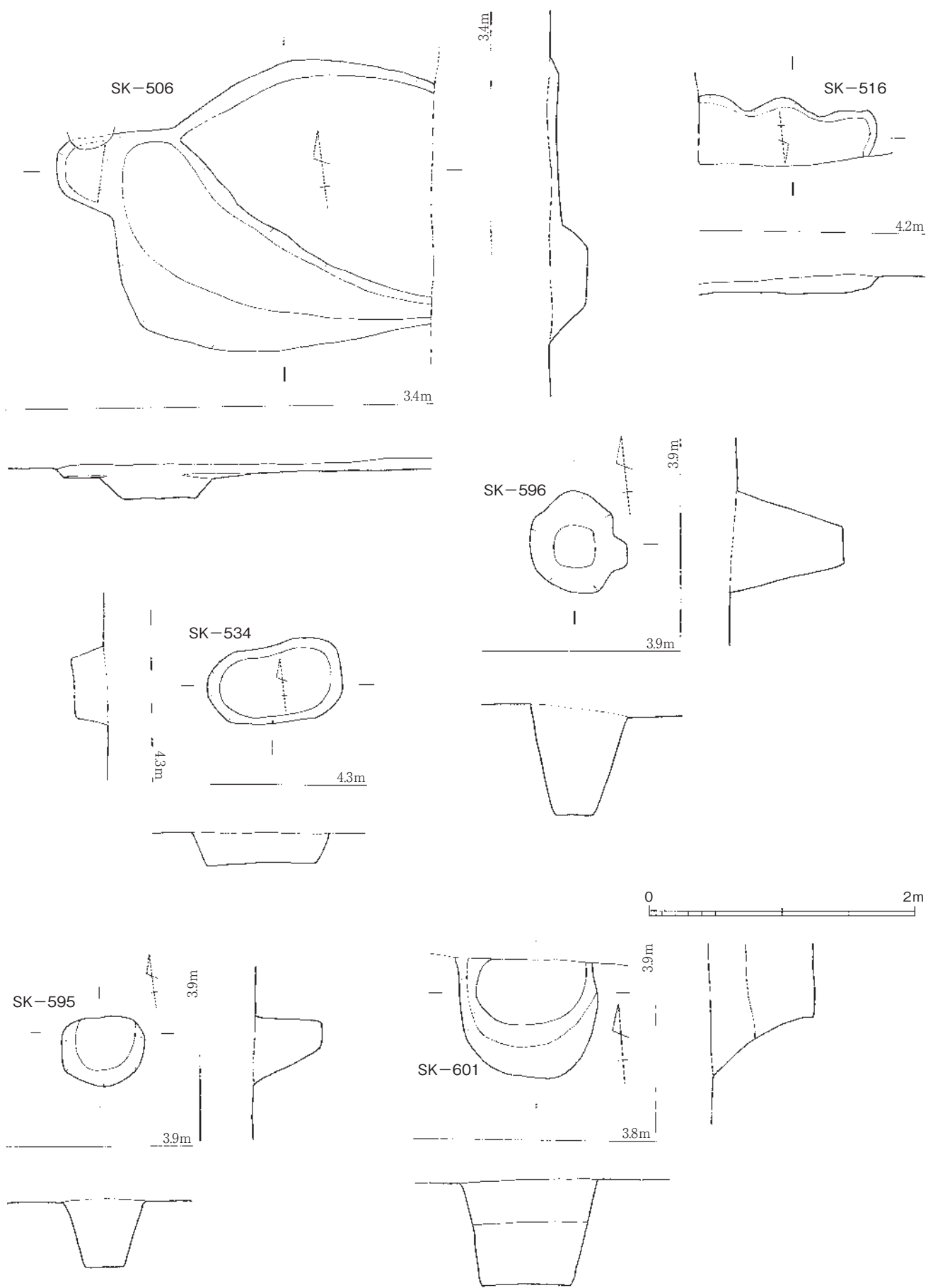
71は漳州窯系青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。畳付及び高台内面は露胎である。外面下部に1条の圏線、見込みの蛇ノ目釉剥ぎの周りに2条の圏線を引く。法量は、復元高台径6.9cmを測る。

SK-534 (第16図)

第3調査区中央に位置する楕円形の土坑で、長軸1.0m・短軸0.6m、深さは最深部で0.2mを測る。底面は全体的に平坦で、緩やかに傾斜し、底部中央に柱痕が残る。

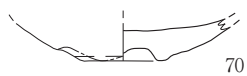
SK-595 (第16図)

第2調査区中央に位置する不定形の土坑で、長軸0.6m・短軸0.5m、深さは最深部で0.5mを測る。

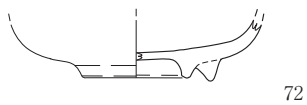


第16図 SK-506・516・534・595・596・601 実測図 (1/40)

SK-506



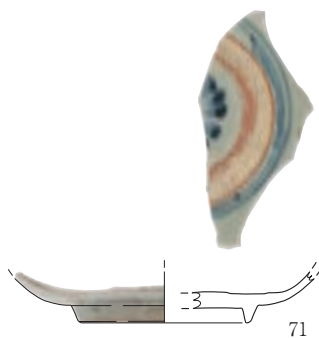
SK-595



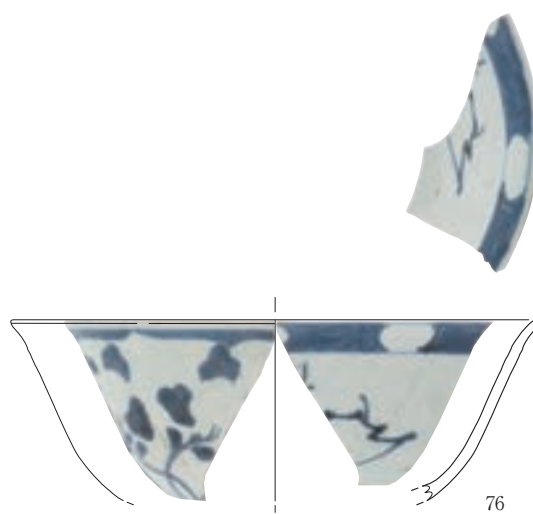
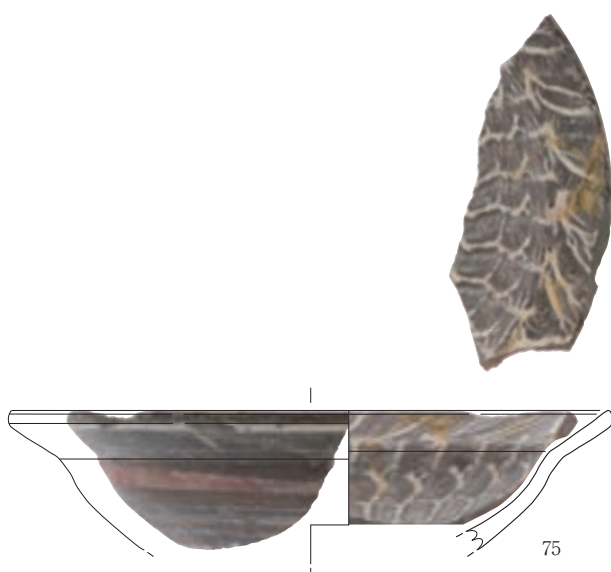
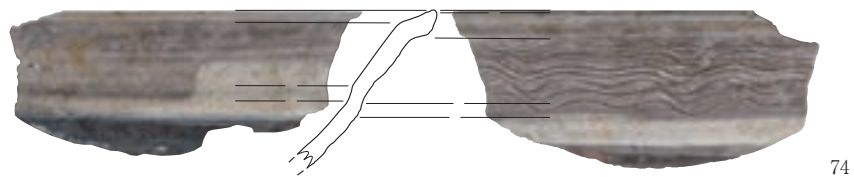
SK-596



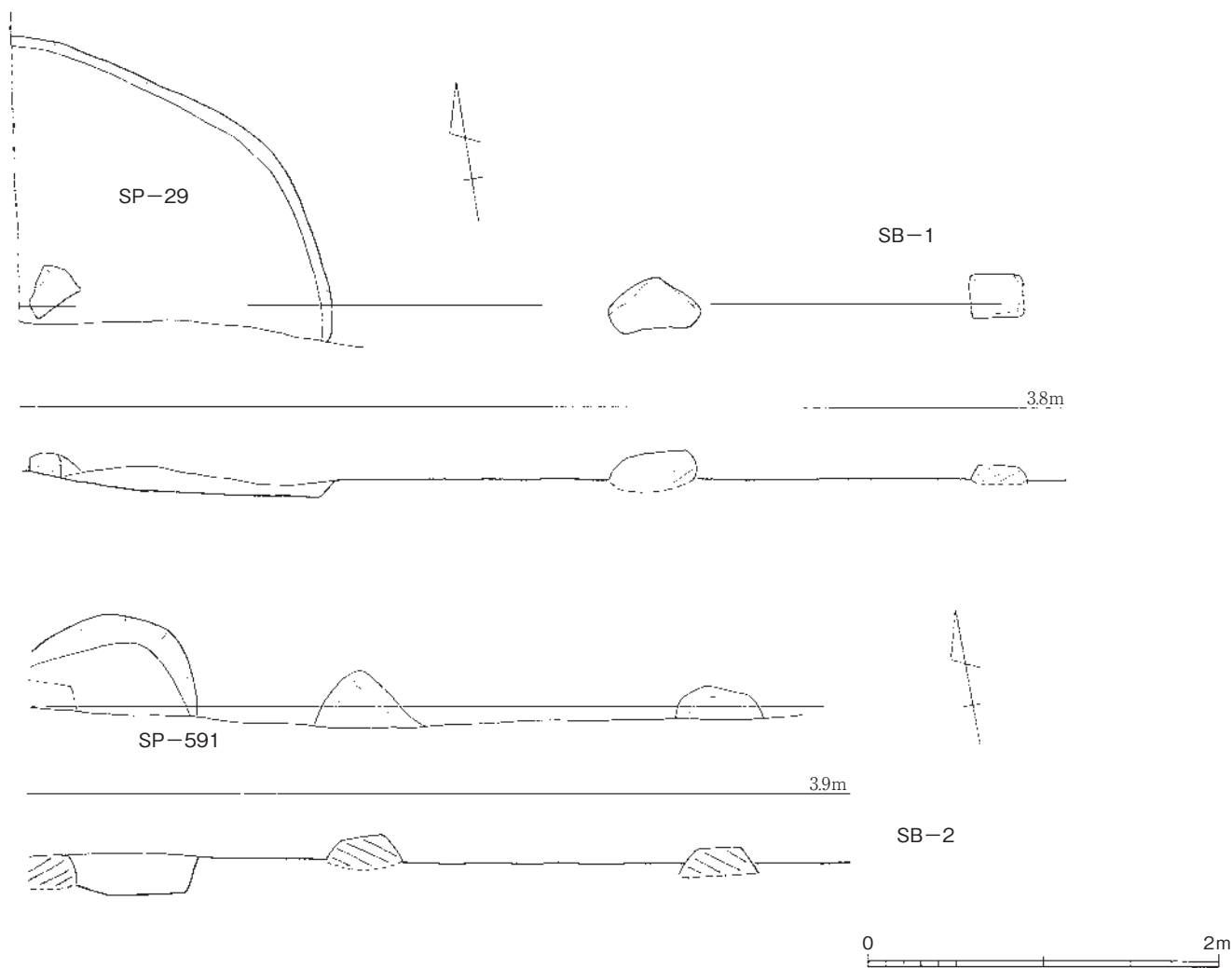
SK-516



SK-601



第17図 SK-506・516・595・596・601 出土遺物実測図（1 / 3）



第18図 SB-1・2実測図（1/40）

底面は全体的に平坦で、緩やかに傾斜する。

出土遺物（第17図）

72は肥前系青磁の香炉である。胎土は白色を呈する。畳付は鉄釉を施す。脚部は一ヶ所のみ残る。

SK-596（第16図）

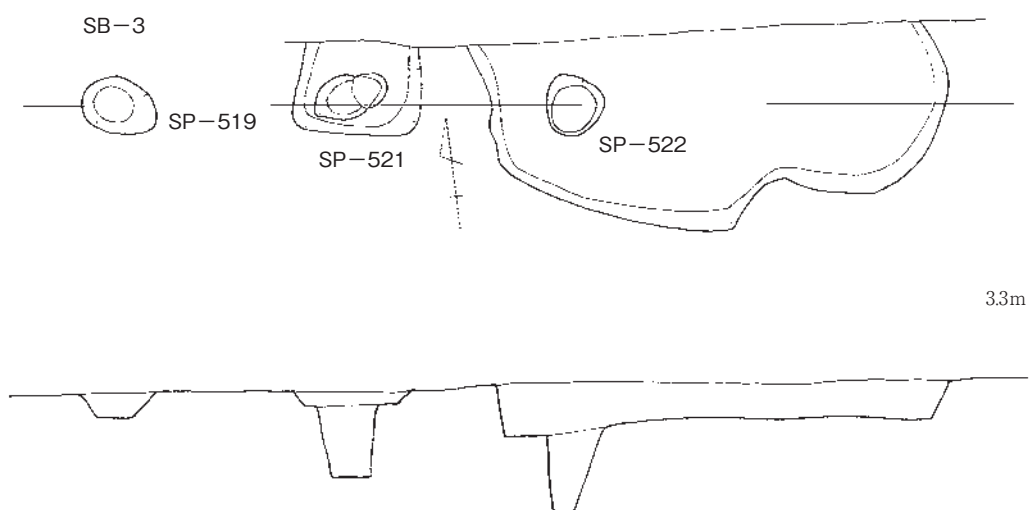
第2調査区中央SK-595の南に位置する不定形の土坑で、長軸0.75m・短軸0.75m、深さは最深部で0.8mを測る。底面は全体的に平坦で、緩やかに傾斜する。

出土遺物（第17図）

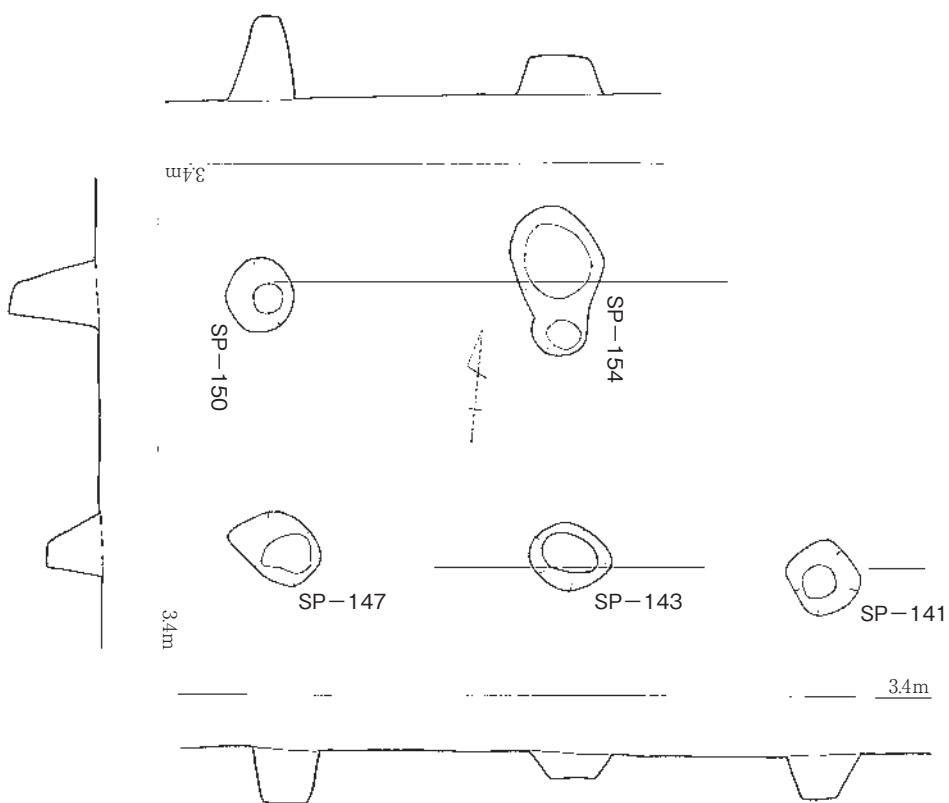
73は肥前系磁器染付の碗である。胎土は灰白色を呈する。外面に草花文、蝶文を描く。

SK-601（第16図）

第2調査区北に位置する不定形の土坑で、調査区の北側に広がっているため全容は不明である。長軸1.5m・短軸0.9m以上、深さは最深部で0.75mを測る。底面は全体的に平坦で、テラス状に立ち上がり、緩やかに傾斜する。

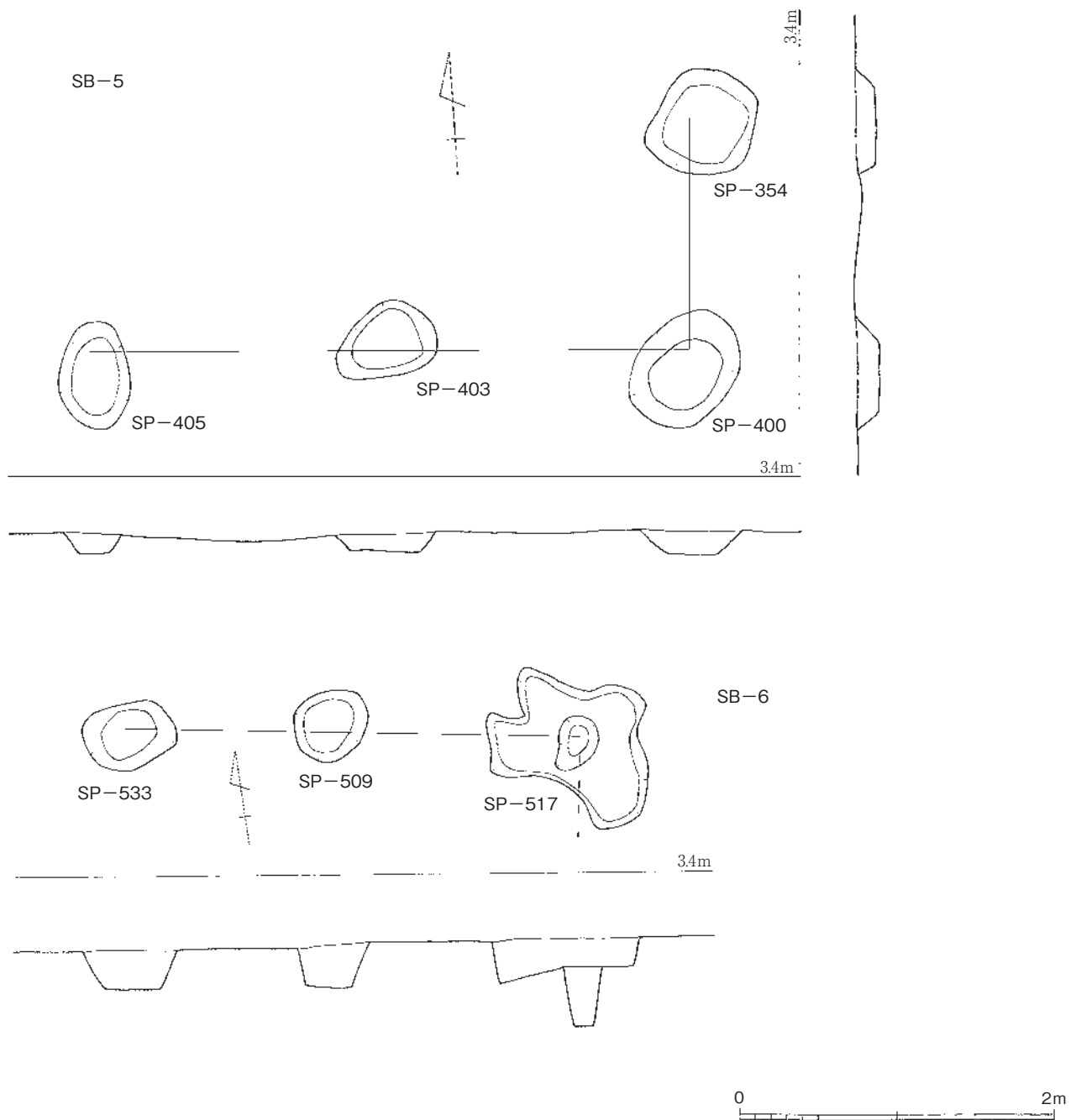


SB-4



0 2m

第19図 SB-3・4実測図(1/40)



第20図 SB-5・6実測図(1/40)

出土遺物(図版8、第17図図)

74及び75は唐津系陶器の大皿である。74の胎土は赤灰色を呈する。口縁部外面はハケ目文を描く。75の胎土は赤灰色を呈する。法量は、復元口径24.0cmを測る。

76は肥前系磁器染付の鉢である。胎土は灰白色を呈する。口縁部内面に帯線文を描く。外面に唐草文を描く。法量は、復元口径20.8cmを測る。

掘立柱建物

SB-1(第18図)

1区北で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、対応する梁行は不明であるが

礎石と考えられる、石の間隔は200cmから350cmである。

SB－2（第18図）

2区南で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、対応する梁行は不明であるが礎石と考えられる、石の間隔は150cmから200cmである。西側の礎石を検出した、SK－591からは369の土製品の土馬が出土した。遺物の詳細については出土製品において説明を行う。

SB－3（第19図）

3区北で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、対応する梁行は不明で柱間の間隔は120cmである。

SB－4（第19図）

4区南で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、梁行1間の側柱建物に復元されるが、東側の本来の形状は不明である。

柱間は梁側で150cm、桁側で140cmから150cmを測り、間隔は概ね等間隔である。SK－141からは遺物が出土した。

出土遺物（第21図）

77は土師器の皿である。胎土は明褐色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、復元口径9.2cm、器高2.7cm、復元底径4.6cmを測る。

SB－5（第20図）

3区中央で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、梁行1間の側柱建物に復元されるが、北側の本来の形状は不明である。

柱間は梁側で150cm、桁側で170cmから180cmを測り、間隔は概ね等間隔である。SK－354からは遺物が出土した。

出土遺物（第21図）

78は瓦質土器の鍋である。胎土は明灰色を呈する。内面はヨコハケによる成形痕を残す。外面はナデによる成形痕を残す。外面に指押え痕を残す。外面に煤が付着する。

SB－6（第20図）

3区北側SB－3より南側で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、対応する梁行は不明であるため、本来の形状は不明である。

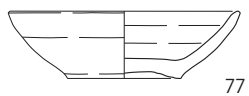
柱間は桁側で、120cmから160cmを測る。

第1遺構面その他の遺構出土遺物（図版8、第21・22図）

79は中国産白磁の皿である。SK－144出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。

SP-141

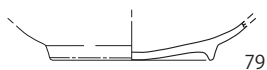
SP-354



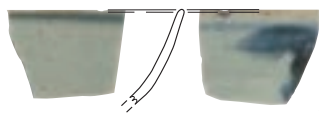
77



78



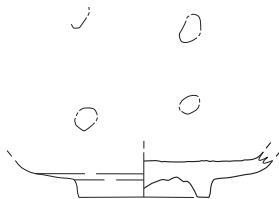
79



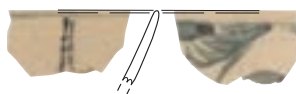
83



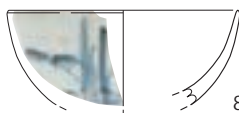
88



80



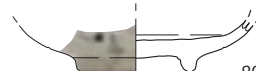
84



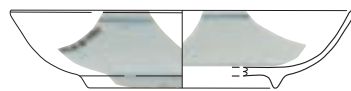
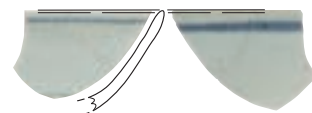
85



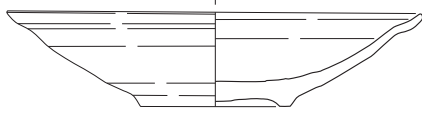
89



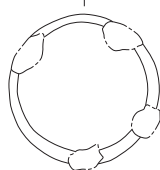
90



91



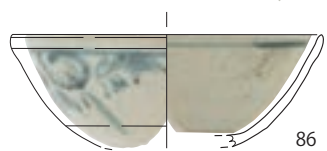
81



81



82



86



87



第21図 SP-141・354 建物・その他の遺構出土遺物実測図（1 / 3）

80はSK-594出土の朝鮮系白磁の皿である。胎土は白灰色を呈する。胎土目痕が見込みに4ヶ所、畳付に2ヶ所残る。法量は、復元高台径5.2cmを測る。

81はSK-144出土の朝鮮系白磁の皿である。胎土は白灰色を呈する。胎土目痕が見込みに5ヶ所、畳付に4ヶ所残る。法量は、口径16.5cm、器高3.8cm、高台径6.0cmを測る。

82はSK-353出土の漳州窯系青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。口縁部内面に1条、口縁部外面に2条の圈線を引く。法量は、復元口径14.0cmを測る。

83・84はSK-138出土の漳州窯系青花である。83及び84の胎土は灰白色を呈する。口縁部内面及び外面に1条の圈線を引き、外面には草花文を描く。

85はSK-5出土の肥前系磁器染付である。外面に竹文を描く。法量は、復元口径10.0cmを測る。

86はSD-41出土の漳州窯系青花の碗である。胎土は淡黄灰色を呈する。口縁部内面及び見込みに1条の圈線を引く。外面に草花文を描く。法量は、復元口径12.2cmを測る。

87及び88は青花の皿である。87はSK-409出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。口縁部内面及び外面、外面下位、見込みに1条の圈線を引く。見込みに草花文を描く。法量は、口径13.1cm、器高7.2cm、高台径7.2cmを測る。88はSK-49出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。高台は露胎である。口縁部内面に1条、見込みに2条の圈線を引く。口縁部外面に雨降文、外面下位に鋸歯文を描く。高台は碁笥底状を呈する。法量は、復元口径9.4cm、器高2.45cm、復元底径2.85cmを測る。

89はSK-103出土の漳州窯系青花の碗である。胎土は灰色を呈する。畳付及び高台内面は露胎である。外面下部に1条、見込みに1条の圈線を引く。見込みに花文を描く。法量は、復元高台径4.7cmを測る。

90はSK-144出土の青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。口縁部内面及び外面、見込みに1条の圈線を引く。

91はSK-138出土の青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。口縁部内面及び外面、外面下部に1条、見込みに2条の圈線を引く。法量は、復元口径13.6cm、器高3.1cm、復元底径7.6cmを測る。

92はSK-596出土の肥前系磁器染付の蓋物である。胎土は灰白色を呈する。口縁端部内側は無釉である。口縁部外面直下に2条の圈線を引く。法量は、復元口径11.0cmを測る。

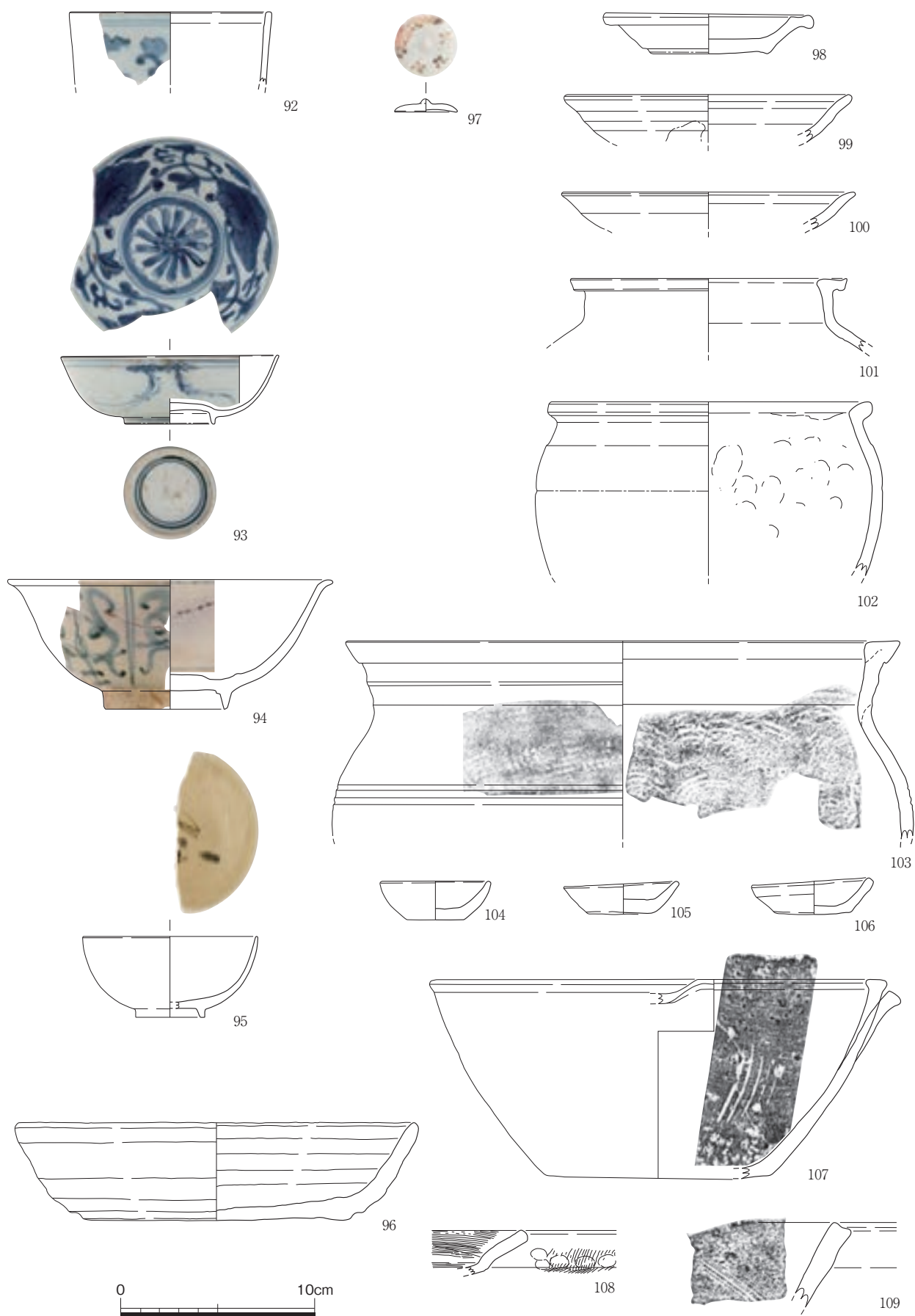
93はSK-594出土の青花の皿で、見込みは饅頭心形状を呈する。胎土は灰白色を呈する。口縁部外面に2条、高台内面に2条、口縁部内面に2条の圈線を引く。見込みに菊花文を描く。内面に牡丹唐草文を描く。外面に笹文を描く。

94はSK-138出土の漳州窯系青花の碗である。胎土は灰白色を呈する。高台は露胎である。畳付に砂が付着する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。見込みに2条の圈線を引く。外面に唐草文を描く。法量は、復元口径17.8cm、器高7.0cm、高台径6.8cmを測る。

95はSK-146出土の京焼風陶器の碗である。胎土は灰白色を呈する。高台は露胎である。見込みに山水文を描く。法量は、復元口径9.3cm、器高4.4cm、復元高台径3.8cmを測る。

96はSK-352出土の土師器の皿である。胎土は淡灰橙色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。被熱の痕跡が残る。法量は、復元口径21.4cm、器高5.3cm、復元底径14.4cmを測る。

97はSK-116出土の磁器の蓋である。胎土は灰白色を呈する。外面に色絵による草花文を描く。法量は、器高0.7cmを測る。



第22図 第1遺構面その他の遺構出土遺物実測図（1 / 3）

98は瀬戸美濃産の折縁皿で、SK-117出土の遺物である。胎土は明褐灰色を呈する。内面及び外面に緑釉を施す。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ後に鉄釉を施す。底部外面に鉄釉を施す。法量は、口径11.4cm、器高2.2cmを測る。99・100は唐津系陶器皿である。99はSK-2出土の遺物である。胎土は灰色を呈する。内面及び外面に、灰釉を施す。法量は、復元口径15.6cmを測る。100はSK-7出土の遺物である。胎土は灰色を呈する。内面及び外面に灰釉を施す。法量は、復元口径15.8cm、器高2.3cmを測る。99と同一個体か。

101から103は唐津系陶器の甕である。101はSK-592出土の遺物である。胎土は暗灰色を呈する。口縁部は露胎である。口縁部に貝目痕が残る。法量は、復元口径15.0cmを測る。102はSK-592出土の遺物である。胎土は暗赤色を呈する。内面はナデによる成形痕を残す。内面に指押え痕を残す。外面はヨコナデによる成形痕を残す。外面に煤が付着する。法量は、復元口径17.4cmを測る。103はSK-1出土の遺物である。胎土は明茶色を呈する。内面は同心円状のタタキ痕、外面は格子文状のタタキ痕、口縁部に貝目痕を残す。口縁部はヨコナデによる成形痕を残す。胎土目積段階。法量は、復元口径30.0cmを測る。

104はSK-515出土の土師器小坏である。胎土は暗黄色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、復元口径6.0cm、器高2.1cm、復元底径3.0cmを測る。

105はSK-352出土の土師器の小皿である。胎土は淡黄灰色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は若干摩耗しているが、糸切り痕を残す。法量は、口径6.3cm、器高1.6cm、底径3.4cmを測る。

106はSK-118出土の土師器の小皿である。胎土は淡灰褐色を呈する。内面及び外面に煤が付着する。底部外面は糸切り後ナデによる成形痕を残す。法量は、口径6.7cm、器高1.8cm、底径4.2cmを測る。

107はSK-118出土の瓦質土器の片口の播鉢である。胎土は暗灰色を呈する。内面はヨコナデ、ヨコハケによる成形痕を残す。外面はナデによる成形痕を残す。外面に煤が付着する。内面の播目は、5本一単位で、1ヶ所のみ確認できている。法量は、復元口径24.6cm、器高10.8cm、復元底径12.4cmを測る。

108はSK-138出土の瓦質土器の鍋である。胎土は暗灰色を呈する。内面及び外面はハケメによる成形痕を残す。口縁端部はヨコナデによる成形痕を残す。口縁部外面下位に指押え痕を残す。外面に煤が付着する。

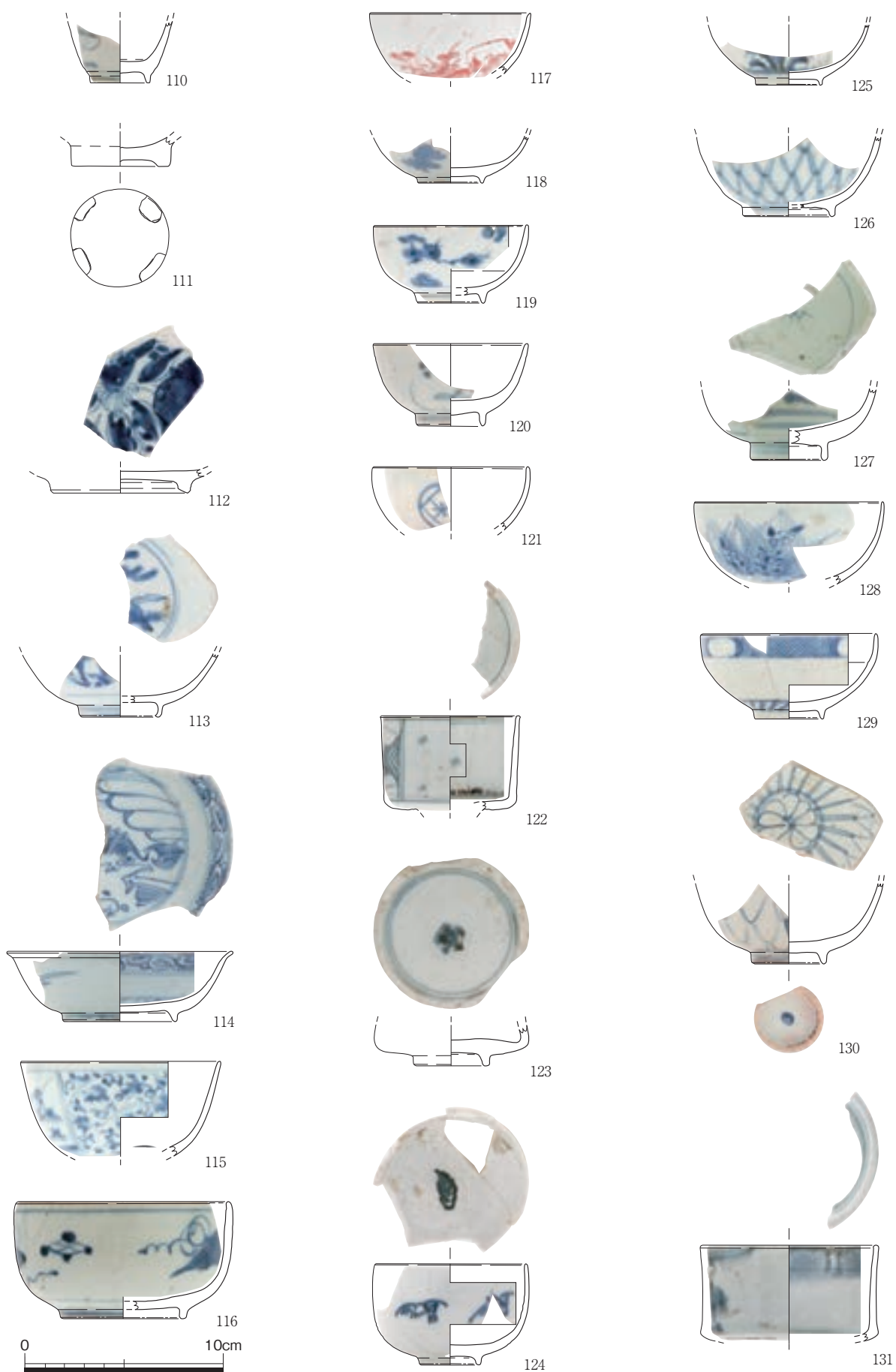
109は瓦質土器の播鉢である。胎土は暗灰色を呈する。内面に7本の一単位の播目を施す。

第1遺構面その他の出土遺物（図版8、9、第23から31図）

110は4区出土の肥前系磁器染付の小坏である。胎土は灰白色を呈する。外面下部、高台外面にそれぞれ1条の圈線を引く。法量は、復元高台径3.1cmを測る。

111は1区出土の白磁の碗である。胎土は灰白色を呈する。畳付に砂目痕が4ヶ所残る。朝鮮産か。法量は、高台径5.3cmを測る。

112は4区出土の青花の皿である。遺物である。胎土は灰白色を呈する。高台は露胎である。畳付に砂が付着する。高台外面に1条の圈線を引く。見込みに草花文を描く。法量は、復元高台径



第23図 第1遺構面出土遺物実測図① (1 / 3)

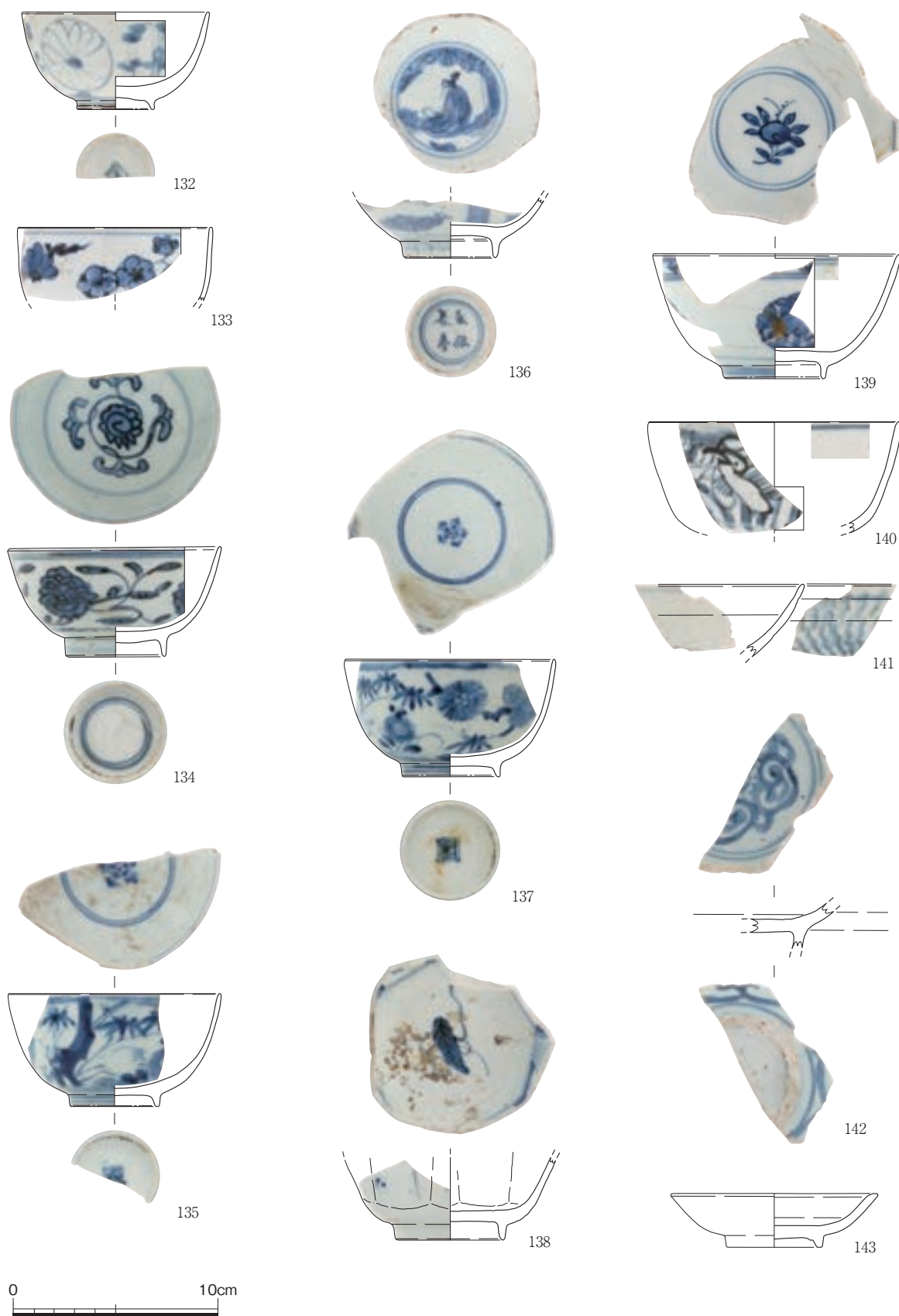
7.5cmを測る。113は4区出土の青花の碗である。胎土は灰白色を呈する。見込みに2条、外面に3条の圈線を引く。見込みに草花文を描く。法量は、復元高台径4.3cmを測る。114は3区出土の青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。口縁部外面及び高台に1条の圈線を引く。見込みにペンシルドロウイング技法で雲龍文を描く。口縁部内面に渦文を描く。法量は、復元口径12.0cm、器高3.7cm、復元高台径6.09cmを測る。

115及び116、118から132は、肥前系磁器染付の碗である。115は4区出土の遺物で、胎土は灰白色を呈する。口縁部外面に1条の圈線を引く。外面に花唐草文、梅竹文を描く。法量は、復元口径10.6cmを測る。116は3区出土の遺物で、胎土は灰白色を呈する。口縁部は明褐色釉を塗布する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。畳付は砂が付着する。口縁部外面、胴部外面に1条、高台に2条の圈線を描く。外面に宝文を描く。法量は、復元口径11.4cm、器高6.2cm、復元高台径6.6cmを測る。

117は1区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。外面及び内面の一部に赤絵による草花文、扇文を描く。法量は、口径8.6cmを測る。近現代製品か。

118は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。外面にコンニャク印判を施す。法量は、高台径2.5cmを測る。119は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。胴部外面下位に1条の圈線、高台外面に1条の圈線を引く。外面に松竹梅文を描く。法量は、口径8.2cm、器高4.15cm、復元高台径3.5cmを測る。120は2区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。畳付は砂が付着する。高台に1条の圈線を引く。外面に草花文を描く。法量は、復元口径8.2cm、器高4.4cm、復元高台径4.7cmを測る。121は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。外面に丸文を描く。122及び123は筒形碗である。法量は、復元口径8.4cmを測る。122は3区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。口縁部内面に2条の圈線、下位部に1条の圈線を引く。外面に粹絵、網目文、菊花散文を描く。法量は、復元口径7.5cmを測る。123は2区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。畳付は砂が付着する。見込みに2条の圈線を引く。見込みにコンニャク印判で五弁花文を施す。法量は、高台径4.0cmを測る。124は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。見込みに筭文を描く。外面に鳥と笹文を描く。法量は、復元口径8.1cm、器高5.35cm、高台径3.25cmを測る。125は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。外面に草花文を描く。法量は、高台径3.5cmを測る。126は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。畳付は露胎である。高台外面に2条の圈線を引く。外面に二重網目文を描く。法量は、復元高台径4.8cmを測る。127は3区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。見込みに1条、胴部外面下位に1条、高台に2条の圈線を引く。見込みに寿文を描く。法量は、復元高台径4.05cmを測る。128は2区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。外面に草花文を描く。129は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。外面に格子文を描く。法量は、復元口径9.4cm、器高4.5cm、高台径3.7cmを測る。130は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。見込みに菊花文を描く。内面に網目文を描く。外面に二重網目文を描く。高台内面に渦福を描く。法量は、復元高台径3.9cmを測る。131は3区出土の筒形碗である。胎土は灰白色を呈する。口縁部内面に、格子文を描く。法量は、復元口径9.4cm、器高5.05cm、復元高台径7.8cmを測る。132は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。高台外面に2条の圈線を引く。外面に菊花文を描く。高台内面に渦福を描く。法量は、復元口径9.6cm、器高5.0cm、復元高台径4.0cmを測る。

133は4区出土の肥前系磁器染付の蓋物である。胎土は灰白色を呈する。口縁端部内面は無釉である。口縁部外面に1条の圈線を引く。外面に松梅文を描く。法量は、復元口径10.0cmを測る。54



第24図 第1遺構面出土遺物実測図②（1 / 3）

と同一固体である。

134は4区出土の青花の碗である。胎土は灰白色を呈する。見込みに2条、口縁部内面に1条、口縁部外面、高台内面に2条の圈線を引く。見込みに草花文を描く。外面に草花文を描く。法量は口径10.9cm、器高5.65cm、高台径5.15cmを測る。

135は3区出土の肥前系磁器染付の碗である。胎土は灰白色を呈する。見込み及び高台に2条の圈線を引く。見込みに5弁花文を描く。内面に四方礬文を描く。外面に笹、松等の草花文を描く。高台内面に渦福を描く。法量は、復元口径10.9cm、器高5.8cm、復元高台径4.5cmを測る。

136は4区出土の青花の饅頭心碗である。胎土は灰白色を呈する。見込みに2条、外面下位に1条、高台外面に2条の圈線を引く。見込みに文人文を描く。外面に松を描く。高台内面に「永保長春」を記す。法量は、復元高台径4.8cmを測る。

137は3区出土の肥前系染付碗である。胎土は灰白色を呈する。見込み、高台に2条の圈線を引く。見込みに五弁花文を描く。外面に草花文を描く。高台内面に渦福を描く。法量は、口径10.8cm、器高6.0cm、高台径5.05cmを測る。135と137は揃いの染付碗である。

138は1区出土の肥前系磁器染付の八角鉢である。胎土は灰白色で、内面及び外面に釉を施し、畳付、見込みに砂が付着し、見込みに宝文を描く。底径5.1cm。

139は1区出土の青花の碗である。胎土は灰白色を呈する。見込み、口縁部内面に2条、胴部外面下位に1条、高台外面に2条の圈線を引く。見込みに花文を描く。外面に丸文を描く。法量は、復元口径12.6cm、器高6.3cm、復元高台径5.1cmを測る。

140は4区出土の漳州窯系青花の碗である。胎土は灰白色を呈する。口縁部内面に1条の圈線を引く。外面に花鳥文を描く。法量は、復元口径12.9cmを測る。141は漳州窯系青花の碗で4区出土。胎土は灰白色を呈する。見込み、口縁部内面に1条の圈線を引く。外面に縞状文を描く。142は青花の碗で4区出土。胎土は灰白色を呈する。見込みに3条の圈線を引く。見込みに雲を描く。外面に唐草文を描く。

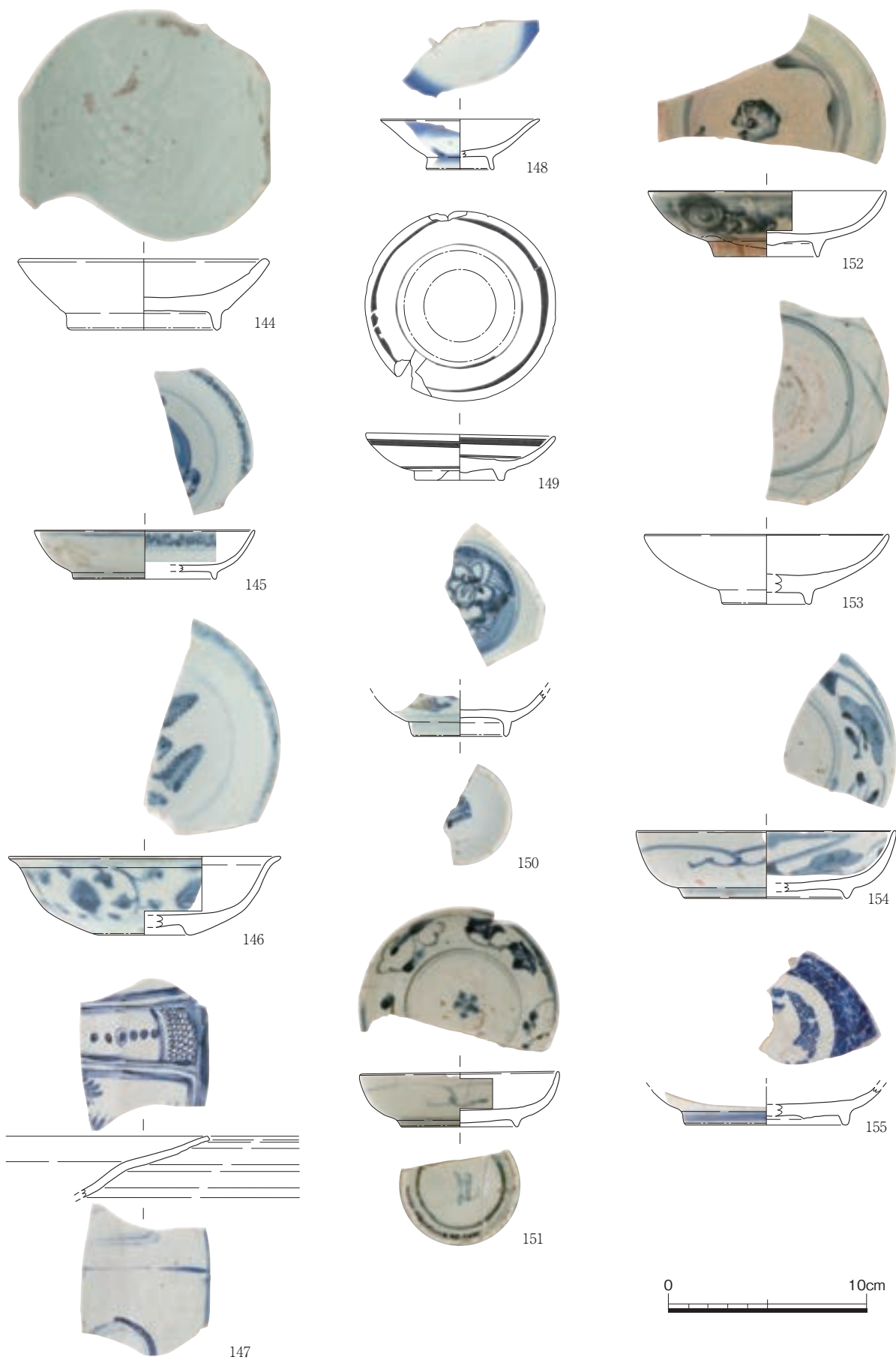
143及び144は青磁の皿である。143は4区出土の遺物である。胎土は白灰色を呈する。高台内面は、鉄漿を施す。外面下部、高台内に砂が付着する。法量は、復元口径10.6cm、器高2.7cm、復元高台径4.8cmを測る。144は4区出土の遺物である。胎土は白色を呈する。型打ち成形で内面に魚を表現している。肥前系。法量は、口径13.5cm、器高3.7cm、復元高台径8.1cmを測る。

145及び146は青花の皿である。145は3区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。畳付は砂が付着する。見込み、口縁部外面、高台外面に1条の圈線を引く。口縁部内面に四方礬文を描く。内面に蛟文を描く。法量は、復元口径11.7cm、器高2.6cm、高台復元径7.6cmを測る。146は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。畳付は露胎である。底部は碁笥底状を呈する。見込みに圈線を引く。見込みに草文を描く。外面に唐草文を描く。法量は、復元口径14.3cm、器高4.2cm、復元高台径4.9cmを測る。

147は第1遺構面出土の肥前系磁器染付芙蓉手の大皿である。胎土は灰白色を呈する。口縁部内外面に区画線を描く。

148は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。口縁部内面及び外面、高台に圈線を引く。肥前系の近現代の製品か。法量は、復元口径8.4cm、器高2.7cm、復元高台径3.6cmを測る。

149は4区出土の漳州窯系青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。高台は無釉である。見込み



第25図 第1遺構面出土遺物実測図③ (1 / 3)

は蛇ノ目釉剥する。畳付に砂が付着する。見込み、口縁部内面付近、口縁部外面、外面下部にそれぞれ1条の圈線を引く。法量は、口径10.0cm、器高2.5cm、高台径4.8cmを測る。

150は4区出土の青花の饅頭心碗である。胎土は灰白色を呈する。見込みに2条、外面下部に1条、高台外面に2条の圈線を引く。見込みに草花文を描く。高台内面に銘を描く。法量は、復元高台径5.1cmを測る。

151から163は皿である。151は3区出土の肥前系染付の皿である。胎土灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。見込みに2条、外面に1条、高台外面に2条、高台内面に1条の圈線を引く。見込みに五弁花文を描く。内面に草花文を描く。外面に唐草文を描く。高台内面に大明成化年製銘を記す。法量は、口径10.6cm、器高2.9cm、高台径6.25cmを測る。

152は4区出土の漳州窯系青花皿である。胎土は灰白色を呈する。高台は露胎である。見込みに2条、外面に圈線を引く。外面に文様を描く。法量は、復元口径12.6cm、器高3.5cm、高台径5.6cmを測る。

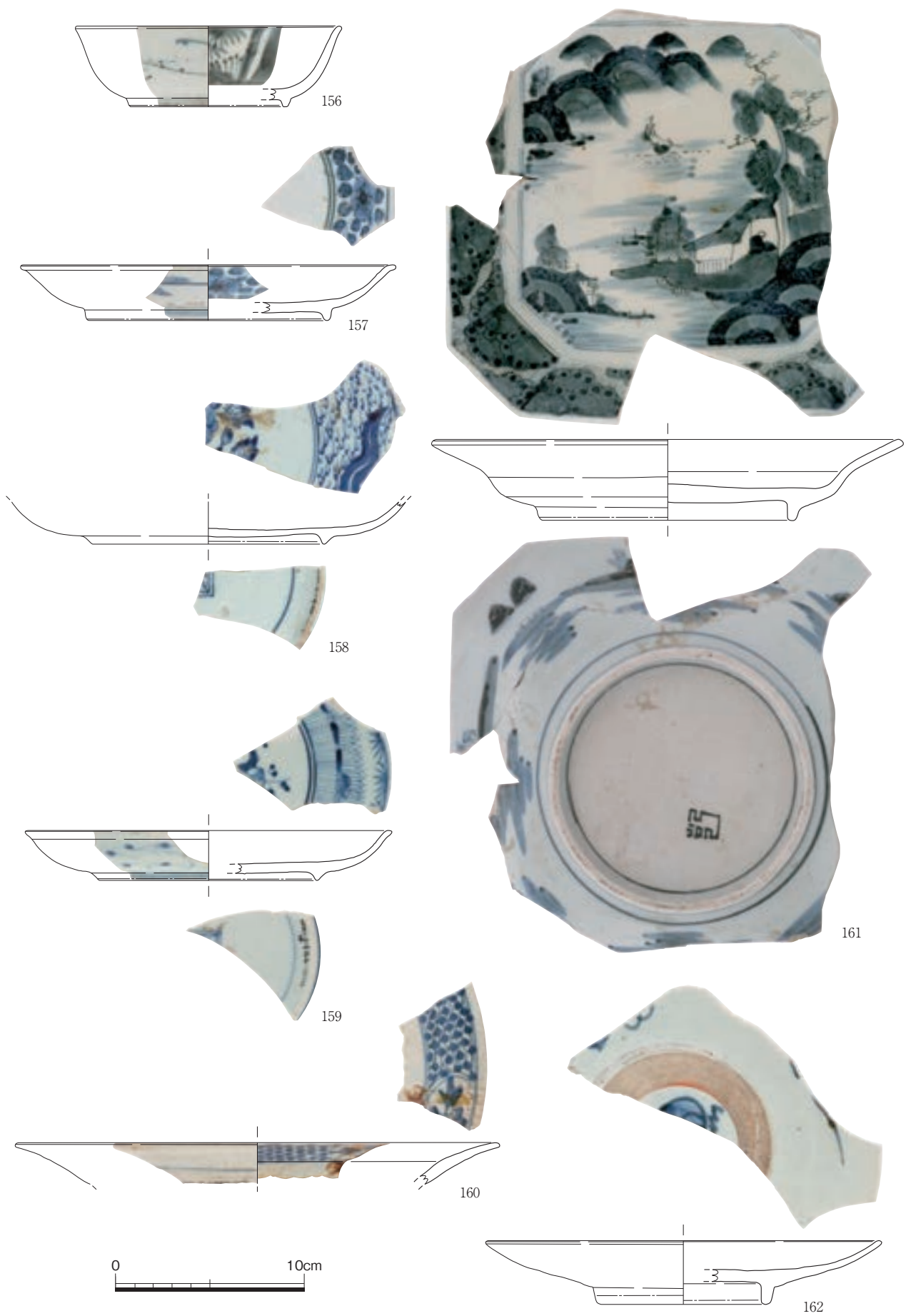
153・154は2区出土の肥前系染付である。153の胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。見込みに2条の圈線を引く。内面に二重網目文を描く。法量は、復元口径13.0cm、器高3.7cm、復元高台径4.8cmを測る。154の胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。見込みに2条、外面に1条、高台外面に2条、高台内面に1条の圈線を引く。内面に草花文を描く。外面に唐草文を描く。法量は、復元口径13.8cm、器高3.6cm、高台径8.7cmを測る。

155は3区出土の肥前系染付である。胎土は灰白色を呈する。蛇ノ目凹型高台で、畳付及び高台内は露胎である。外面下部は1条、高台外面は2条の圈線を引く。内面は、化学コバルトを用いた型紙摺りによる印刷で見込みに竹文を施す。法量は、復元高台径8.7cmを測る。明治前半の製品か。

156は3区出土の肥前系染付の鉢である。胎土は灰白色を呈する。口縁部に1条、高台外面に2条の圈線を引く。内面に竹文を描く。外面に唐草文を描く。法量は、復元口径14.8cm、器高4.5cm、復元高台径8.8cmを測る。

157から159は肥前系染付の皿である。157は3区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。見込みに2条、外面下部に1条、高台外面に2条、高台内面に1条の圈線を引く。内面に草花文を描く。法量は、復元口径20.9cm、器高3.1cm、法量は、復元高台径13.5cmを測る。158は3区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。見込みに2条、外面下部に1条、高台外面に2条、高台内に1条の圈線を引く。見込みに草花文を描く。輸出手の上手品である。内面に波状文を描く。外面に波状文を描く。高台内に渦福を描く。法量は、復元高台径13.0cmを測る。159は1区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。見込みに2条、胴部外面に1条、高台に2条、高台内面に1条の圈線を引く。見込みに梅文を描く。口縁部内面に笹文を描く。外面に唐草文を描く。法量は、復元口径20.4cm、器高2.8cm、法量は、復元高台径12.3cmを測る。

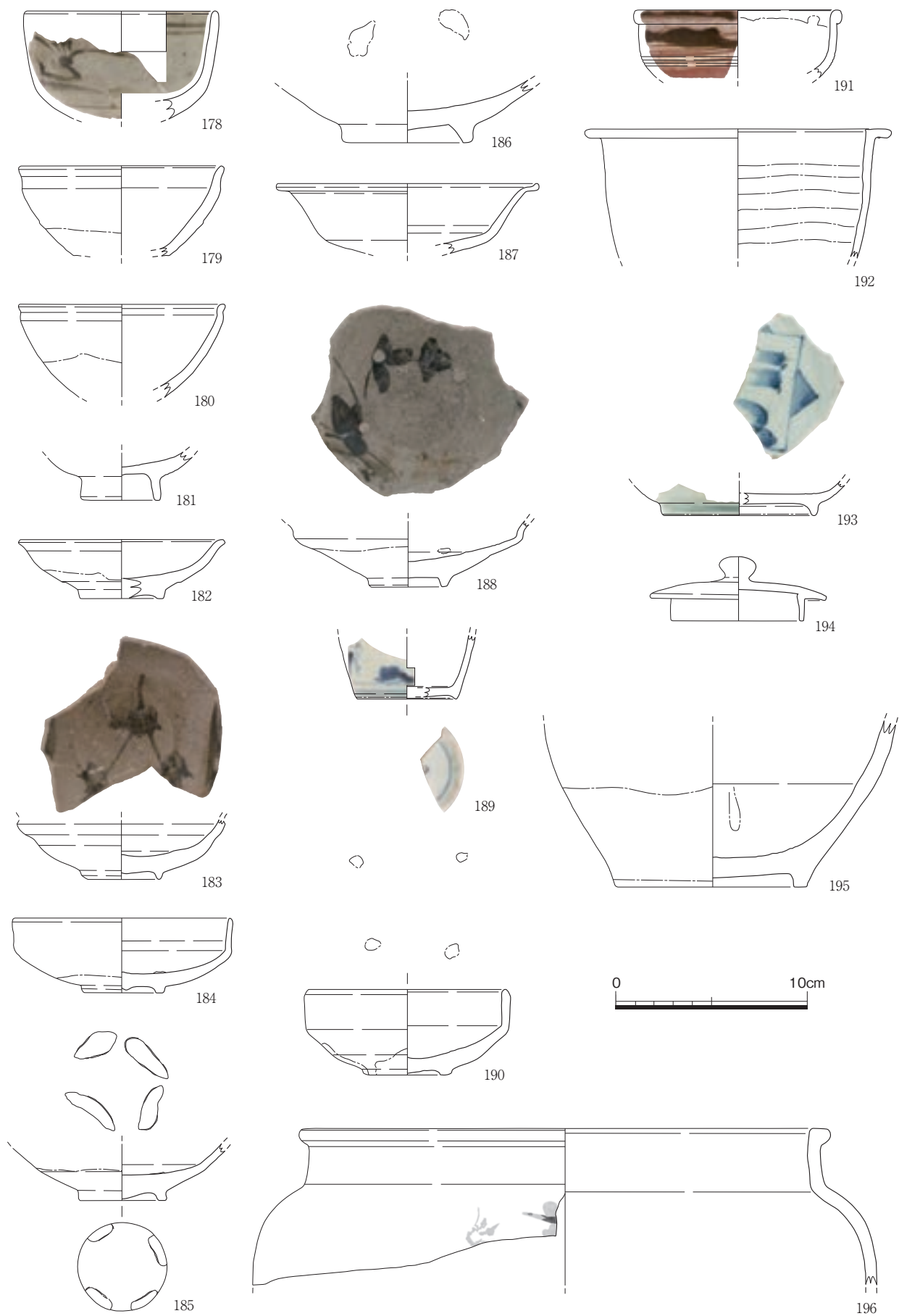
160は3区出土の漳州窯系青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。外面に1条の圈線を引く。内面に波文を描く。法量は、復元口径26.9cm、器高2.3cmを測る。161は4区出土の肥前系染付で八角大皿である。胎土は灰白色を呈する。高台は露胎である。見込み及び外面に山水文を描く。高台内面に変形字銘を描く。法量は、復元口径26.2cm、器高4.5cm、復元高台径14.4cmを測る。162は4区出土の肥前系磁器染付皿である。胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。法量は、復元口径22cm、器高3.55cm、復元高台径9.7cmを測る。163は1区出土の肥前



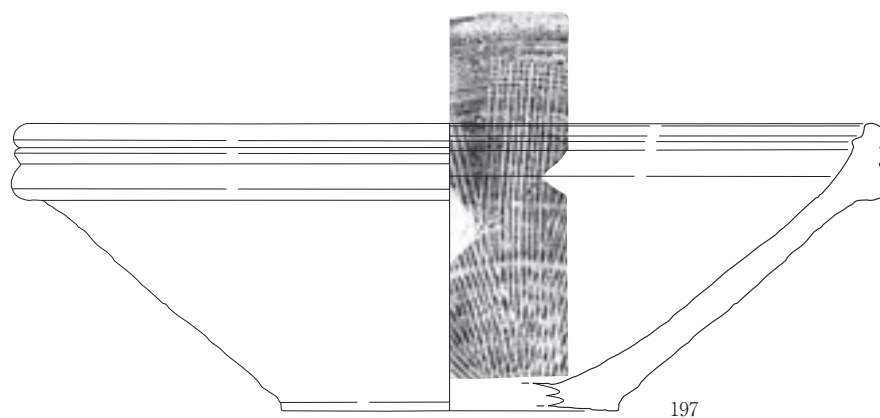
第26図 第1遺構面出土遺物実測図④（1 / 3）



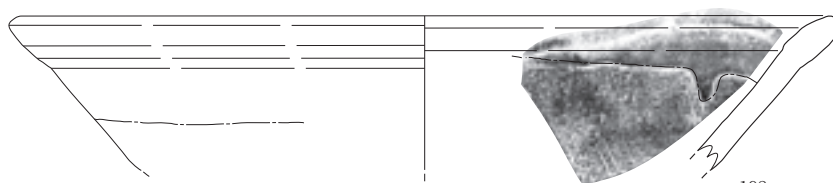
第27図 第1遺構面出土遺物実測図⑤（1 / 3）



第28図 第1遺構面出土遺物実測図⑥ (1 / 3)



197



198



0 10cm



199

第29図 第1遺構面出土遺物実測図⑦（1 / 3）

系磁器染付大皿である。胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が密に付着する。内面に波文、花文を描く。

164は4区出土の肥前系磁器染付の蓋物である。胎土は灰白色を呈する。口縁部は無釉で、外面に1条、胴部外面下位に3条、高台外面に2条の圈線を引く。胴部外面に唐草文を描く。法量は、復元口径11.7cm、器高8.3cm、復元高台径8.2cmを測る。

165は4区出土の肥前系磁器染付の段重である。胎土は灰白色を呈する。口縁部は無釉である。畳付に砂が付着する。外面は窓枠内に菊花文及び草文が描かれる。法量は、復元口径15.6cm、器高5.7cm、復元高台径13.5cmを測る。

166は1区出土の関西系陶器の碗である。胎土は浅黄色を呈する。高台は露胎である。外面に色絵による文様を描く。外面下部及び内面に煤が付着する。法量は、復元口径9.45cm、器高5.4cm、高台3.2cmを測る。

167は3区出土の肥前系染付の油壺である。胎土はにぶい褐色を呈する。外面に草花文を描く。法量は口径2.2cm、器高8.2cm、高台径4.3cmを測る。

168は1区出土の肥前系染付薬合子の蓋である。胎土は灰白色を呈する。口縁部は露胎である。外面に薬名である「肥○渡辺○処入烏犀圓」の文字を描く。法量は、口径4.85cm、器高0.9cmを測る。

169は肥前系色絵合子の蓋である。胎土は明灰色を呈する。口縁部は釉剥ぎする。外面は赤絵による格子文を描き、緑彩を施す。法量は、口径9.2cm、器高2.4cmを測る。170は2区出土の青花の芙蓉手の鉢である。胎土は灰白色を呈する。口縁は輪花を呈する。外面に宝文を描く。内面に草文を描く。

171から181は陶器の碗である。171は1区出土の遺物である。胎土は明灰色を呈する。高台は無釉である。172は1区出土の唐津系陶器の小碗である。胎土は暗灰色を呈する。外面下部は露胎である。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、口径6.8cm、器高3.7cm、高台径3.2cmを測る。

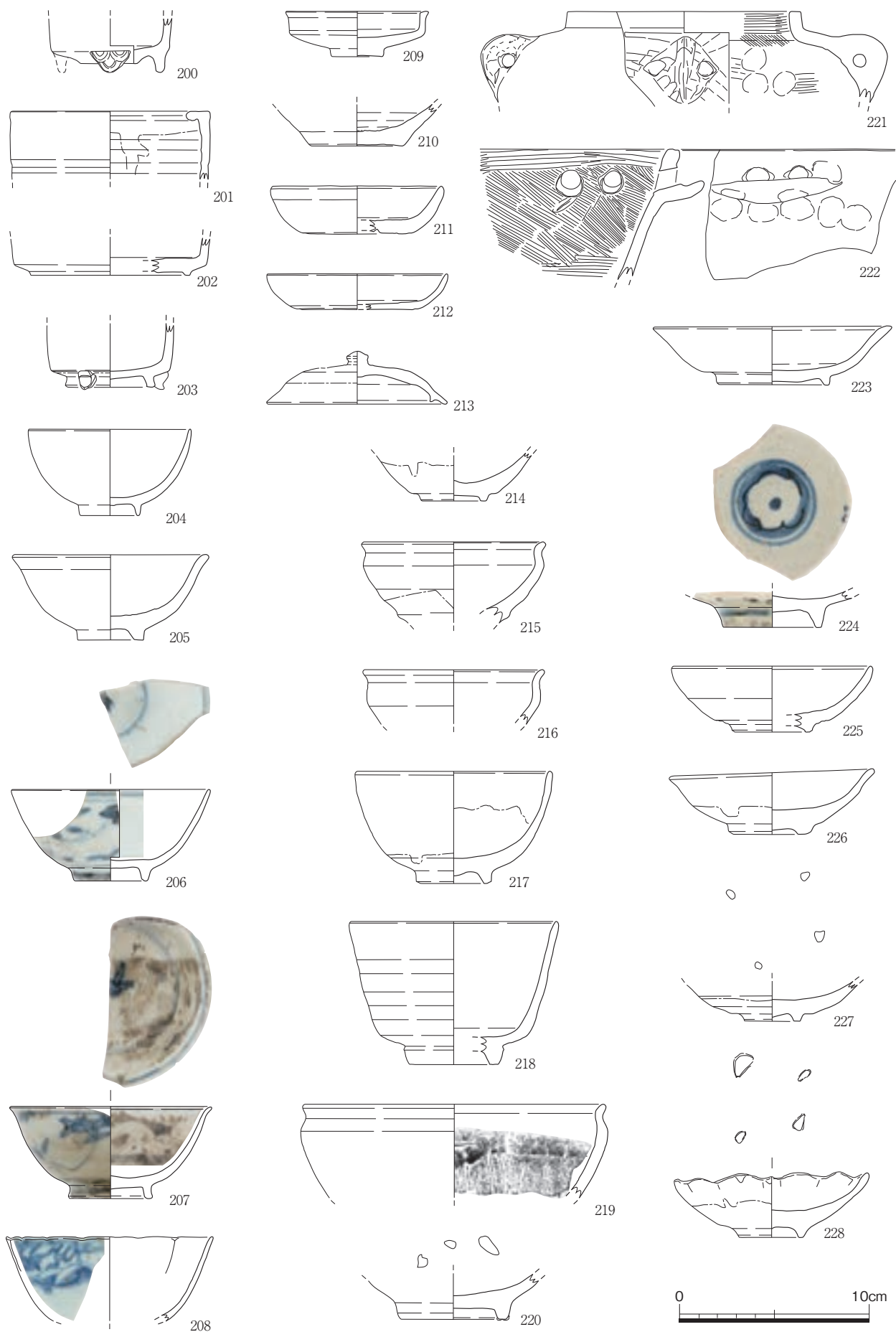
173は4区出土の肥前系京焼風陶器である。胎土は淡黄白色を呈する。外面下部は無釉である。胴部外面に文字の一部を記す。法量は、復元口径8.0cm、器高5.0cm、復元高台径3.7cmを測る。

174は1区出土の唐津系陶器の碗である。胎土は橙褐色を呈する。内面に鉄釉を施し、外面は露胎である。法量は高台径3.8cmを測る。175は4区出土の肥前系京焼風陶器の碗である。胎土は淡黄色を呈する。畳付は露胎である。見込みに山水文を描く。法量は、復元口径9.75cm、器高4.4cm、高台径3.9cmを測る。

176は4区出土の関西系陶器の碗である。胎土は灰白色を呈する。外面下部から高台は露胎である。外面に鉄釉による唐草文を描く。法量は、復元口径9.2cm、器高5.4cm、復元高台径3.2cmを測る。

177は1区出土の唐津系陶器の碗である。胎土は灰色を呈する。外面下部は露胎である。法量は、高台径4.4cmを測る。178は4区出土の肥前系陶胎染付の碗である。胎土は灰色を呈する。口縁部外面に2条、胴部外面下位に1条の圈線を引く。法量は、復元口径10.7cmを測る。179は4区出土の瀬戸美濃産陶器の天目碗である。胎土は灰白色を呈する。内面及び外面に鉄釉を施す。外面下部は無釉である。法量は、復元口径11.2cmを測る。180は2区出土の唐津系陶器の天目碗である。胎土は暗灰色を呈する。口縁部内面及び外面付近に鉄釉を施す。他は露胎である。法量は、復元口径11.2cmを測る。181は1区出土の唐津系陶器の碗である。胎土は暗茶色を呈する。内面及び外面に鉄釉を施す。法量は、高台径4.3cmを測る。

182から185は唐津系陶器の皿である。182は4区出土の遺物である。胎土は淡褐黄色を呈する。



第30図 第1遺構面出土遺物実測図⑧ (1 / 3)

外面下部は無釉である。見込みに胎土目が残る。法量は、復元口径11.3cm、器高5.3cm、復元高台径4.5cmを測る。183は4区出土の絵唐津の向付である。胎土はにぶい橙色を呈する。見込みに草文を描く。法量は、高台径4.4cmを測る。184は区出土の向付である。胎土は赤褐色を呈する。外面下部は露胎である。見込みに胎土目痕が2ヶ所残る。法量は、復元口径12.1cm、器高4.1cm、高台径4.4cmを測る。185は1区出土の遺物である。胎土は赤褐色を呈する。外面下部は露胎である。砂目痕が見込みに4ヶ所、畳付に4ヶ所残る。法量は、高台径4.9cmを測る。

186は4区出土の朝鮮産白磁の皿である。胎土は灰白色を呈する。見込み及び高台は無釉である。見込みに胎土目痕が2ヶ所残る。高台に砂が付着する。朝鮮系。法量は、復元高台径8.7cmを測る。

187は1区出土の唐津系陶器の皿である。胎土は暗黄色を呈する。内面及び外面に被熱を受けた痕跡を残す。法量は、復元口径14.4cmを測る。

188は2区出土の唐津系陶器で絵唐津の向付である。胎土は灰色を呈する。畳付は露胎である。見込みに花文を描く。胎土目痕が見込みに4ヶ所残る。法量は、高台径4.4cmを測る。

189は4区出土の肥前系染付のそば猪口である。胎土は灰白色を呈する。外面に2条の圈線を引く。外面に松文を描く。法量は、復元高台径5.4cmを測る。

190は4区出土の唐津系陶器の向付である。胎土は茶褐色を呈する。内面及び外面に灰釉を施す。口縁部には鉄釉を施す。外面下部は露胎である。胎土目が見込みに4ヶ所残る。法量は、復元口径10.8cm、器高4.7cm、復元高台径5.0cmを測る。

191及び192は唐津系陶器の鉢である。191は1区出土の遺物である。胎土は赤褐色を呈する。外面に刷毛目装飾を施し高台周りは露胎である。法量は、復元口径11.4cmを測る。192は3区出土の遺物である。胎土は淡褐色を呈する。内面及び外面に灰釉を施す。内面はロクロ目が明瞭に残る。法量は、復元口径16.8cmを測る。

193は3区出土の肥前系磁器染付の皿である。胎土は灰白色を呈する。外面下部、高台内面に1条の圈線を引く。見込みに山水文を描く。法量は、復元高台径8.4cmを測る。

194は4区出土の陶器の土瓶の蓋である。胎土は暗褐色を呈する。内面は露胎である。

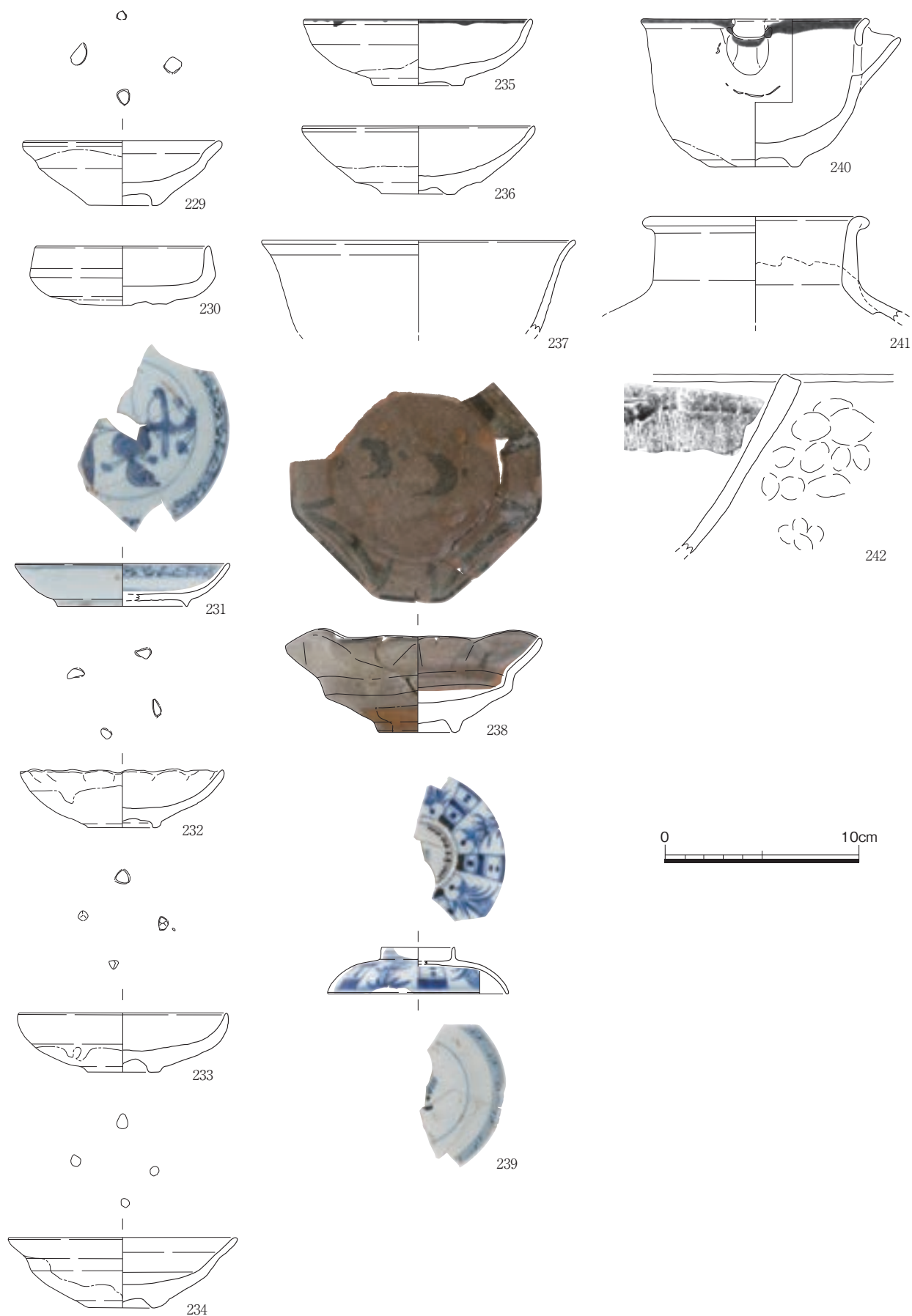
195は4区出土陶器の壺である。胎土は灰茶色を呈する。内面及び外面下部は鉄釉を施す。法量は、高台径10.4cmを測る。

196は3区出土の唐津系陶器の甕である。胎土は明茶色を呈する。口縁部内面及び外面は白化粧土による刷毛目を施す。外面に松文の一部が確認される。法量は、復元口径29.1cmを測る。

197及び198は焼締陶器の播鉢である。197は3区出土の堺系播鉢である。胎土は暗褐色を呈する。口縁部は鉄釉を施す。内面に12本の播目を施す。法量は、復元口径34.6cm、器高11.4cm、復元底径13.4cmを測る。198は1区出土の遺物である。胎土は暗灰色を呈する。口縁部は鉄釉を施す。内面の一部に播目が残るも単位は不明である。法量は、復元口径33.0cmを測る。

199は4区出土の唐津系陶器の鉢である。胎土は赤褐色を呈する。内面は刷毛目装飾を施した後、緑釉を流し掛ける。ハケ目文を描く。法量は、復元口径44.4cmを測る。

200から202は4区出土の肥前系青磁の香炉である。200の胎土は灰白色を呈する。底部外面は鉄漿を施す。貼付の脚は1つ残存する。201の胎土は灰白色を呈する。内面は無釉である。一部釉垂れする。法量は、復元口径11.0cmを測る。202の胎土は灰白色を呈する。内面は無釉である。底部外面は鉄漿を施す。201と同一個体か。



第31図 第1遺構面出土遺物実測図⑨（1 / 3）

203は2区出土の陶器の香炉である。胎土は淡黄色を呈する。底部内面及び外面は露胎である。外面は鉄釉を施す。三足の脚のうち二足が残る。法量は、復元底径4.7cmを測る。

204は肥前系白磁の碗である。204は1区出土の遺物である。胎土は白色を呈する。法量は、復元口径9.0cm、器高4.8cm、復元高台径3.3cmを測る。205は朝鮮産白磁碗で、4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。法量は、復元口径10.8cm、器高4.7cm、復元高台径3.7cmを測る。

206から208は1区出土の青花の碗である。206の胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。見込みに1条、口縁部内面に2条、口縁部外面に2条、高台に1条の圈線を引く。口縁部外面に唐草文を描く。法量は、復元口径10.9cm、器高5.1cm、復元高台径4.0cmを測る。207の胎土は灰白を呈する。畳付に砂が付着する。見込みに2条、口縁部内面に1条、口縁部外面に1条、外面下部に1条、高台に1条の圈線を引く。見込みに文様を描く。口縁部外面に唐草文を描く。法量は、復元口径11.2cm、器高5.1cm、復元高台径4.6cmを測る。二次被熱している208の胎土は灰白色を呈する。口縁は輪花状を呈す。外面上部に区画文を描く。法量は、復元口径11.4cmを測る。

209は2区出土の土師質土器の坏、もしくは蓋である。胎土は淡橙色を呈する。内面及び外面はナデによる成形痕を残す。210から213は土師器の皿である。210は2区出土の遺物である。胎土は淡黄色を呈する。内面及び外面は横ナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、復元底径5.0cmを測る。211は2区出土の遺物である。胎土は淡橙黄色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、復元口径9.6cm、器高2.7cm、復元底径6.0cmを測る。212は4区出土の遺物である。胎土は淡黄色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、復元口径10.0cm、器高2.0cm、復元底径6.2cmを測る。

213は1区出土の須恵器の蓋である。胎土は灰色を呈する。宝珠部分はナデ、外面はヘラケズリ、外面端部付近はヘラケズリ後ナデによる成形痕を残す。内面はナデによる成形痕を残す。法量は、復元口径10.0cm、器高2.9cmを測る。

214から218は1区出土の唐津系陶器の碗である。214の胎土は褐灰色を呈する。外面は露胎である。法量は、復元高台径3.6cmを測る。215・216は天目碗である。215の胎土は暗灰色を呈する。内面及び外面に鉄釉を施す。外面下部は露胎である。法量は、復元口径10.2cmを測る。216の胎土は明灰色を呈する。内面及び外面に黒色の釉を施す。法量は、復元口径10.0cmを測る。217の胎土は淡灰色を呈する。内面及び外面中部に緑灰色の釉を施す。外面下部は露胎である。法量は、復元口径10.6cm、器高4.0cm、高台径6.2cmを測る。218の胎土は明灰色を呈する。高台は竹の節状である。口縁部に釉を重ねた様な痕跡が残る。法量は、復元口径11.6cm、器高7.9cm、復元高台径5.0cmを測る。

219は1区出土の唐津系陶器の播鉢である。胎土は淡灰褐色を呈する。外面は白化粧土を施す。内面の単位は明確でないが播目が残る。法量は、復元口径16.8cmを測る。

220は1区出土の朝鮮産白磁の鉢である。胎土は白褐色を呈する。胎土目痕が見込みに3ヶ所、畳付に残る。法量は、復元高台径6.0cmを測る。

221は4区出土の瓦質土器の茶釜である。胎土は灰色を呈する。胴部内面はヘラナデ及び指押え、頸部内面はハケ、口縁部内面から口縁端部はヨコナデによる成形痕を残す。外面はヘラミガキによる成形痕を残す。法量は、復元口径13.0cmを測る。

222は4区出土の瓦質土器の耳鍋である。胎土は暗黄灰色を呈する。内面はハケメによる成形痕

を残す。外面はヨコナデによる成形痕を残す。耳部分は指押さえ痕が残る。耳上部に2ヶ所穿孔を伴う。外面に煤が付着する。

223は1区出土の中国産白磁の皿である。胎土は白色を呈する。高台内面は露胎である。高台内面に砂が付着する。法量は、口径13.2cm、器高3.3cm、高台径6.2cmを測る。

224は1区出土の漳州窯系の青花皿である。胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。見込みに2条、高台外面に1条の圈線を引く。見込みに花文を描く。法量は、高台径5.4cmを測る。

225は3区出土の唐津系陶器の皿である。胎土は灰褐色を呈する。口縁部は鉄釉を施す。皮鯨手。法量は、復元口径11.2cm、器高3.6cm、復元高台径4.5cmを測る。226から230は1区出土の唐津系陶器の皿である。226の胎土は淡灰褐色を呈する。外面下部は露胎である。胎土目痕が見込みに残る。法量は、口径11.4cm、器高3.4cm、高台径4.0cmを測る。227の胎土は薄褐色を呈する。外面下部は露胎である。胎土目痕が見込みに4ヶ所残る。法量は、高台径3.2cmを測る。228はなぶり縁皿である。胎土は明褐色を呈する。内面及び外面中部に灰釉を施す。外面下部は露胎である。口縁部に微量の鉄釉を施す。胎土目痕が見込みに4ヶ所残る。法量は、口径10.8cm、器高3.4cm、高台径3.6cmを測る。229の胎土は黄灰色を呈する。底部は碁筍底状を呈す。外面下部は露胎である。胎土目が見込みに4ヶ所残る。法量は、復元口径10.8cm、器高3.5cm、高台径3.8cmを測る。

230の胎土は黄褐色を呈する。底部外面は露胎である。法量は、復元口径9.6cm、器高3.2cm、復元底径4.8cmを測る。

231は4区出土の青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。畳付及び高台内面に砂が付着する。見込みに1条、口縁部外面及び下部に1条の圈線を引く。口縁部内面に草文を描く。見込みに草花文を描く。法量は、復元口径11.6cm、器高2.3cm、復元高台径（7.0cm）を測る。

232から236は1区出土の唐津系陶器の皿で胎土目段階の遺物である。232はなぶり縁皿である。胎土は明褐色を呈する。内面及び外面中部に灰色の釉を施す。外面下部は露胎である。胎土目痕が見込みに4ヶ所残る。法量は、口径11.0cm、器高3.1cm、高台径4.0cmを測る。233の胎土は明褐色を呈する。内面及び外面中部に灰釉を施す。外面下部は露胎である。胎土目痕が見込みに4ヶ所残る。法量は、口径11.4cm、器高3.2cm、高台径3.8cmを測る。234の胎土は明褐色を呈する。底部は碁筍底状を呈す。内面及び外面中部に灰釉を施す。外面下部は露胎である。4ヶ所の胎土目痕が見込みに残る。法量は、復元口径12.4cm、器高3.8cm、高台径3.5cmを測る。235の胎土は淡灰褐色を呈する。外面下部は露胎である。口縁部は鉄釉を施す。皮鯨手。底部外面に被熱の痕跡を残す。法量は、復元口径12.4cm、器高3.6cm、復元高台径4.8cmを測る。236の胎土は淡灰褐色を呈する。内面及び外面中部に緑灰色の釉を施す。外面下部は露胎である。法量は、復元口径12.6cm、器高3.7cm、高台径3.7cmを測る。

237は1区出土の朝鮮産白磁の鉢である。胎土は明灰色を呈する。

238は1区出土の唐津系陶器の絵唐津の向付である。胎土は明赤色を呈する。口縁は八角形を呈す。外面下部は露胎である。内面に鉄絵による鳥文を描く。法量は、口径13.9cm、器高5.6cm、底径4.4cmを測る。

239は1区出土の肥前系磁器染付の蓋である。胎土は灰白色を呈する。内面に1条の圈線を引く。口縁部内面に雷文を描く。外面に草文を描く。法量は、復元口径4.0cm、器高2.5cmを測る。

240は1区出土の唐津系陶器の片口である。胎土は明褐色を呈する。外面下部は露胎である。口

縁部内外面に鉄釉を施す。皮鯨手。法量は、復元口径12.4cm、器高8.0cm、復元高台径5.0cmを測る。

241は1区出土の唐津系陶器の壺である。胎土は淡褐灰色を呈する。頸部内面に接合痕が残る。法量は、復元口径12.2cmを測る。

242は1区出土の土師質土器のこね鉢である。胎土は明褐色を呈する。外面は指押えの痕が多く残る。内面はヨコナデの後櫛目による成形痕を残す。

2 第2遺構面

SK-36 (第33図)

第1調査区北に位置する不定形の土坑で、調査区の西側に広がっているため全容は不明。長軸1.1m以上・短軸0.75m以上、深さは最深部で0.1mを測る。底面は全体的に平坦で、緩やかに傾斜する。

SK-37 (第33図)

第1調査区北に位置する不定形の土坑で、調査区の東側、南側に広がっているため全容は不明。長軸1.4m以上・短軸0.4m以上、深さは最深部で0.07mを測る。底面は全体的に平坦で、緩やかに傾斜する。

SK-42 (第33図)

第1調査区南東に位置する不定形の土坑で、調査区の東側、南側に広がっているため全容は不明。長軸1.25m以上・短軸0.75m以上、深さは最深部で0.8mを測る。底面は全体的に平坦で、緩やかに傾斜する。

出土遺物 (図版9、第34図)

243は唐津系陶器の皿である。胎土は明褐色を呈する。外面下部はケズリによる成形痕を残す。露胎である。胎土目痕が見込みに4ヶ所残る。法量は、復元口径15.0cm、器高4.0cm、高台径4.4cmを測る。

SK-46 (第33図)

第2調査区北西に位置する不定形の土坑で、調査区の北側、西側に広がっているため全容は不明。長軸1.75m以上・短軸0.4m以上、深さは最深部で0.2mを測る。底面は全体的に平坦で、緩やかに傾斜する。

出土遺物 (第34図)

244は漳州窯系青花の皿である。胎土は灰色を呈する。畳付及び高台は露胎である。見込みに2条、口縁部内面、口縁部外面、胴部外面下位に1条の圈線を引く。見込みに花文を描く。高台内面に墨書で「兵部」の文字を描く。

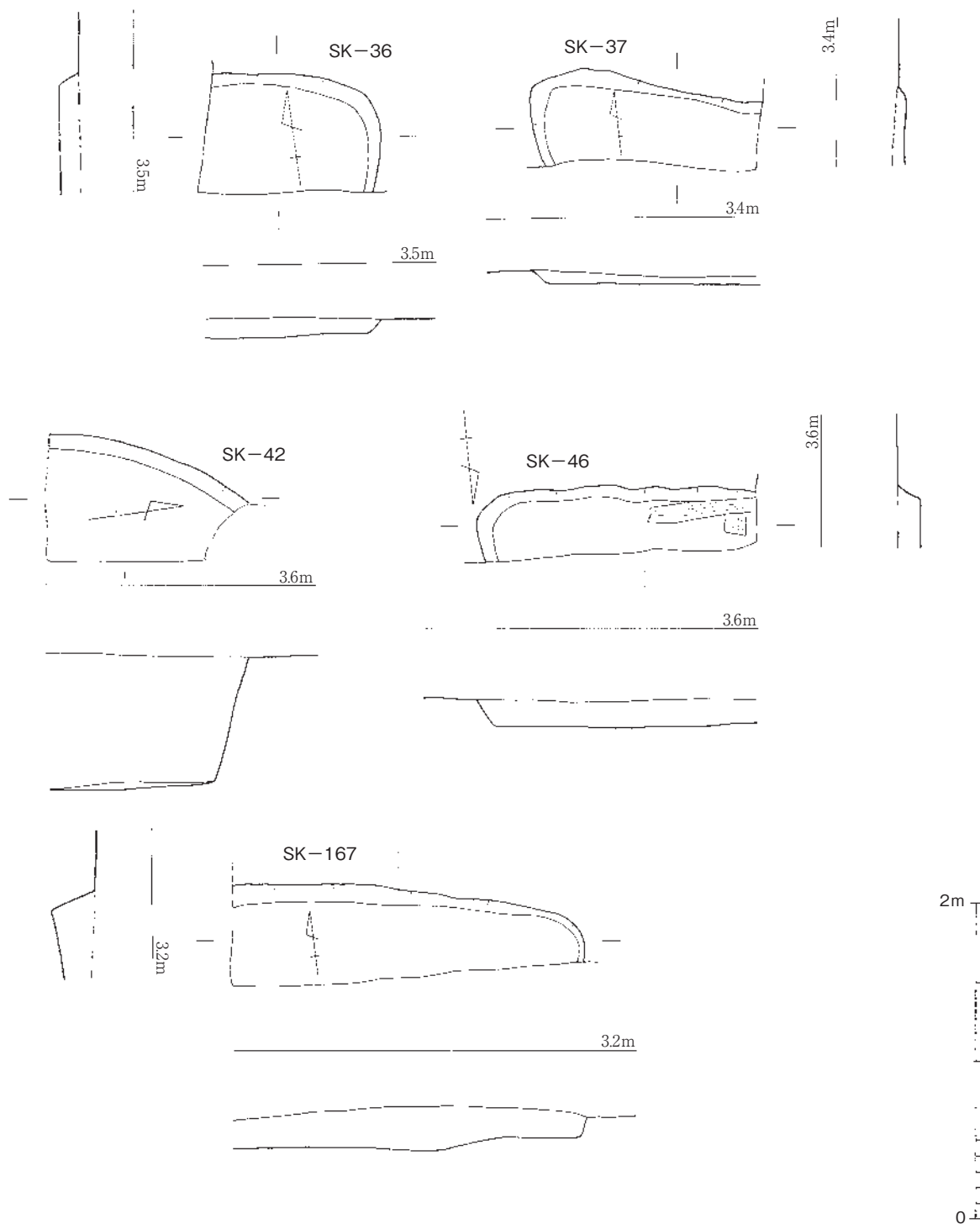
SK-167 (第33図)

第4調査区北に位置する不定形の土坑で、調査区の西側、南側に広がっているため全容は不明。長軸2.25m以上・短軸0.55m以上、深さは最深部で0.2mを測る。底面は全体的に平坦で、緩やかに傾斜する。

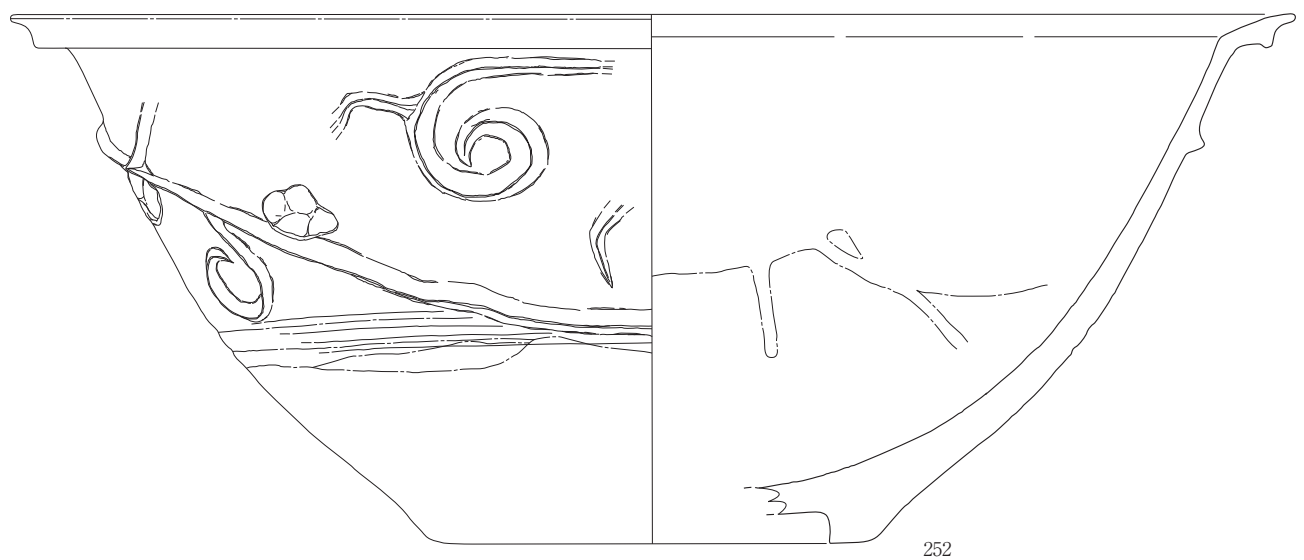
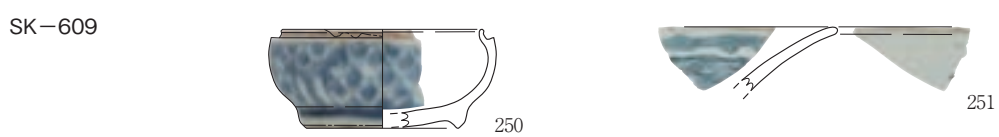
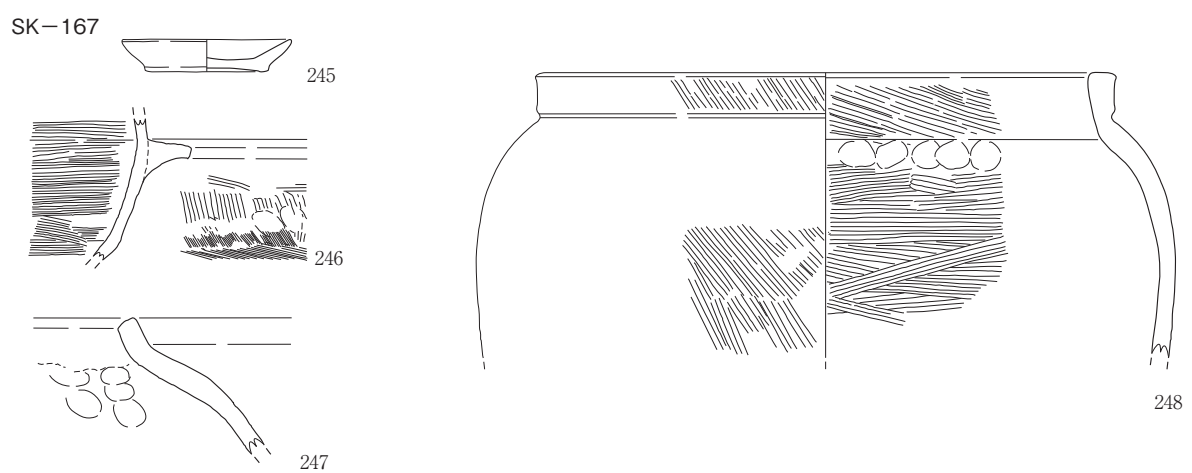
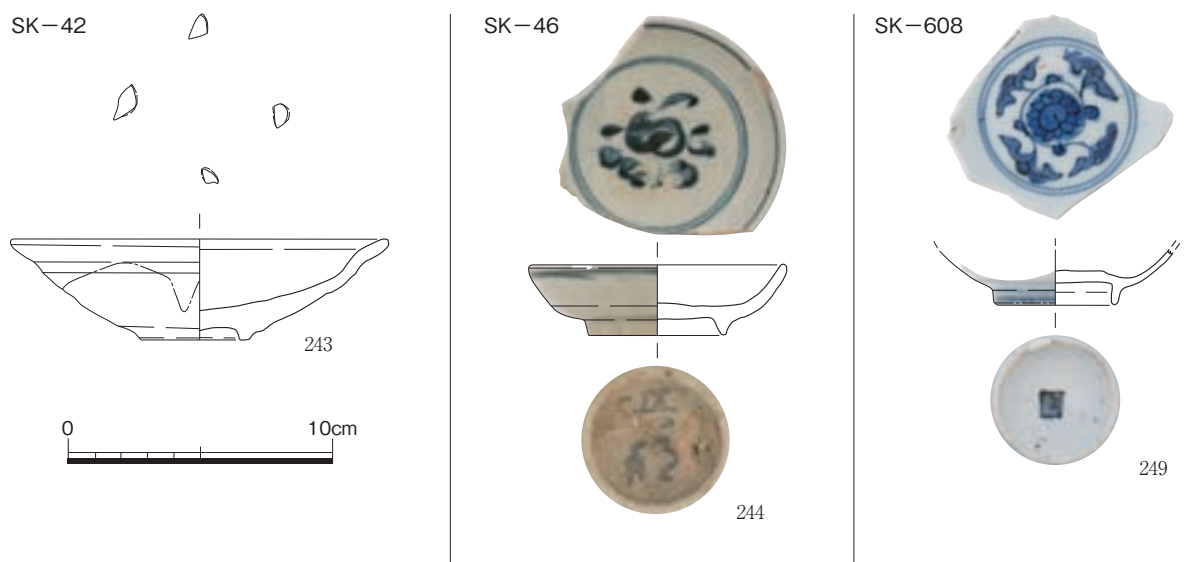
出土遺物 (第35図)

245は土師器皿である。胎土は褐灰色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、復元口径6.7cm、器高1.3cm、復元底径4.9cmを測る。

246は瓦質土器の羽釜である。胎土は淡灰色を呈する。内面はハケによる成形痕を残す。外面中部はヨコナデによる成形痕を残す。外面下部はハケ目による成形痕を残す。指押え痕を残す。



第33図 SK-36・37・42・46・167 実測図 (1/40)



第34図 SK-42・46・167・608・609 出土遺物実測図 (1 / 3)

247・248は瓦質土器の火消し壺である。247の胎土は淡灰色を呈する。口縁部内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。内面は指押え痕を残す。頸部内面に接合痕を残す。

248の胎土は明褐色を呈する。口縁部内面及び外面、外面下部はハケメによる成形痕を残す。口縁端部、肩部外面はヨコナデによる成形痕を残す。頸部内面に指押え痕を残す。法量は、復元口径23.0cmを測る。

SK-422（第34図）

第4調査区中央に位置する楕円形の土坑。長軸0.9m・短軸0.8m以上、深さは最深部で0.15mを測る。底面は全体的に平坦で、緩やかに傾斜する。

SK-608（第34図）

第2調査区北に位置する長方形の土坑で、調査区の北側に広がっているため全容は不明。長軸2.3m以上・短軸1.7m、深さは最深部で1.9mを測る。底面は全体的に平坦で、急な傾斜を呈する。

出土遺物（第35図）

249は青花の饅頭心碗である。胎土は灰白色を呈する。見込みに2条、外面下部に1条、高台に1条の圈線を引く。見込みに草花文を描く。高台内面に落款を施す。

SK-609（第35図）

第2調査区北に位置する不定形の土坑で、調査区の北側に広がっているため全容は不明。長軸1.3m以上・短軸0.6m、深さは最深部で1.8mを測る。底面は全体的に平坦で、急な傾斜を呈する。

出土遺物（第34図）

250は青花の合子である。胎土は灰白色を呈する。口縁部は露胎である。畳付に砂が付着する。外面に鱗地文が描かれる。

251は漳州窯系青花の大皿である。胎土は灰白色を呈する。口縁は輪花を呈す。内面に文様が描かれる。

252は陶器の鉢である。胎土は暗茶色を呈する。口縁内面に花の印影を施す。外面上部に唐草の貼り付けを施す。

掘立柱建物

SB-7（第35図）

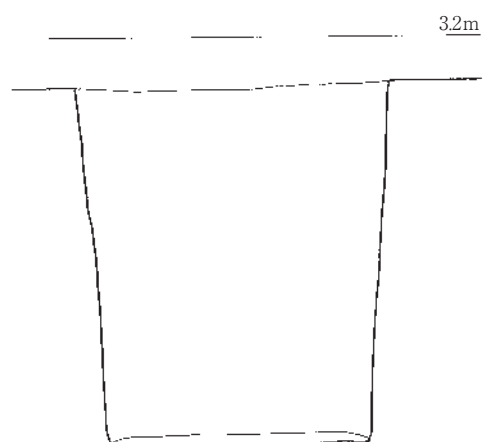
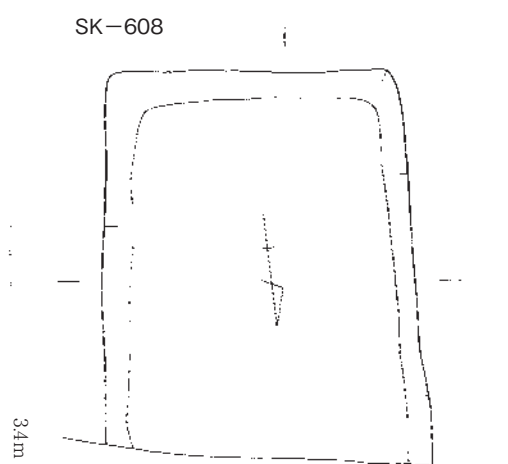
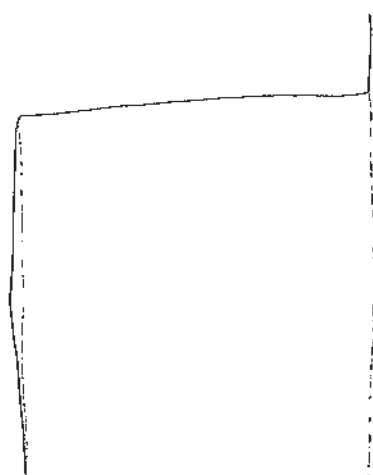
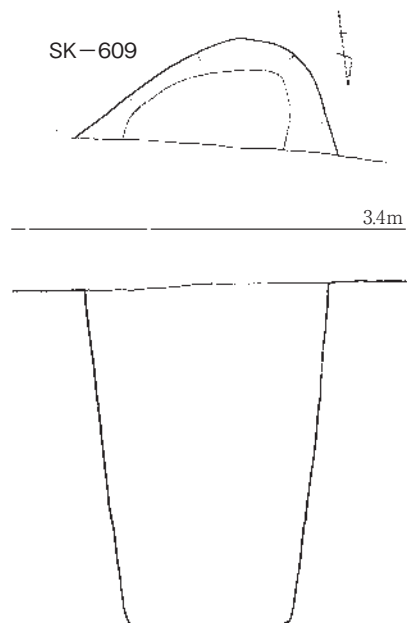
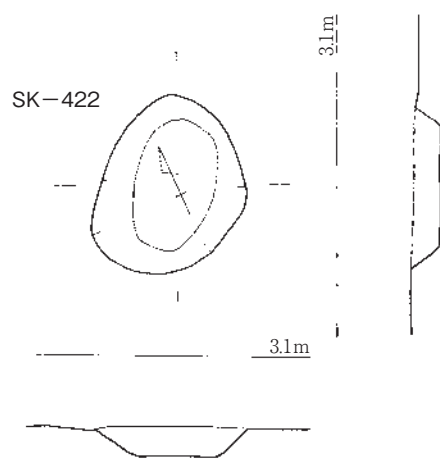
4区北で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行4間及び3間を検出、梁行2間の側柱建物に復元されるが、東側の本来の形状は不明である。

柱間は梁側で120cmから280cm、桁側で100cmから350cmを測り、SK-187及びSK-195からは遺物が出土した。

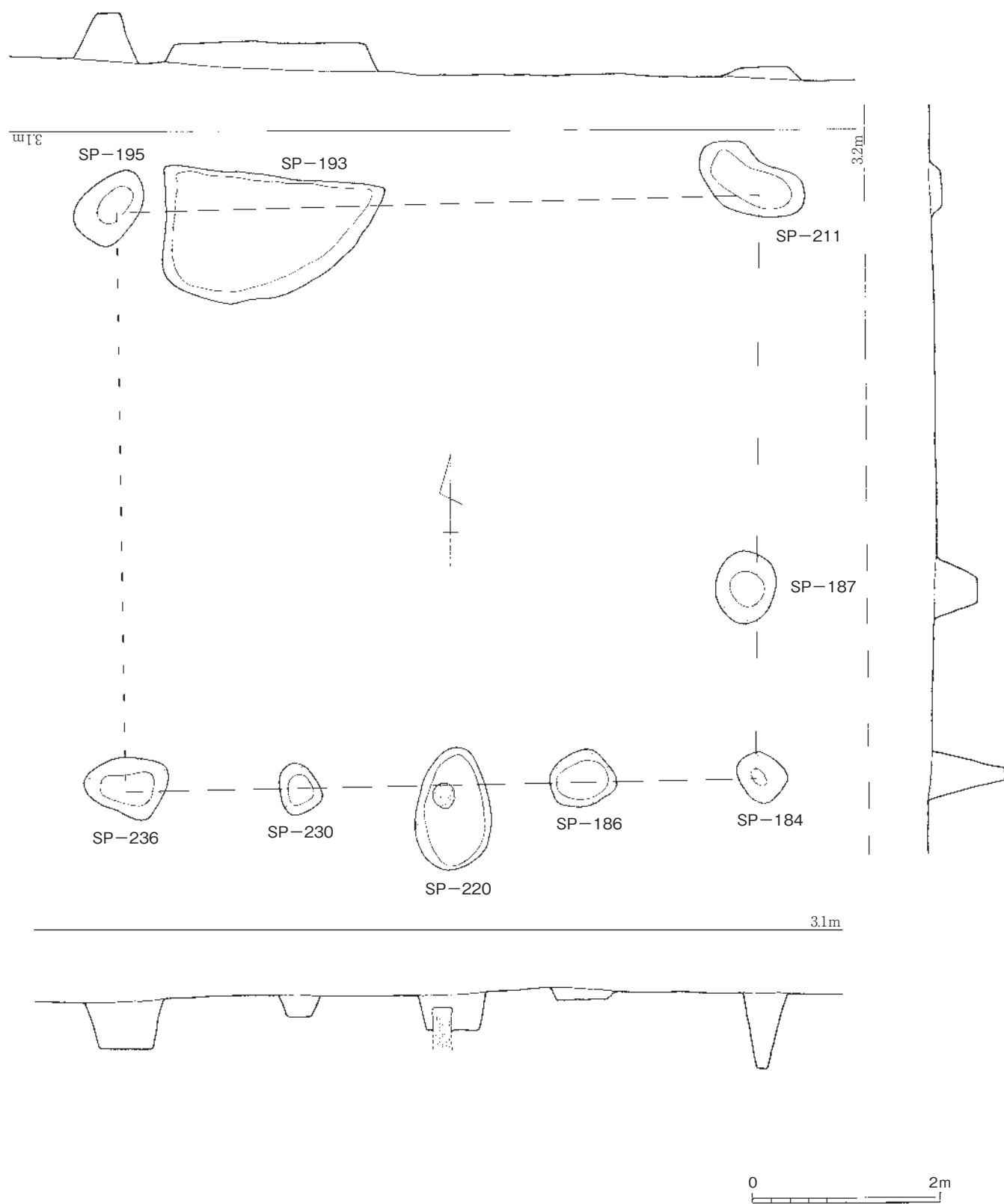
出土遺物（第38図）

253はSP-187出土の漳州窯系青花の皿である。胎土は浅黄色を呈する。高台は露胎である。見込み、口縁部内面、外面下部に1条の圈線を引く。口縁部外面に波状文を描く。

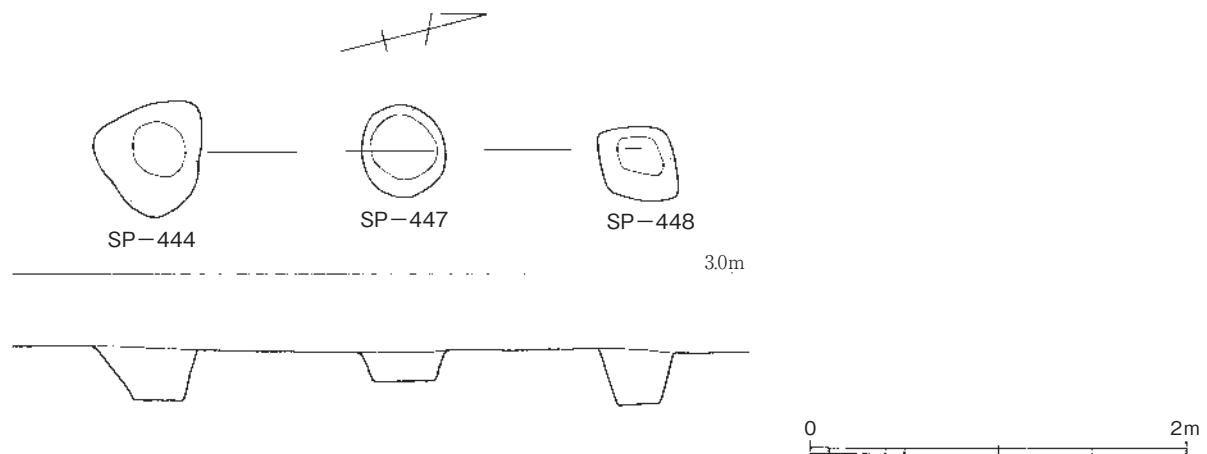
254はSP-195出土の陶器の擂鉢である。胎土は赤褐色を呈する。内面に不明確だが擂目が残る。



第35図 SK-422・608・609 実測図 (1/40)



第36図 SB-7 実測図 (1/60)



第37図 SB-8 実測図 (1/40)

SB-8 (第37図)

3区中央で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、梁行は不明であるため、本来の形状は不明である。

柱間は桁側で、120cmから140cmを測る。

その他の遺構・第2遺構面出土遺物 (図版9、第38から40図)

255はSD-41出土の瀬戸美濃産陶器志野焼の皿である。胎土は淡褐灰色を呈する。256はSK-189出土の染付の皿である。胎土は灰色を呈する。高台は露胎である。高台内面は煤が付着する。見込みに草花文を描く。法量は、復元高台径5.4cmを測る。

257は2区から出土した肥前系磁器染付の碗である。胎土は灰白色を呈する。外面に草花文を描く。法量は、復元口径8.6cm、復元器高4.6cm、高台径3.1cmを測る。

258は2区出土の青花の碗である。胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。見込みに1条の圈線を引く。見込みに花文を描く。

259は2区出土の肥前系磁器染付の碗である。胎土は灰白色を呈する。外面に松文、竹垣文を描く。法量は、復元口径11.0cm、器高4.9cm、復元高台径4.6cmを測る。

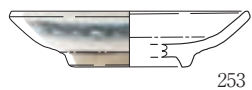
260は2区出土の肥前系磁器染付の皿である。胎土は灰白色を呈する。内面及び外面に1条の圈線を引く。内面に草花文を描く。外面に唐草文を描く。

261は2区出土の肥前系磁器色絵の碗である。胎土は灰白色を呈する。畳付は露胎である。外面に色絵による蝶、花、宝文を描く。法量は、復元口径8.4cm、器高4.0cm、高台径3.4cmを測る。

262はSK-605出土の唐津系陶器の甕である。胎土は明茶色を呈する。口縁部は露胎である。口縁部はヨコナデによる成形痕を残す。法量は、復元口径21.2cmを測る。

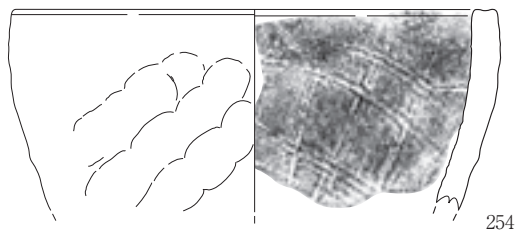
263はSK-410出土の瓦質土器の鍋である。胎土は淡灰色を呈する。内面はヨコハケによる成形痕を残す。外面は指押え後タテハケによる成形痕を残す。外面に煤が付着する。口縁部直下に、穿

SP-187



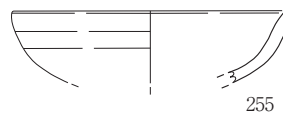
253

SP-195



254

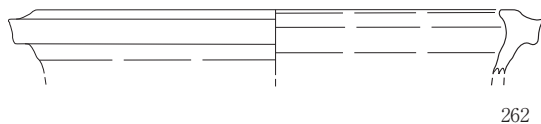
SD-41



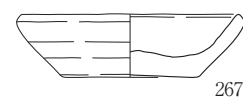
255



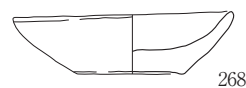
256



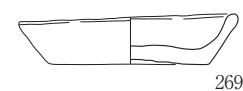
262



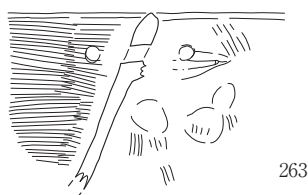
267



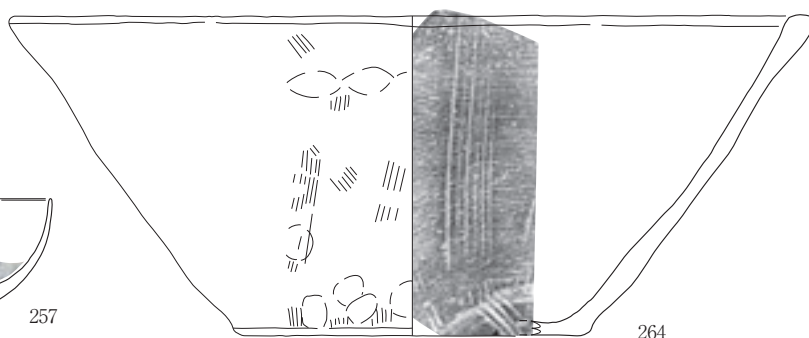
268



269



263



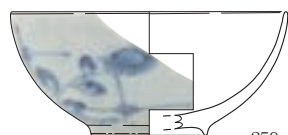
264



257



258



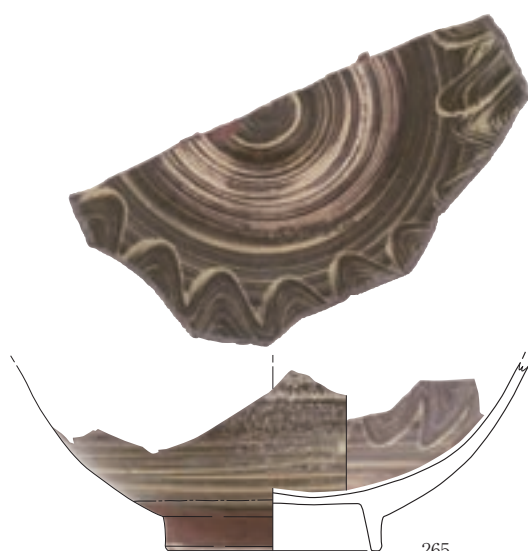
259



260



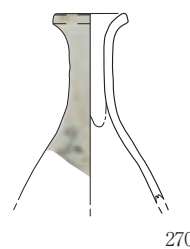
261



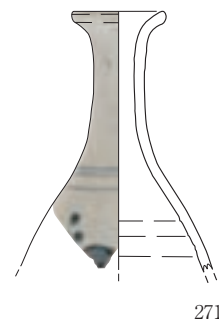
265



266



270



271



第38図 建物・溝・その他の遺構・第2遺構面出土遺物実測図（1 / 3）

孔を伴う。

264はSK-407出土の瓦質土器の播鉢である。胎土は灰色を呈する。内面はヨコハケ後、6本一単位の播目を施す。外面はタテハケによる成形痕を残す。外面に指押え痕を残す。底部はハケ目による成形痕を残す。法量は、復元口径32.0cm、器高12.8cm、復元底径12.8cmを測る。

265は2区出土の唐津系陶器の鉢である。胎土は灰茶色を呈する。外面下部から高台は露胎である。内面及び外面は刷毛目文装飾を施す。法量は、復元底径8.6cmを測る。

266は2区出土の肥前系磁器染付団重の蓋である。胎土は灰白色を呈する。口縁部は釉剥ぎする。外面に唐草文を描く。法量は、復元口径12.0cmを測る。

267から269は土師器の皿である。267はSK-196出土の遺物である。胎土は褐灰色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、復元口径9.0cm、器高2.5cm、復元底径5.4cmを測る。268はSK-172出土の遺物である。胎土は明白橙色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。底部外面に樹木の枝の痕跡が残る。法量は、口径8.5cm、器高2.4cm、底径2.4cmを測る。269はSK-273出土の遺物である。胎土は明褐白色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、口径8.7cm、器高2.4cm、底径6.4cmを測る。

270・271は2区出土の肥前系磁器染付の瓶である。270の胎土は灰白色を呈する。271の胎土は灰白色を呈する。肩部外面に3条の圏線を引く。外面に文様を描く。法量は、口径3.8cmを測る。

272は4区出土の中国産白磁の碗である。胎土は黄褐色を呈する。畳付は露胎である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施す。口縁部内面に1条、口縁部外面に2条、外面下部に2条の圏線を引く。漳州窯系か。法量は、復元口径13.0cm、器高4.7cm、高台径5.0cmを測る。

273は4区出土の青花の饅頭心碗である。胎土は灰白色を呈する。口縁部及び胴部外面下位に1条、高台外面に2条の圏線を引く。見込みに花文を描く。口縁部内面に四方攪文を描く。外面は唐草文を描く。高台内面に落款を施す。法量は、復元口径12.45cm、器高6.0cm、復元高台径4.5cmを測る。

274及び275は4区出土の肥前系磁器染付の碗である。274の胎土は灰白色を呈する。外面に牡丹唐草文を描く。法量は、復元口径8.6cm、器高4.1cm、復元高台径3.75cmを測る。275の胎土は灰白色を呈する。外面に氷裂文を地とした菊花散らし文を描く。法量は、復元口径10.2cmを測る。

276から280は漳州窯系の青花碗である。276は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。高台は露胎である。見込みに2条、外面に圏線を引く。見込みに花文を描く。外面に草文を描く。法量は、復元高台径4.4cmを測る。277は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。見込みに2条、口縁部内面、口縁部外面、外面下部、高台外面に1条の圏線を引く。法量は、復元口径12.3cm、器高5.3cm、復元高台径4.4cmを測る。278は4区出土の遺物である。胎土は明橙色を呈する。胎土目痕が見込みに残る。見込みに2条、口縁部内面及び外面に1条、高台付近に2条の圏線を引く。見込みに花文を描く。胴部外面に草文を描く。279は1区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。高台及び見込みは露胎である。見込み、口縁部内面、口縁部外面及び胴部下部に1条の圏線を引く。外面に草文を描く。法量は、復元口径13.0cm、器高4.7cm、復元高台径4.3cmを測る。280は1区出土の遺物である。胎土は淡褐灰色を呈する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施す。見込みの中央及び、高台内面に、砂が付着する。内面下部、口縁部内面、口縁部外面、胴部外面下位に1条の圏線を引く。法量は、復元口径13.0cm、器高4.7cm、高台径4.7cmを測る。



第39図 第2遺構面出土遺物実測図① (1 / 3)

281から283は1区出土の唐津系陶器の碗である。281の胎土は淡灰黄色を呈する。外面下部は露胎である。口縁部は鉄釉を施す。皮鯨手。法量は、復元口径8.0cm、復元高台径4.0cmを測る。282の胎土は明灰色を呈する。外面下部は無釉である。法量は、復元口径9.0cm、器高4.3cm、高台径4.0cmを測る。283の胎土は灰黄色を呈する。外面下部は無釉である。高台は三日月高台を呈す。法量は、復元高台径4.7cmを測る。

284は1区出土の瀬戸美濃産の天目碗である。胎土は灰茶色を呈する。内面及び外面に鉄釉を施す。外面下部は露胎である。法量は、復元口径10.7cmを測る。

285は1区出土の朝鮮産陶器碗である。胎土は灰白色を呈する。畳付は胎土目痕が残る。口縁部外面に釉溜りが残る。胎土目痕が見込みに8ヶ所残る。法量は、口径11.4cm、器高4.2cm、底径5.8cmを測る。

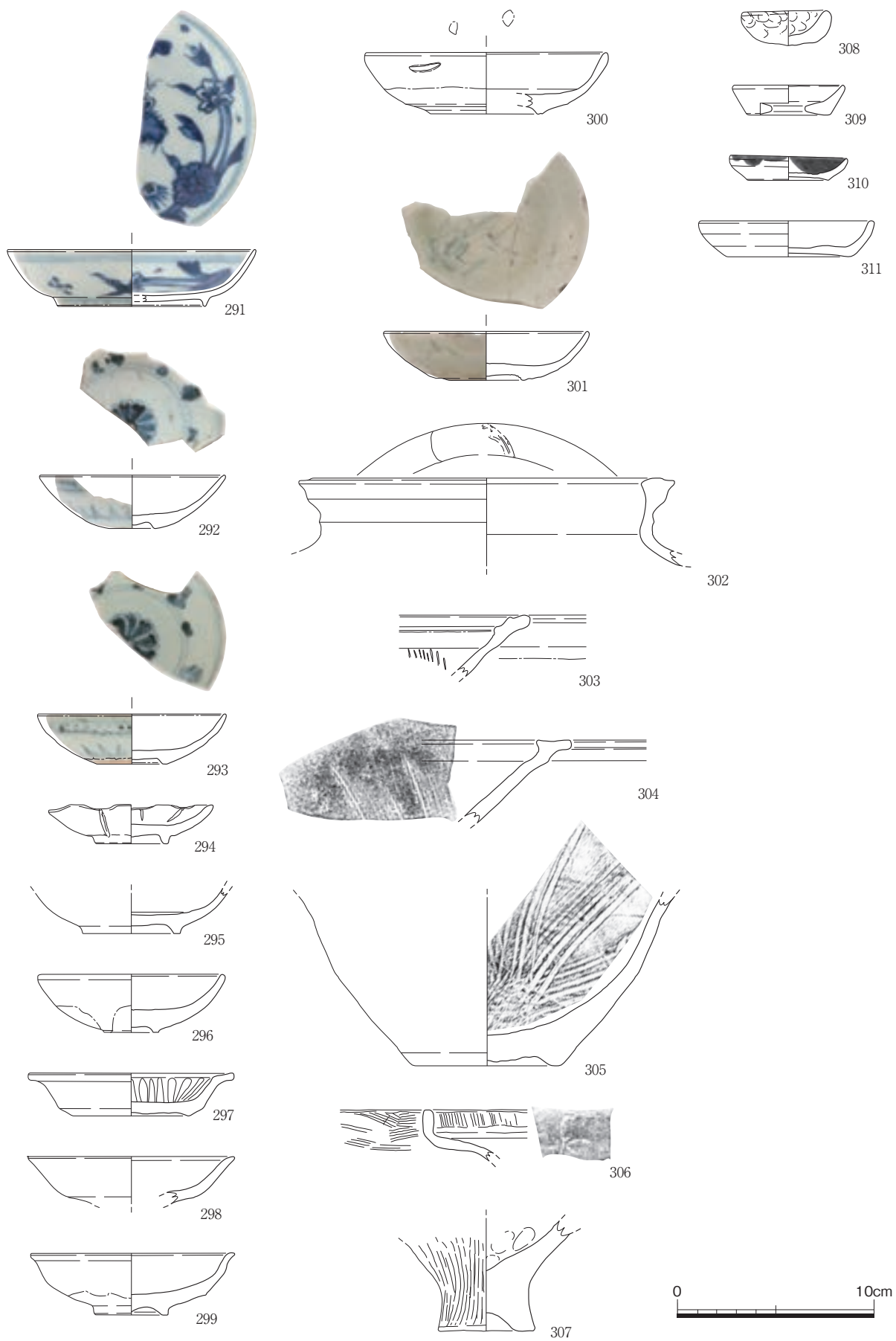
286は2区出土の唐津系陶器の向付である。胎土は暗灰色を呈する。口縁部内面及び外面に暗緑色の鉄釉を施す。胎土目痕が見込みに2ヶ所残る。法量は、復元口径12.8cm、器高4.6cm、復元高台径5.0cmを測る。

287から290は白磁の皿である。287は1区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。朝鮮系或いは内野山北窯系か。288は4区出土の遺物である。胎土は灰白色を呈する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。高台内面は露胎である。法量は、復元口径10.2cm、器高2.1cm、高台径5.8cmを測る。中国産か。289は1区出土の朝鮮産白磁の皿である。胎土は灰黄色を呈する。見込み及び畳付に胎土目が残る。法量は、高台径6.2cmを測る。290は4区出土の中国産白磁皿である。胎土は灰白色を呈する。法量は、復元口径13.4cm、器高2.9cm、復元高台径7.5cmを測る。

291から293は4区出土の青花皿である。291の胎土は灰白色を呈する。畳付は砂が付着する。口縁部内面、口縁部外面、高台外面に2条の圈線を引く。内面に草花文を描く。胴部外面に宝文を描く。法量は、復元口径13.15cm、器高3.02cm、復元高台径7.85cmを測る。292の胎土は灰白色を呈する。畳付は露胎である。高台は碁笥底状を呈す。見込みに2条、口縁部に2条の圈線を引く。見込みに菊花文を描く。内面に花文を描く。口縁部外面に波文、鋸歯文を描く。法量は、復元口径10.0cm、器高2.85cm、復元高台径2.4cmを測る。293の胎土は灰白色を呈する。口縁部は釉剥ぎする。畳付は露胎である。高台は碁笥底状を呈す。見込みに2条、口縁部に1条の圈線を引く。見込みに菊花文を描く。内面に花文を描く。口縁部外面に波文、鋸歯文を描く。法量は、復元口径10.1cm、器高2.65cm、復元高台径3.8cmを測る。

294は1区出土の中国産白磁の輪花皿である。胎土は明灰黄色を呈する。内面及び外面に灰釉を施す。口縁は輪花を呈する。法量は、口径8.8cm、器高2.1cm、底径4.0cmを測る。295は1区出土の中国産白磁皿である。胎土は明黄灰色を呈する。畳付及び高台内面は露胎である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施す。法量は、復元高台径5.2cmを測る。

296から300は陶器の皿である。296は1区出土の唐津系陶器皿である。胎土は明褐色を呈する。内面及び外面中部に緑色の釉を施す。外面下部は無釉である。外面下部はケズリ後ナデによる成形痕を残す。法量は、口径10.0cm、器高3.1cm、高台径3.0cmを測る。297は1区出土の瀬戸美濃産折ソギ皿である。胎土は薄灰色を呈する。内面及び外面に緑色の釉を施す。内面の一部及び外面底部に煤が付着する。法量は、復元口径11.0cm、器高2.3cm、底径6.4cmを測る。298は1区出土の遺物である。胎土は明黄灰色を呈する。口縁部に煤が付着する。法量は、復元口径11.0cmを測る。299は1区出



第40図 第2遺構面出土遺物実測図②（1 / 3）

土の唐津系陶器の皿である。胎土は黄灰色を呈する。内面及び外面中部に灰釉を施す。外面下部は無釉である。法量は、口径10.9cm、器高3.3cm、底径4.0cmを測る。300は1区出土の遺物である。胎土は暗灰色を呈する。外面下部は露胎である。胎土目痕が見込みに2ヶ所、高台畳付にも残る。皮鯨手。

301は4区出土の漳州窯系青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。畳付は露胎である。底部は碁笥底状を呈す。見込みに文様を描く。外面に唐草文を描く。法量は、復元口径11.0cm、器高2.6cm、高台径4.2cmを測る。

302は1区出土の陶器の甕である。胎土は明褐色を呈する。内面及び外面に灰釉を施す。口縁部に貝目痕が残る。唐津系或いは朝鮮系か。法量は、復元口径20.0cmを測る。

303から305は陶器の擂鉢である。303は1区出土の遺物である。胎土は淡赤褐色を呈する。口縁部に鉄釉を施す。8本単位の擂目を施す。304は1区出土の遺物である。胎土は明褐色を呈する。口縁部は鉄釉を施す。内面に8本単位の擂目を施す。内面に煤が濃く付着する。305は1区出土の遺物である。胎土は淡褐灰色を呈する。内面及び外面は鉄釉を施す。底部外面は露胎である。内面に6本一単位の擂目を施す。唐津系。法量は、復元高台径6.0cmを測る。

306は1区出土の瓦質土器の火消し壺である。胎土は淡灰色を呈する。内面はヨコナデによる成形痕を残す。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデによる成形痕を残す。口縁部外面はタテハケによる成形痕を残す。肩部外面に三つ葉文の押印を施す。

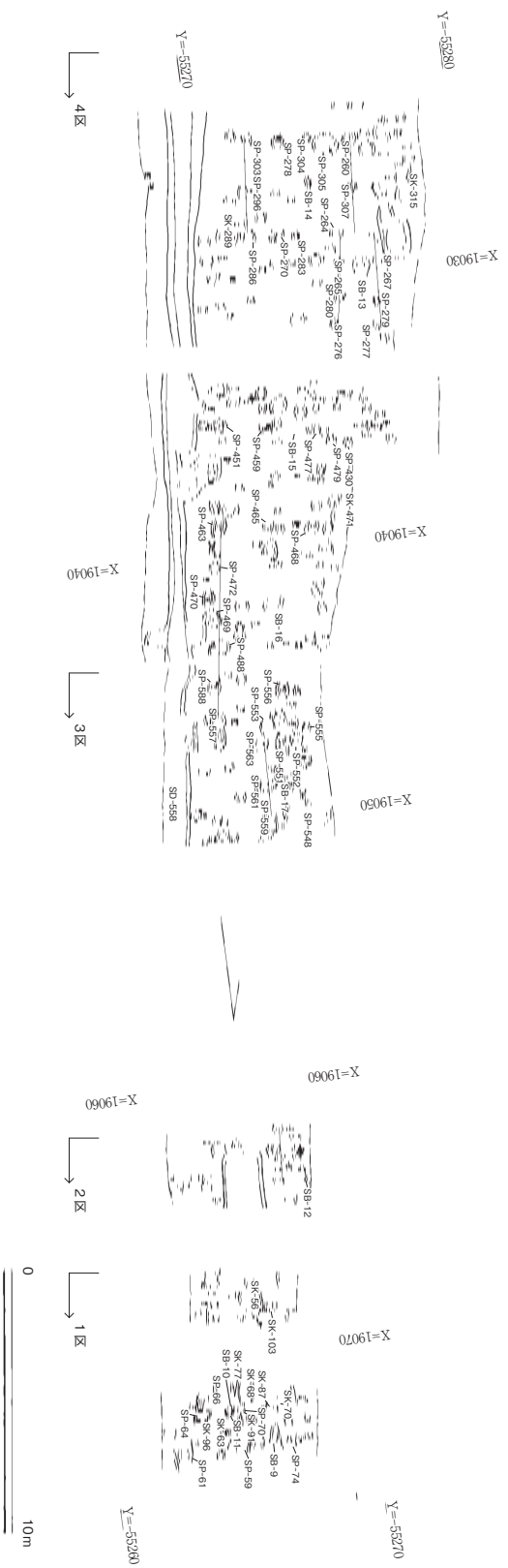
307は4区出土の弥生土器の甕である。胎土は明褐色を呈する。底部内面に指押さえ痕が残る。外面はハケによる成形痕を残す。

308は1区出土の土師器の小坏である。胎土は暗灰色を呈する。内面及び外面にナデによる成形痕を残す。手捏ねにより成形される。内面及び外面に煤が付着する。法量は、口径4.8cm、器高2.9cmを測る。

309は4区出土の土師器の小皿である。胎土は褐色を呈する。見込みから底部へと穿孔を施す。法量は、復元口径6.2cm、器高1.6cm、復元底径4.4cmを測る。

310は4区出土の土師器の灯明皿である。胎土は褐色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。外面底部は糸切り痕を残す。内面及び外面の一部に煤が付着する。法量は、口径6.2cm、器高1.3cm、底径4.2cmを測る。

311は4区出土の土師器皿である。胎土は淡灰色を呈する。底部はわずかに上げ底となる。底部外面に糸切痕を残す。法量は、復元口径9.4cm、器高1.9cm、底径1.9cmを測る。



第41図 上町道路第3遺構面遺構配置図 (1/200)

3 第3遺構面

SK-56 (第42図)

第1調査区南に位置する不定形の土坑。長軸1.1m・短軸0.8m、深さは最深部で0.15mを測る。底面は全体的に平坦で、緩やかに傾斜する。

SK-68 (第42図)

第2調査区北に位置する不定形の土坑で、調査区の南側に広がっているため全容は不明。長軸0.8m・短軸0.5m、深さは最深部で0.4mを測る。底面は全体的に平坦で、南側はテラス状になり、北側は急な傾斜を呈す。

SK-255 (第42図)

第4調査区南に位置する不定形の土坑で、調査区の西側に広がっているため全容は不明。長軸0.6m・短軸0.25m以上、深さは最深部で0.2mを測る。底面は南側から北側に傾斜し、緩やかに傾斜する。

出土遺物 (第49図)

312は朝鮮産陶器の鉢である。胎土は淡緑白色を呈する。砂目痕が見込みに5ヶ所、畳付に2ヶ所残る。

SK-315 (第42図)

第4調査区西に位置する不定形の土坑で、調査区の西側に広がっているため全容は不明。長軸1.6m・短軸1.1m以上、深さは最深部で0.5mを測る。底面は平坦で、南側かがテラス状に立ち上がり、緩やかに傾斜する。

SK-471 (第42図)

第4調査区西に位置する不定形の土坑で、調査区の西側に広がっているため全容は不明。長軸0.97m・短軸0.7m以上、深さは最深部で0.1mを測る。底面は平坦で、緩やかに傾斜する。

掘立柱建物

SB-9 (第43図)

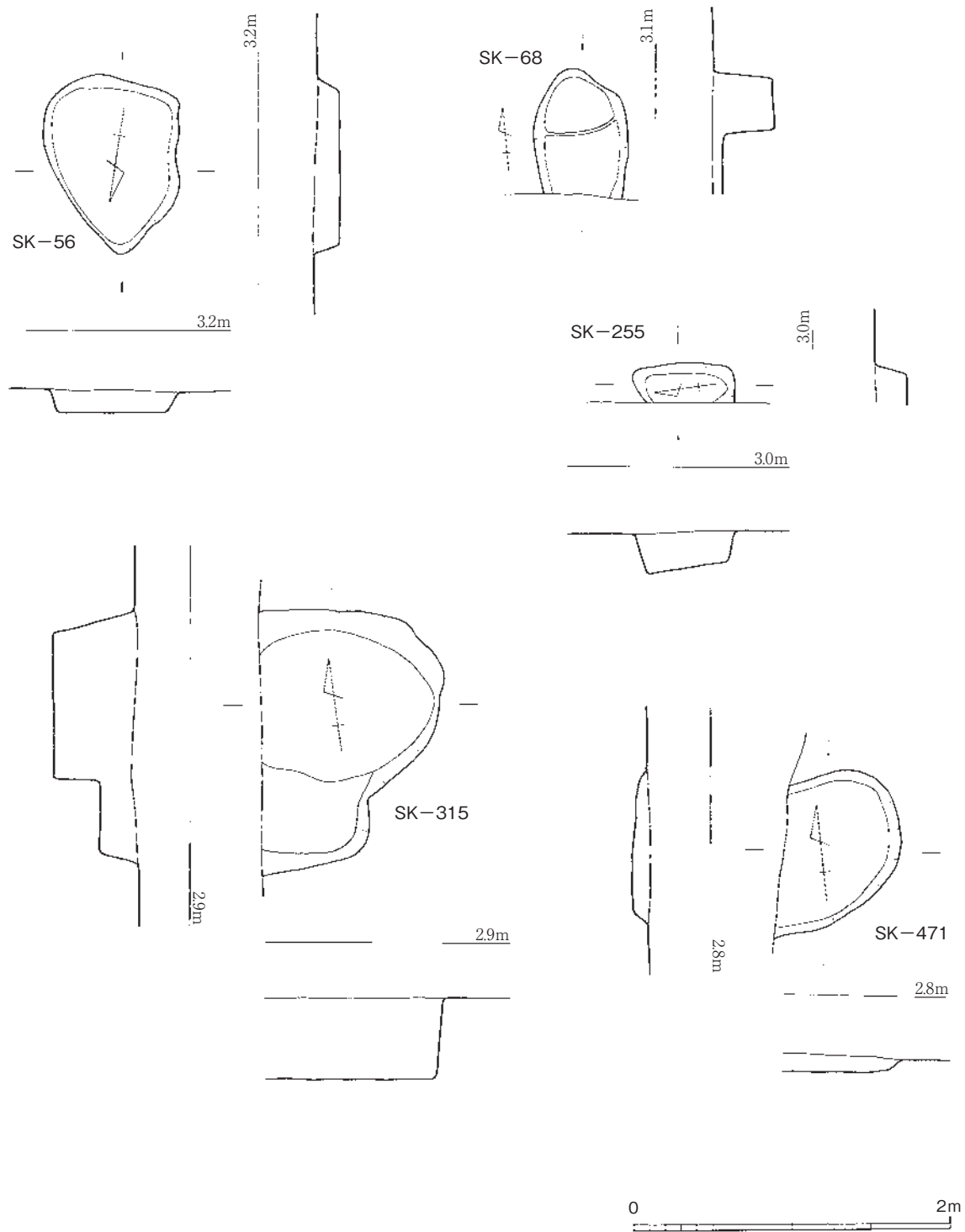
1区北で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、梁行は不明であるため、本来の形状は不明である。

柱間は桁側で、180cmから200cmを測る。

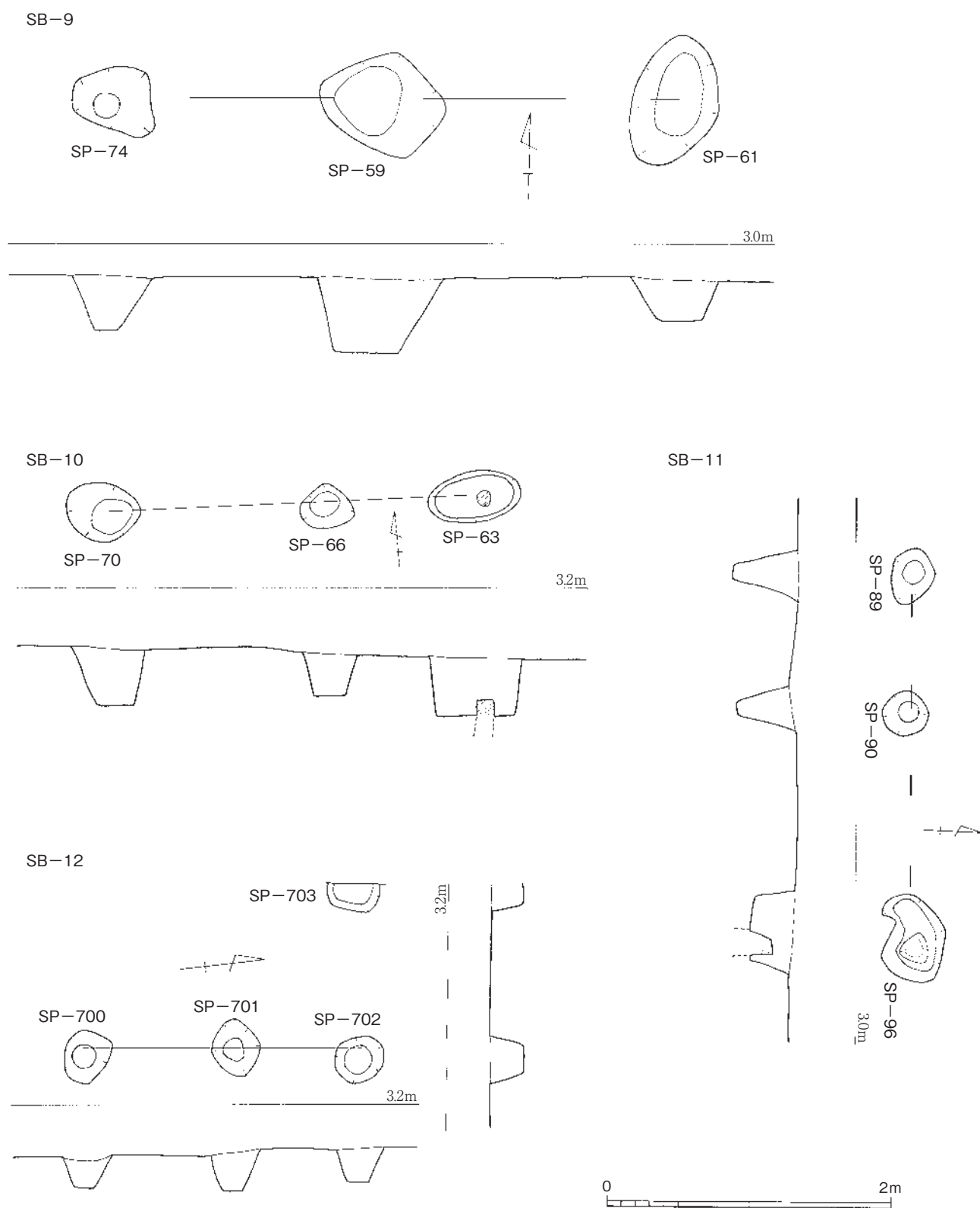
SB-10 (第43図)

1区北、SB-9の南で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、梁行は不明であるため、本来の形状は不明である。

柱間は桁側で、120cmから150cmを測る。



第42図 SK-56・68・255・315・471 実測図 (1/40)



第43図 SB-9・10・11・12 実測図 (1/40)

SB-11（第43図）

1区北、SB-10の直下で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、梁行は不明であるため、本来の形状は不明である。

柱間は桁側で、100cmから160cmを測る。

SB-12（第43図）

2区西で検出した遺構である。棟を南北にとり、桁行2間を検出、梁行1間を検出し、側柱建物に復元される

柱間は桁側で、100cmから160cm、梁側で、170cmを測る。

SB-13（第44図）

4区西で検出した遺構である。棟を南北にとり、桁行3間を検出、梁行1間を検出し、側柱建物に復元される。

柱間は桁側で、90cmから110cm、梁側で、110cmを測る。SK-265から遺物が出土する。

出土遺物（第49図）

314はSP-265出土の漳州窯系青花の碗である。胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。見込みに2条、外面下部に1条の圈線を引く。見込みに花文を描く。外面に草花文を描く。法量は、復元高台径5.6cmを測る。

315はSP-265から出土した、瓦質土器のこね鉢である。胎土は灰色を呈する。内面はヨコナデ。外面はタテハケによる成形痕を残す。口縁部外面に指押え痕を残す。法量は、復元口径23.4cmを測る。

SB-14（第45図）

4区南で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行3間を検出、梁行2間を検出し、側柱建物に復元される。

柱間は桁側で、120cmから170cm、梁側で、120cmから200cmを測る。SK-260から遺物が出土する。

出土遺物（第49図）

313はSP-260から出土した土師器の皿である。胎土は暗褐色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。口縁部内面に煤が付着する。法量は、口径5.9cm、器高1.9cm、底径3.8cmを測る。

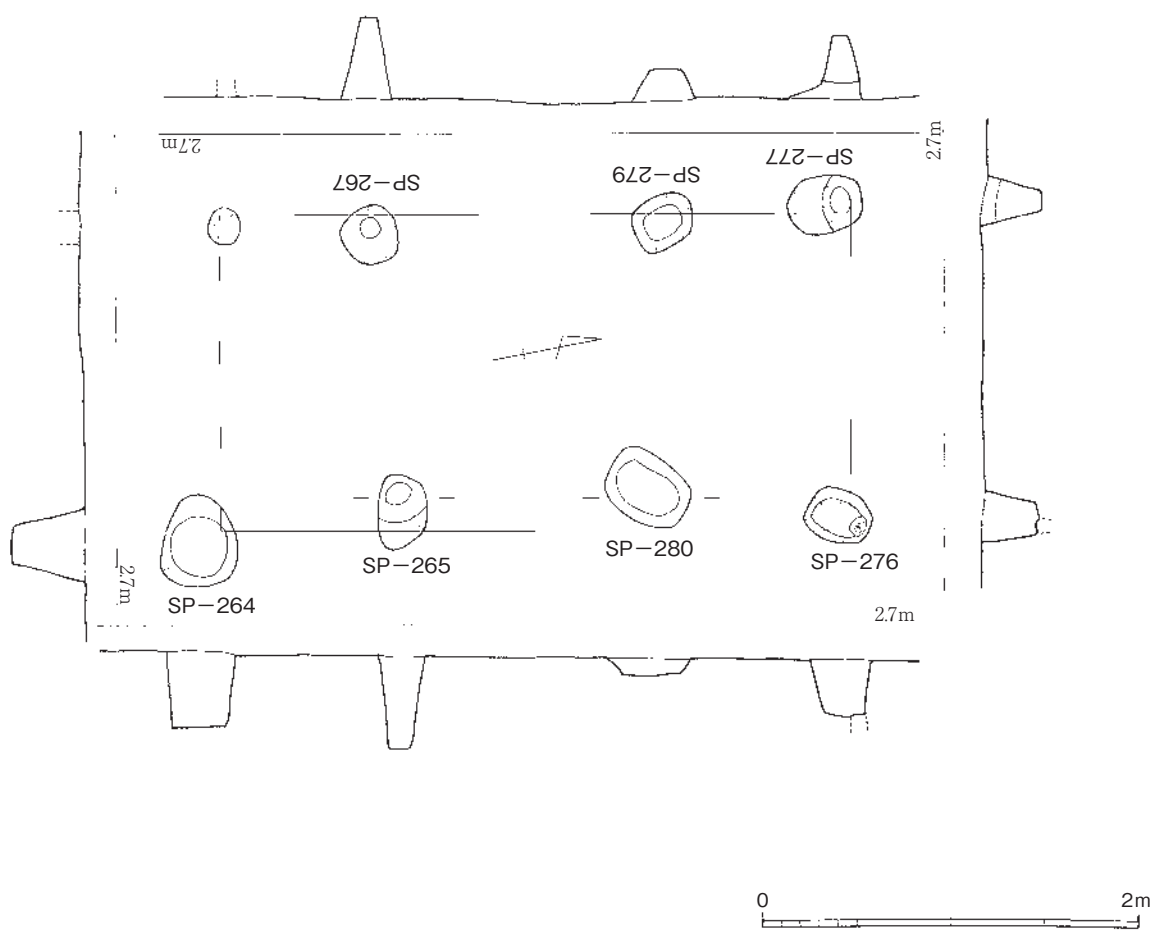
SB-15（第46図）

4区中央で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、梁行は不明であるため、全容は不明である。

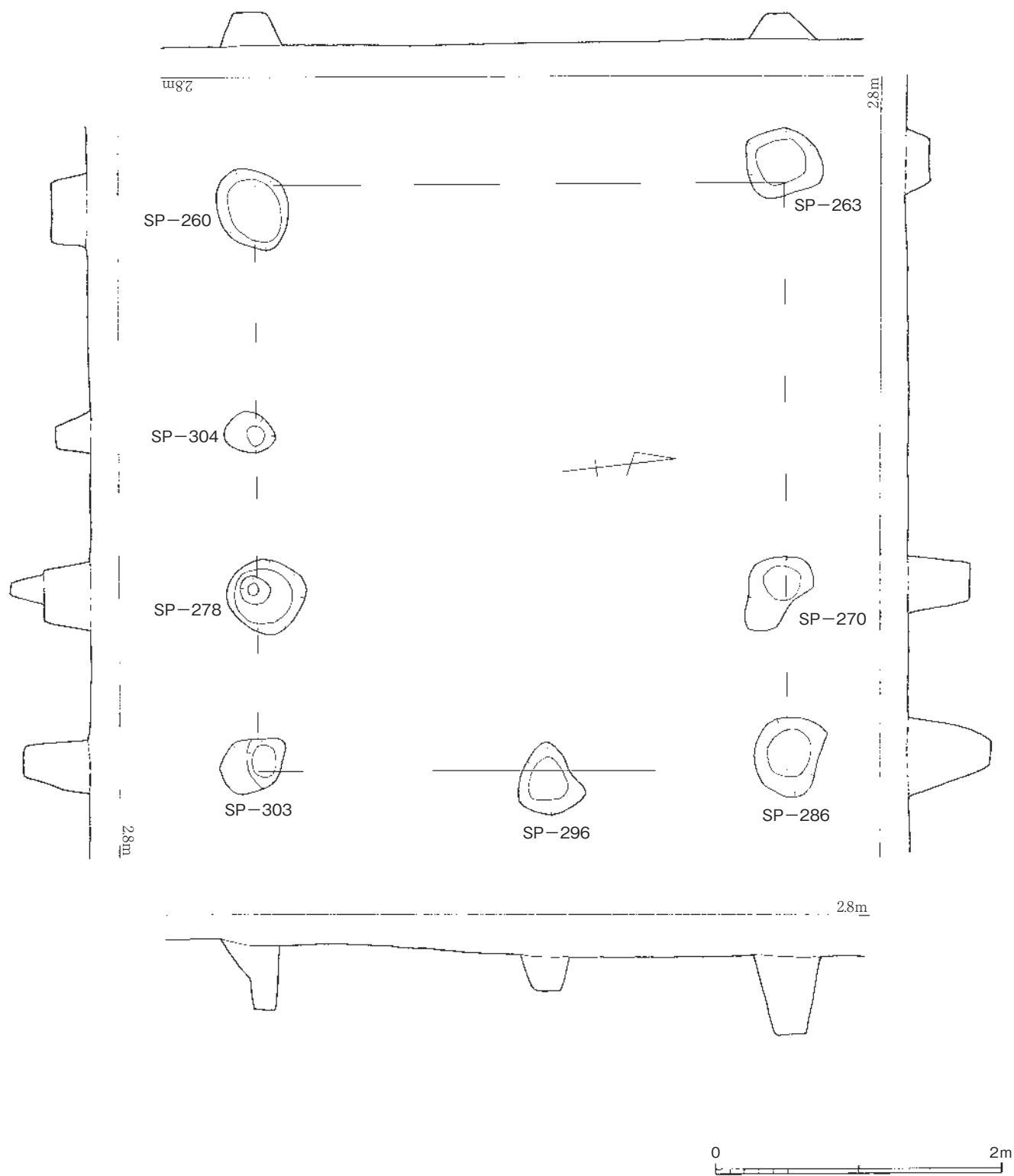
柱間は桁側で、180cmから300cmを測る。

SB-16（第47図）

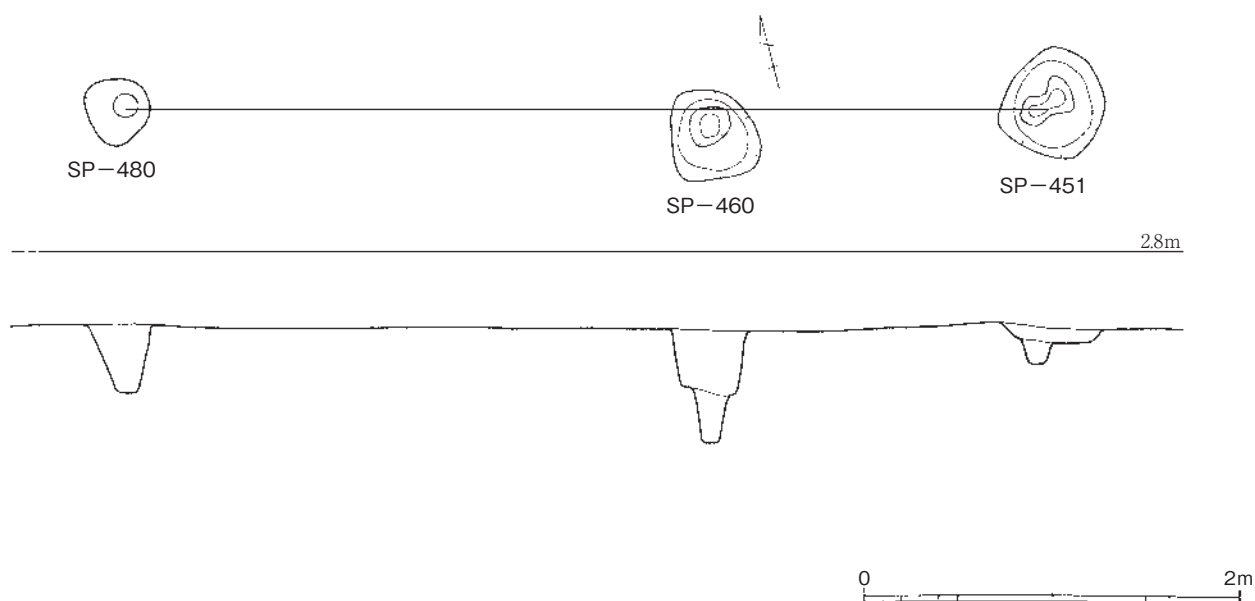
4区から3区に渡り検出した遺構である。棟を南北にとり、桁行5間を検出、梁行2間を検出し、側柱建物に復元されるが、西側は不明である。



第44図 SB-13 実測図 (1/40)



第45図 SB-14 実測図 (1/40)



第46図 SB-15 実測図（1/40）

柱間は桁側で、120cmから150cm、梁側で、150cmから160cmを測る。

SB-17（図版6、第48図）

3区西で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁行2間を検出、梁行1間を検出し、側柱建物に復元されるが、西側は不明である。

柱間は桁側で、130cmから160cm、梁側で、150cmを測る。

出土遺物（第49図）

316は瓦質土器の播鉢である。胎土は明褐色を呈する。8本一単位の播目を施す。内面の一部に煤が付着する。胴部外面に指押え痕を残す。法量は、復元口径29.5cmを測る。

その他の遺構出土遺物（図版9、第49図）

317はSK-261出土の唐津系陶器絵唐津の皿である。胎土は淡灰色を呈する。口縁部内面に、鉄釉による文様を描く。口縁は輪花状を呈する。

318はSK-318出土の唐津系陶器の碗である。胎土は暗灰色を呈する。外面下部は露胎である。法量は、口径10.8cm、器高5.3cm、高台径4.1cmを測る。

319はSK-216出土の陶器の播鉢である。胎土は明褐色を呈する。口縁部内面及び外面はナデによる成形痕を残す。また、ナデの後、櫛目による成形痕を残す。

320はSP-556出土の土師器の皿である。胎土は黄灰色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。外面の一部に煤が付着する。法量は、復元口径6.9cm、器高1.8cmを測る。

321はSK-261出土の瓦質土器の火鉢である。胎土は白灰色を呈する。内面及び外面は、ヨコナデによる成形痕を残す。法量は、復元口径30.0cmを測る。

322は4区出土の朝鮮産陶器の碗である。胎土は灰白色を呈する。高台は竹の節状を呈する。見込み及び畳付に砂目痕が残る。法量は、復元高台径6.6cmを測る。

323は1区出土の朝鮮産陶器の碗である。胎土は灰白色を呈する。高台は竹の節状を呈する。高台は竹節状で露胎である。胎土目痕が見込みに1ヶ所、畳付に1ヶ所残る。法量は、復元高台径7.0cmを測る。

324は1区出土の朝鮮産白磁の皿である。胎土は灰白を呈する。法量は、復元口径16.8cmを測る。

325は1区出土の漳州窯系青花の碗である。胎土は灰白色を呈する。口縁部内面及び外面にそれぞれ1条の圈線を引く。外面に文様を描く。

326及び327は1区出土の青花の皿である。326の胎土は灰白色を呈する。見込み及び口縁部内外面にそれぞれ2条の圈線を引く。外面に唐草文を描く。327の胎土は灰白色を呈する。畳付は露胎である。底部は碁笥底状を呈す。見込みに2条の圈線を引く。見込みに花文を描く。外面に鋸歯文を描く。328は1区から出土した漳州窯系青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。見込み、口縁部内面、口縁部外面、胴部外面下部に1条の圈線を引く。口縁部外面に唐草文を描く。

329から332は1区出土の漳州窯系青花の碗である。329の胎土は灰白色を呈する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎが施される。高台は鉄漿を塗布する。見込み、高台外面に1条の圈線を引く。法量は、復元高台径5.0cmを測る。330の胎土は淡黄色を呈する。高台は露胎である。見込み、外面に1条の圈線を引く。見込みに草花文を描く。外面に草文を描く。法量は、高台径4.7cmを測る。331の胎土は灰白色を呈する。外面下部から高台は露胎である。見込みに2条、外面下部に1条の圈線を引く。見込みに草花文を描く。法量は、高台径4.8cmを測る。332の胎土は暗灰色を呈する。口縁部内面、口縁部外面に1条の圈線を引く。

333は青花の皿である。胎土は灰白色を呈する。畳付に砂が付着する。見込みに圈線を引く。

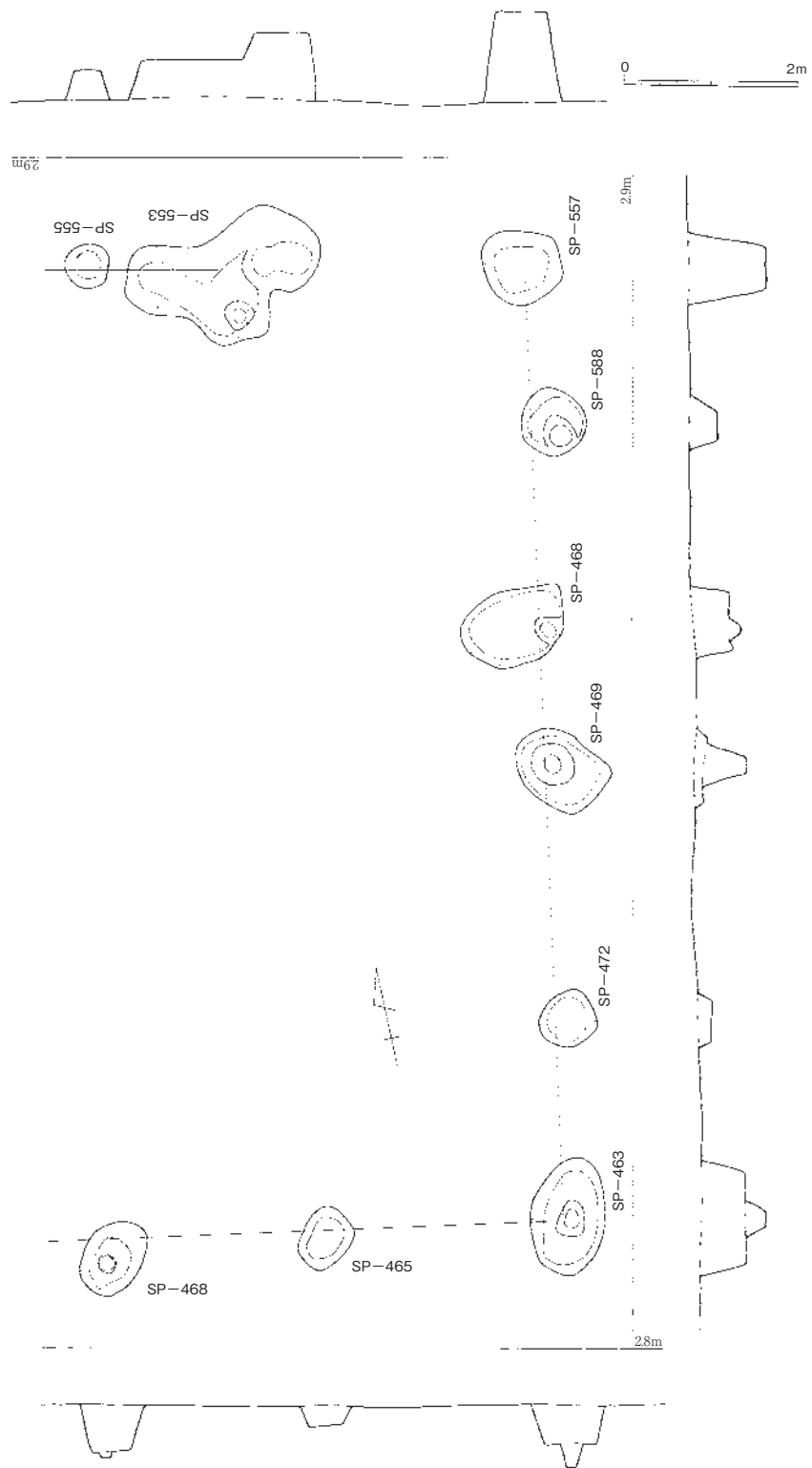
334は4区出土の漳州窯系の青花碗である。胎土は淡黄色を呈する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。見込み、口縁部内面、口縁部外面、胴部下位に1条の圈線を引く。外面に唐草文を描く。法量は、復元口径13.4cm、器高4.3cm、復元高台径5.2cmを測る。

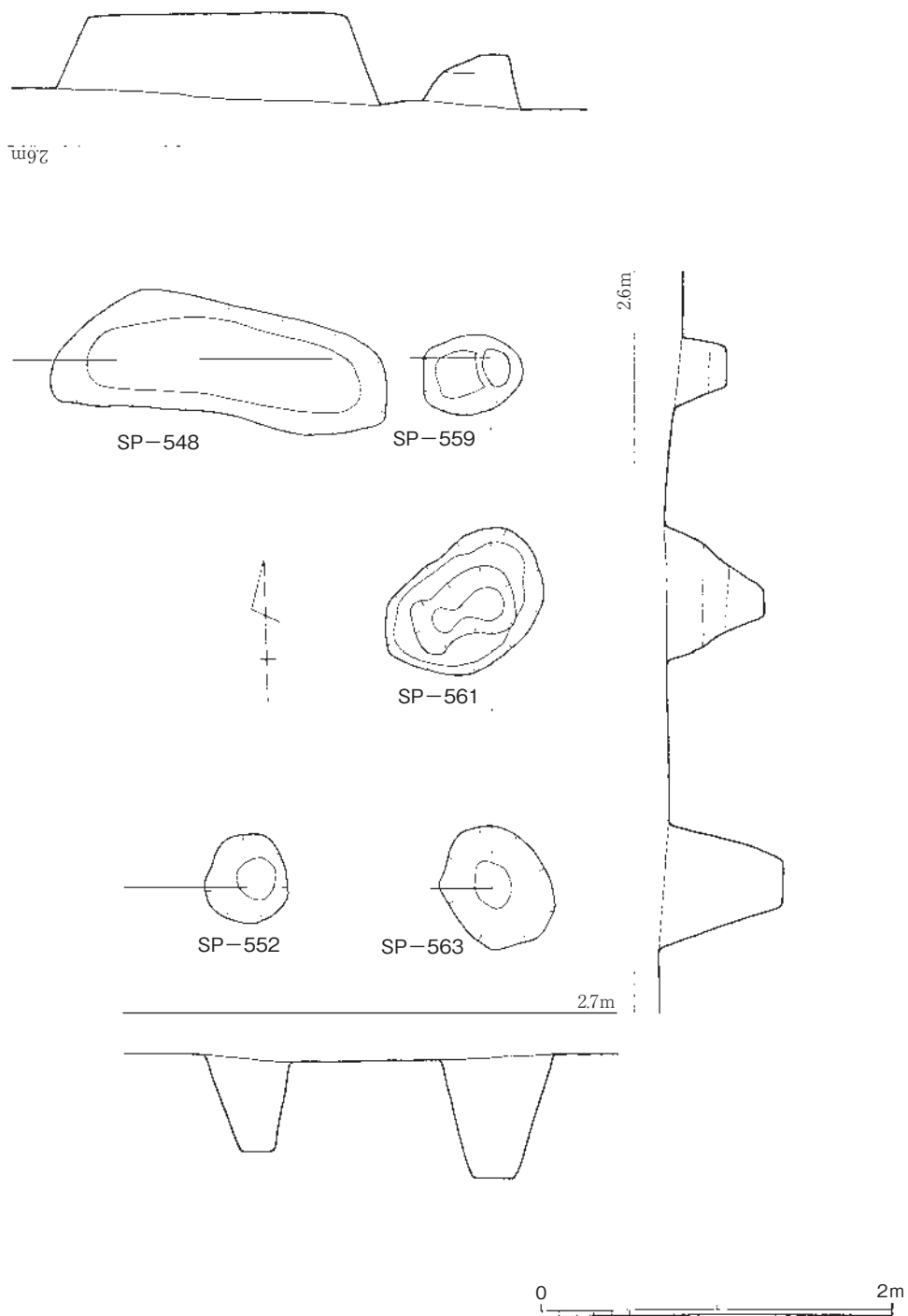
335は1区出土の唐津系陶器の碗である。胎土は淡灰色を呈する。内面及び外面に灰釉を施す。外面下部は露胎である。法量は、口径11.7cm、器高6.2cm、高台径5.2cmを測る。

336は1区出土の朝鮮産白磁碗である。胎土は淡灰色を呈する。見込み及び畳付に胎土目痕が残る。法量は、口径14.9cm、器高6.0cm、高台径6.6cmを測る。

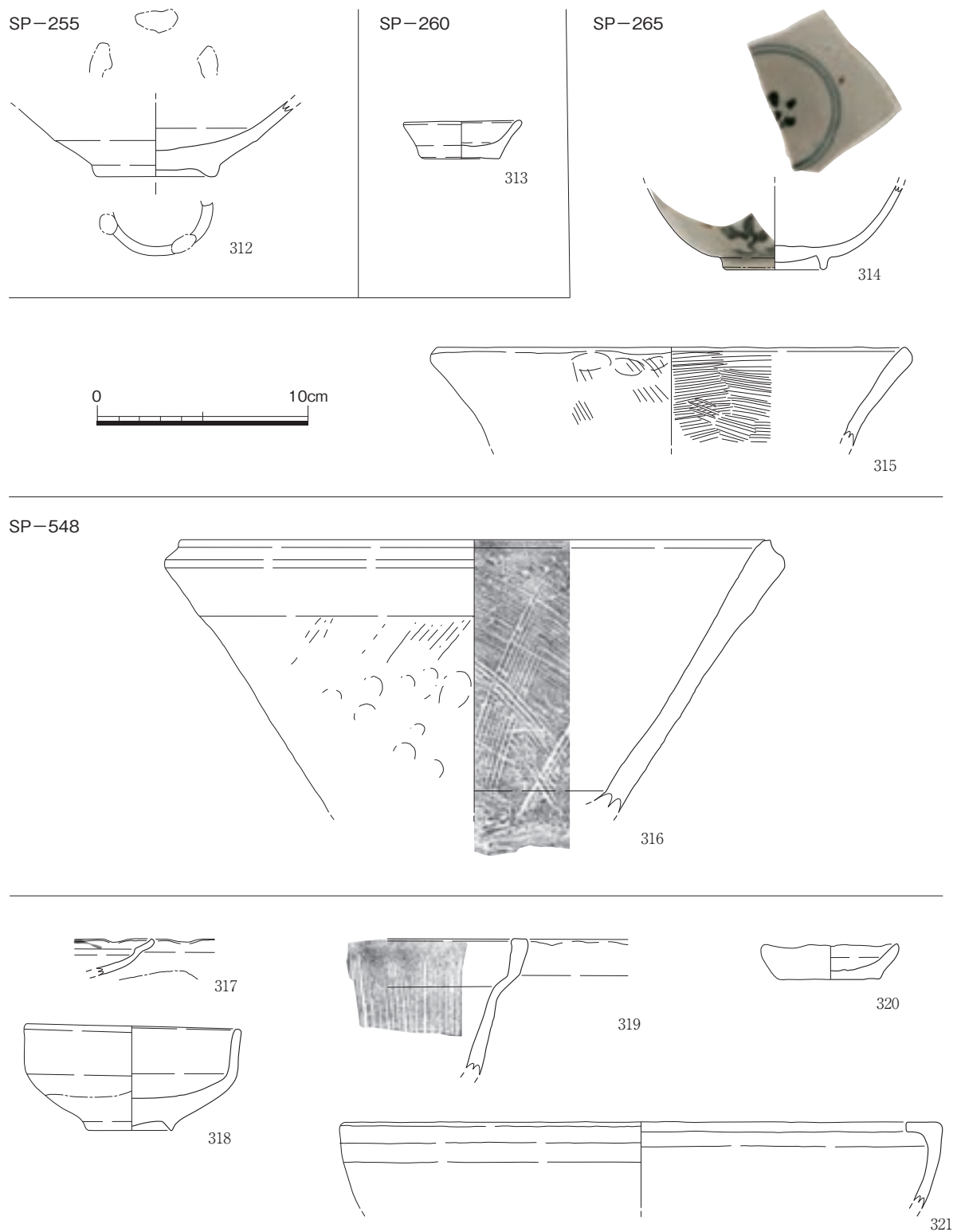
337は1区出土の瓦質土器の鍋である。胎土は灰色を呈する。内面にヨコハケによる成形痕を残す。外面にタテハケによる成形痕を残す。口縁部下位に鐔をつくり、鐔上方に穿孔を施す。外面に煤が付着する。

338から342及び344は土師器の皿である。338は1区出土の遺物である。胎土は褐色を呈する。内

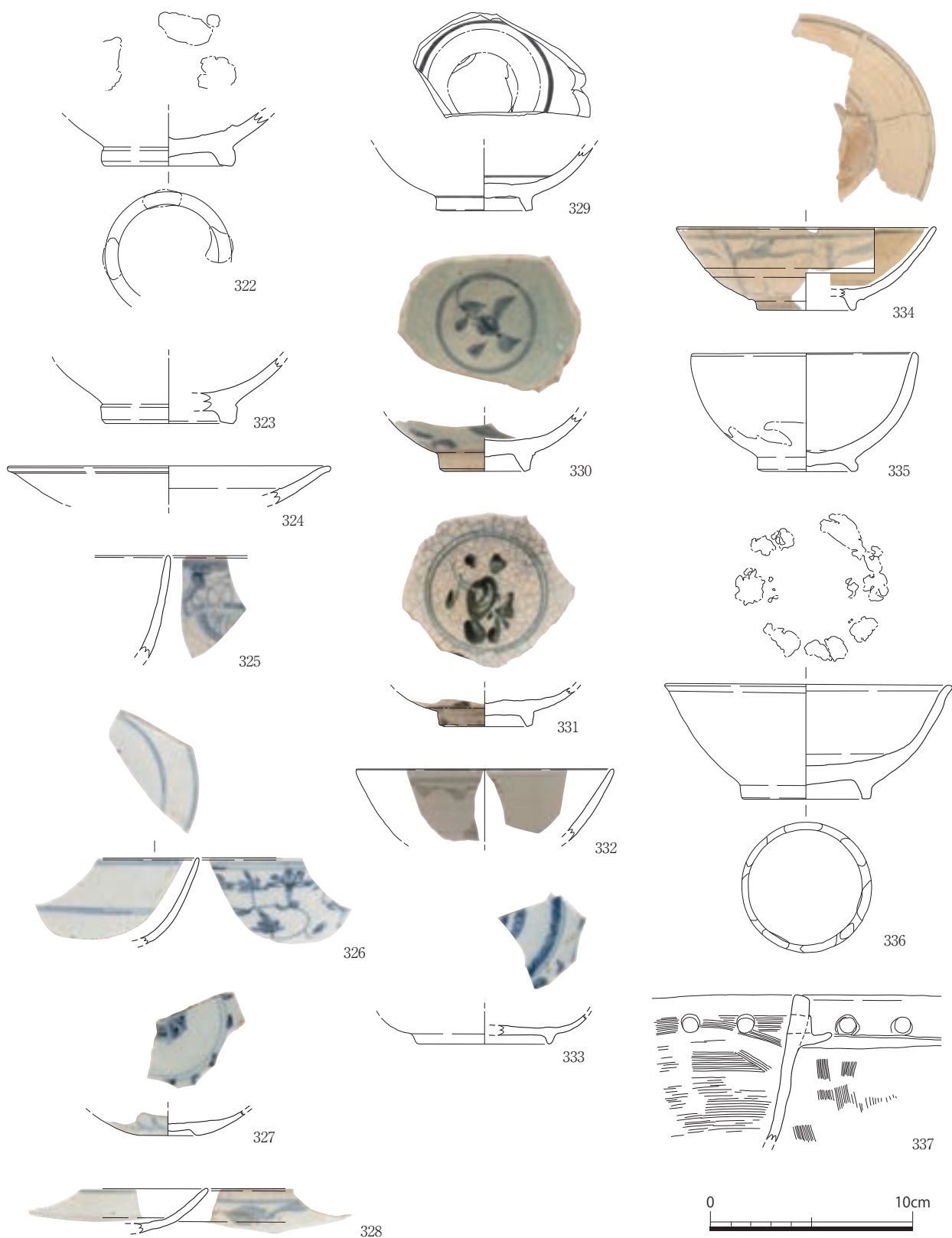




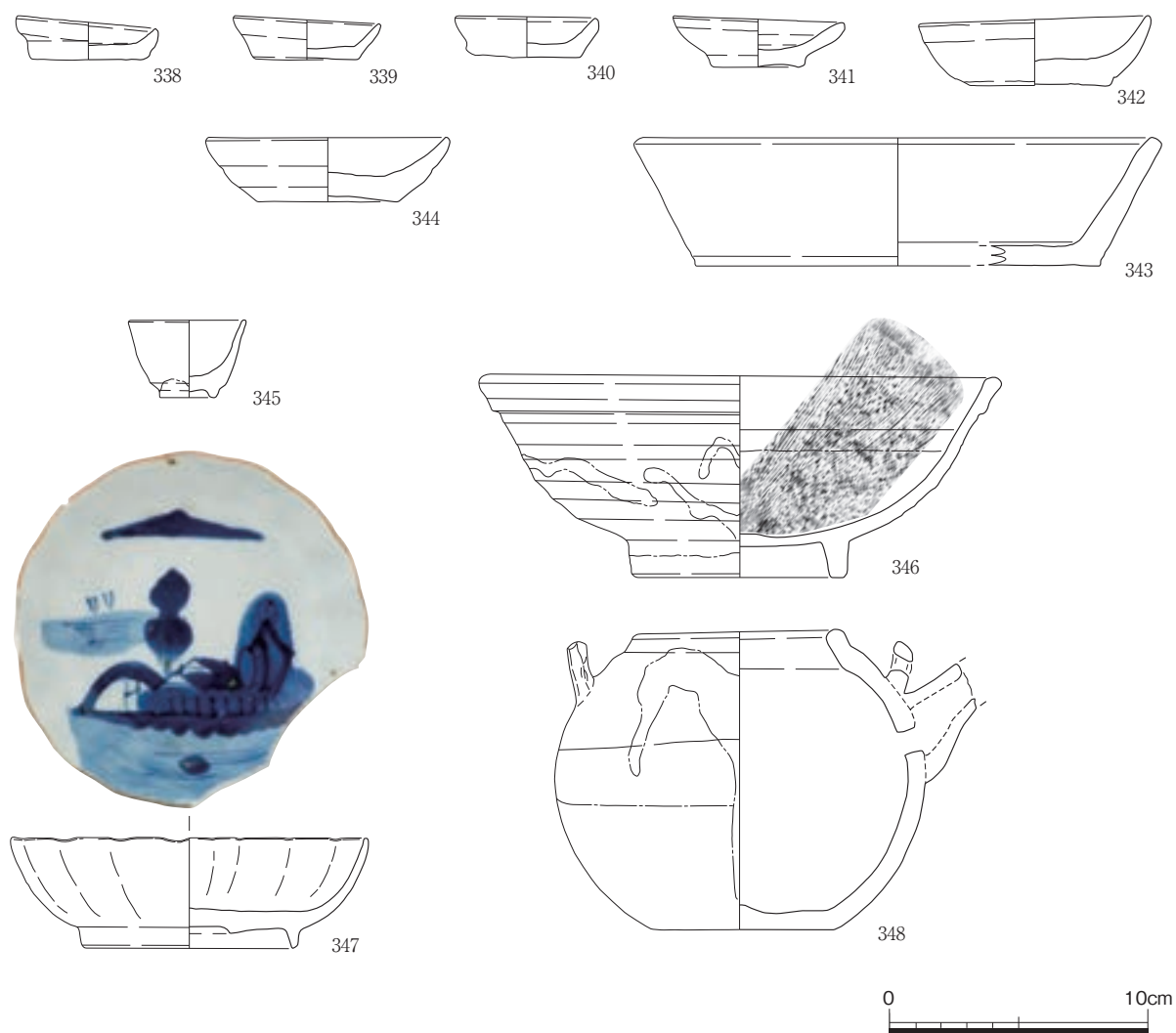
第48図 SB-17 実測図 (1/40)



第49図 SK-255・建物・その他の遺構出土遺物実測図（1 / 3）



第50図 第3遺構面出土遺物実測図① (1 / 3)



第51図 第3遺構面出土遺物実測図②（1 / 3）

面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。外面及び内面の一部に煤が付着する。法量は、口径5.8cm、器高1.8cm、底径4.6cmを測る。339は4区出土の遺物である。胎土は褐色を呈する。底部内面はナデによる成形痕を残す。外面はヨコナデによる成形痕を残す。外面底部は糸切り痕を残す。外面の一部に煤が付着する。法量は、口径6.0cm、器高2.8cm、底径4.2cmを測る。340は1区出土の遺物である。胎土は褐色を呈する内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。外面及び内面の一部に煤が付着する。法量は、口径5.8cm、器高1.7cm、底径4.2cmを測る。341は1区出土の遺物である。胎土は暗灰色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、復元口径9.9cm、器高2.6cm、復元底径5.8cmを測る。342は1区出土の灯明皿である。胎土は暗褐色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は糸切り痕を残す。外面及び内面の一部に煤が付着する。法量は、口径9.4cm、器高2.8cm、底径6.0cmを測る。

343は1区出土の土師質土器の焙烙である。胎土は暗褐を呈する。内面は煤が付着し、器面は剥離する。外面は指押え痕を残す。法量は、復元口径21.4cm、器高5.2cm、復元底径16.4cmを測る。

344は1区出土の土師器皿である。胎土は褐色を呈する。内面及び外面はヨコナデによる成形痕を残す。底部外面は板状圧痕が残る。外面及び内面の一部に煤が付着する。法量は、口径5.8cm、器高1.8cm、底径4.6cmを測る。

345は1区出土の肥前系白磁の小坏である。胎土は乳白色を呈する。高台は露胎である。法量は、復元口径4.8cm、器高3.2cm、高台径2.3cmを測る。

346は4区出土の陶器の高取系陶器の播鉢である。胎土は黄褐色を呈する。高台は露胎である。内面は10本一単位の播り目を施す。底部外面は糸切り痕を残す。法量は、口径21.2cm、器高8.3cmを測る。

347は4区出土の肥前系磁器染付の皿である。胎土は灰白色を呈する。口縁部は鉄釉を施す。蛇目凹形高台である。見込みに山水文を描く。法量は、復元口径14.5cm、器高4.5cm、底径8.8cmを測る。

348は4区出土の唐津系陶器の土瓶である。胎土は橙褐色を呈する。内面は露胎である。外面下部はケズリによる成形痕を残す。

4 瓦（図版10、第52図図）

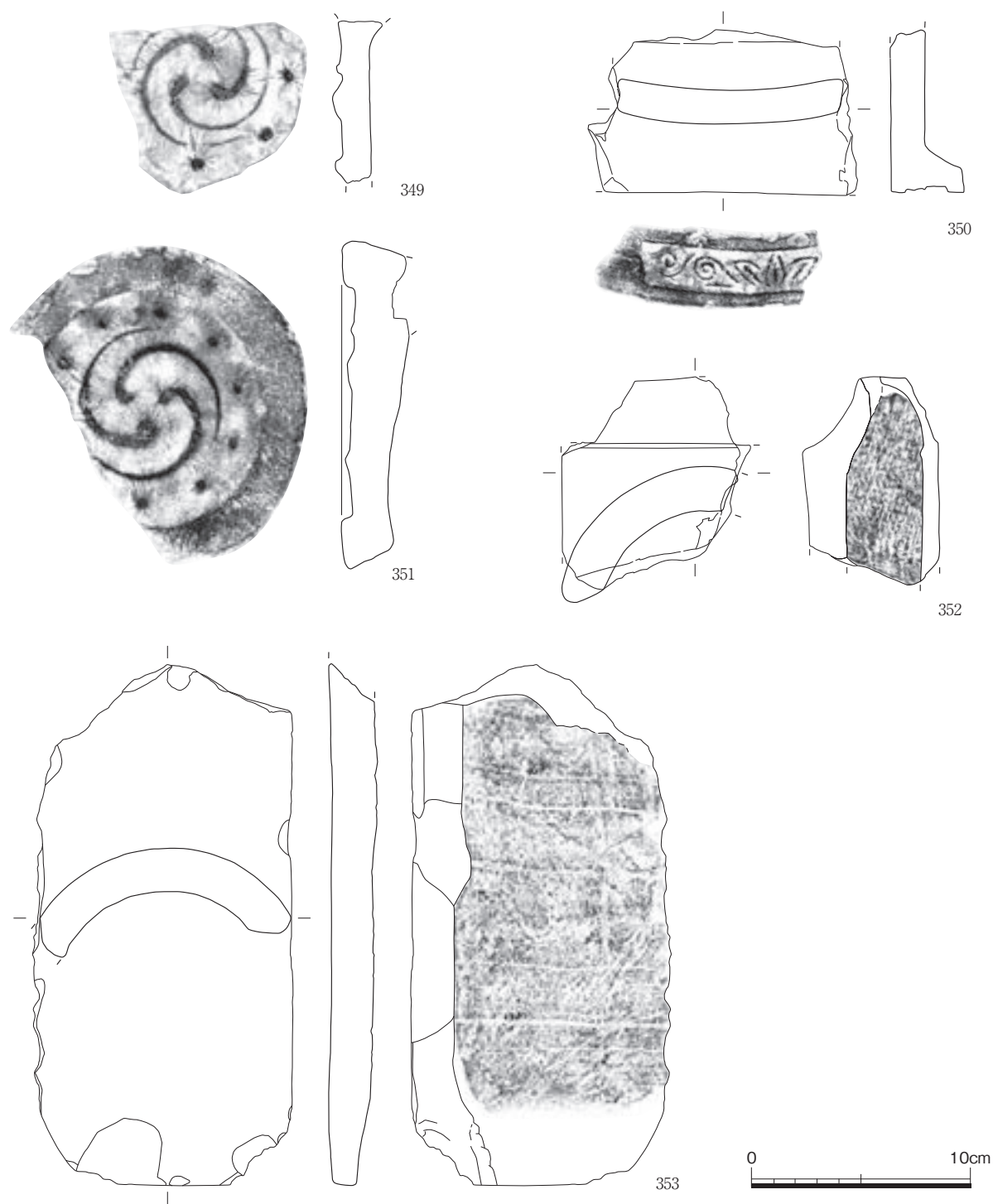
349はSK-601から出土した軒丸瓦である。胎土は淡灰色を呈する。内面はナデ、外面は押型の後ナデによる成形痕を残す。左巻の三ツ巴文を施す。

350は1区第1遺構面出土の平瓦である。瓦当は主文3弁花文、唐草文を描く。

351は4区表採の軒丸瓦である。瓦当の文様は右巻の三巴文である。

352は2区第1遺構面出土の丸瓦である。胎土は暗灰色を呈する。内面に縄目痕を残す。

353はSK-8出土の丸瓦である。胎土は暗灰色を呈する。内面及び外面に布目を残す。



第52図 瓦実測図（1 / 3）

5 土製品（図版10、第53・54図）

354から361は管状土錘である。354はSK-77出土の遺物である。胎土は暗茶灰色を呈する。手捏により成形する。外面は燃焼を受けた痕跡がある。355は4区遺構面出土の遺物である。356は4区第1遺構面出土の遺物である。胎土はにぶい暗灰黄色を呈する。手捏ねにより成形する。357から361はSK-11出土の遺物である。手捏により成形する。357の胎土は黄褐灰色を呈する。358の胎土は淡褐灰色を呈する。359の胎土は灰色を呈する。360の胎土は淡褐灰色を呈する。361の胎土は黄灰色を呈する。

362から366は土製品の鈴である。手捏ねにより成形する。362は1区第2遺構面出土の遺物である。363はSK-13出土の遺物である。胎土は橙褐色を呈する。364は1区第1遺構面出土の遺物である。胎土は暗茶色を呈する。365は1区第1遺構面出土の遺物である。胎土は暗灰色を呈する。366は1区第2遺構面出土の遺物である。胎土は明褐色を呈する。

367から377は土製品の動物である。手捏ねにより成形する。367は1区第1遺構面出土の犬である。胎土は黄橙灰色を呈する。368は4区第1遺構面出土の馬である。胎土は明褐色を呈する。369はSK-591出土の馬である。胎土は黄橙灰色を呈する。370は4区第1遺構面出土の馬である。馬の背中には猿の様な動物が乗る。胎土は褐色を呈する。371は1区第1遺構面出土の馬である。胎土は褐色を呈する。372は1区第1遺構面出土の馬である。胎土は淡褐色を呈する。373は1区第1遺構面出土の馬または犬である。胎土は淡褐色を呈する。374は1区第3遺構面出土の犬である。胎土は黄橙灰色を呈する。375は4区第1遺構面出土の馬または犬である。胎土は褐色を呈する。376は、4区第1遺構面出土の馬または犬である。胎土は灰色を呈する。377はSK-192出土の二頭の犬である。胎土は黄橙灰色を呈する。

378及び379は人形である。378は4区第1遺構面出土である。胎土は黄橙灰色を呈する。手捏ねにより整形する。379は3区第1遺構面出土の遺物である。胎土は黄橙灰色を呈する。型押により成形する。

380は1区第2遺構面出土の魚である。胎土は黄橙灰色を呈する。手捏ねにより成形する。

381は1区SK-13出土の窯道具か。胎土は赤褐色を呈する。手捏ねにより成形する。全体的に二次焼成を受けた痕跡がある。

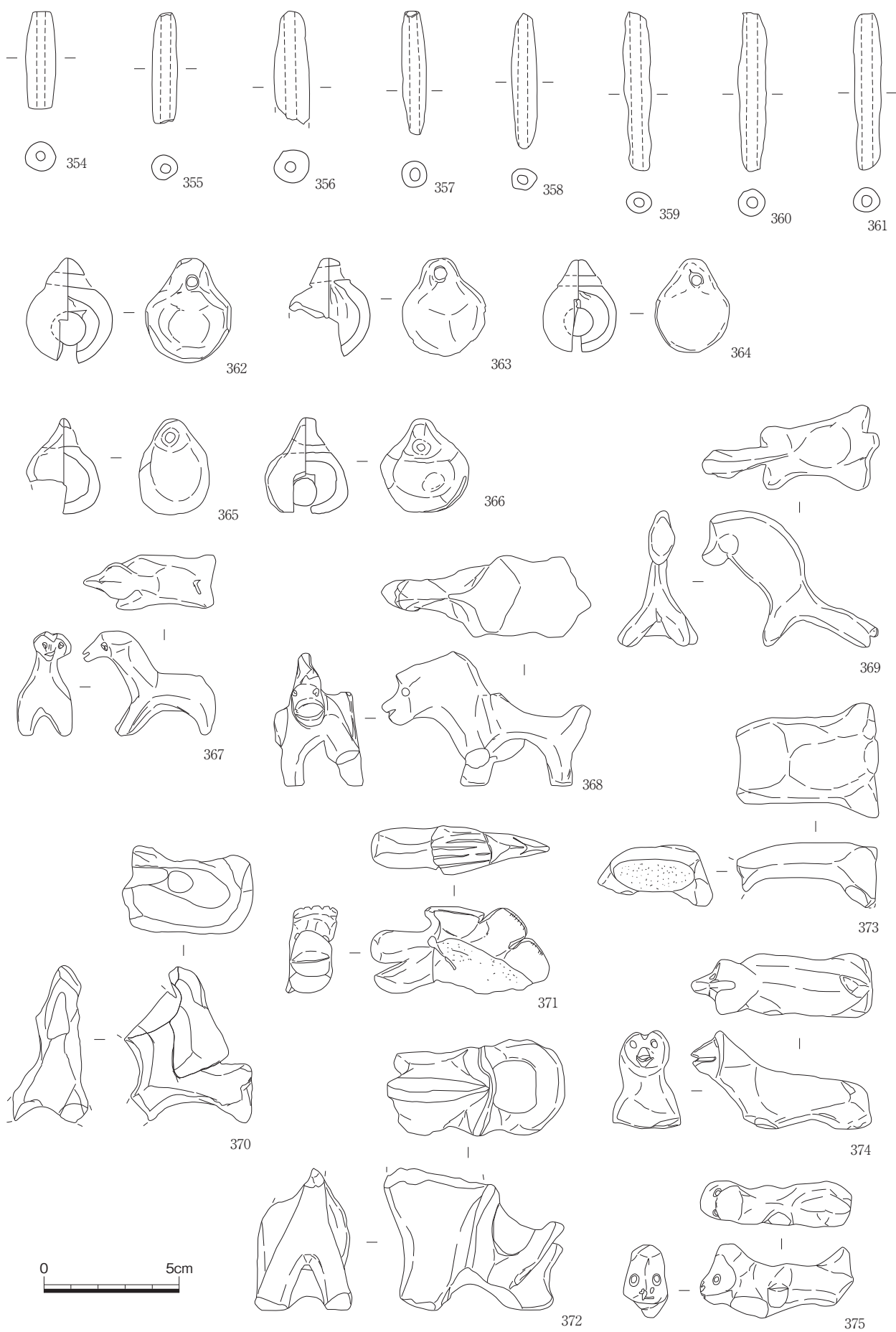
382は1区第1遺構面出土の煙管火皿である。胎土は橙灰色を呈する。手捏ねにより成形する。

6 石製品（図版10、第55図）

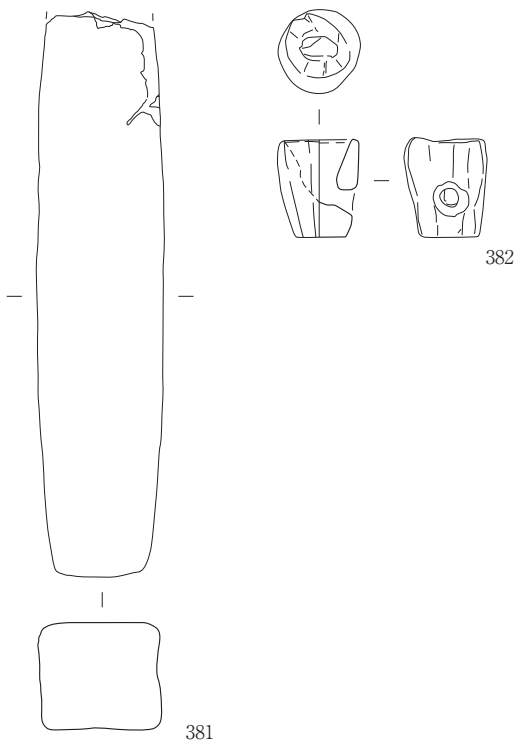
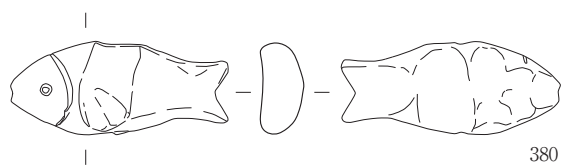
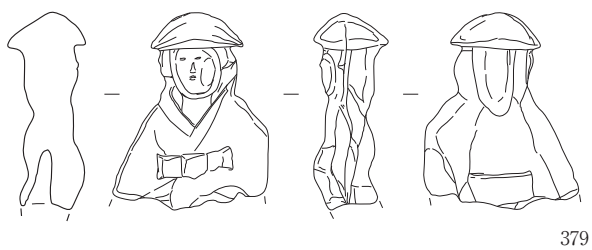
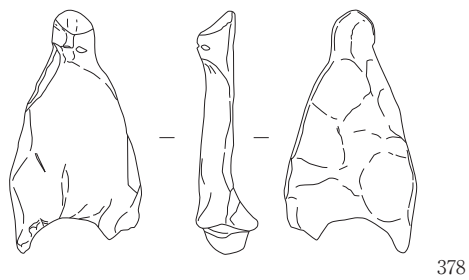
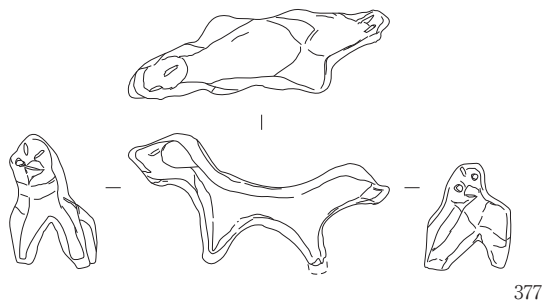
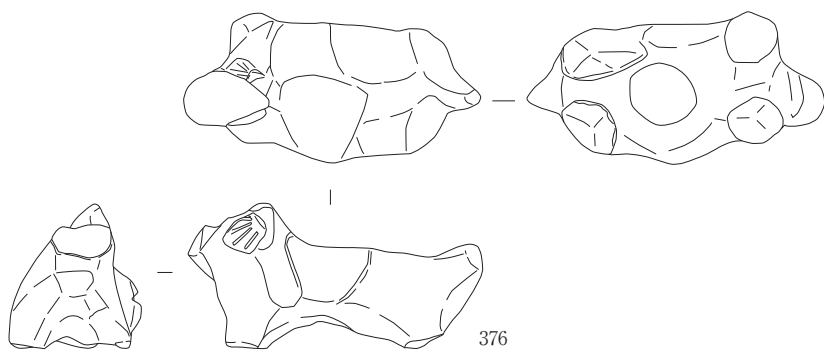
383から385、387は砥石である。383は1区第1遺構面出土の遺物である。上面、下面、両側面に使用痕が残る。384はSK-118出土の遺物である。上面、両側面に使用痕が残る。385は4区第2遺構面出土の遺物である。上面及び側面に使用痕が見られる。387は1区第1遺構面出土の遺物である。上面に使用痕が残る。

386、388、389は軽石である。386はSK-506出土の遺物である。388はSK-105出土の遺物である。使用痕等は見られない。389はSK-408出土の軽石である。

390は、4区第1遺構面出土の石臼である。



第53図 土製品実測図① (1 / 2)



0 5cm

第54図 土製品実測図② (1 / 2)



第55図 石製品実測図（1 / 3）

7 木製品（図版10、第56図）

391はSK-552出土の木椀である。内面及び外面はミノによる調整、漆の痕跡が見られる。法量は、復元口径10.0cm、器高6.4cm、復元底径7.6cmを測る。

392はSK-127出土の遺物である。上面に約1.5cm幅で杵目状に、線が引かれる。法量は、長さ18.2cm、幅8.8cm、厚さ1.1cmを測る。

393はSK-127から出土の遺物である。桶の底か。法量は、直径約12.0cm、厚さ1.0cmを測る。

394はSK-558出土の遺物である。用途は不明である。法量は、直径約3.1cm、長さ12.0cmを測る。

400は2区第2遺構面出土の板状の遺物である。法量は、直径約15.5cm、幅7.0cm、厚さ0.9cmを測る。

8 金属製品（図版10、第56図）

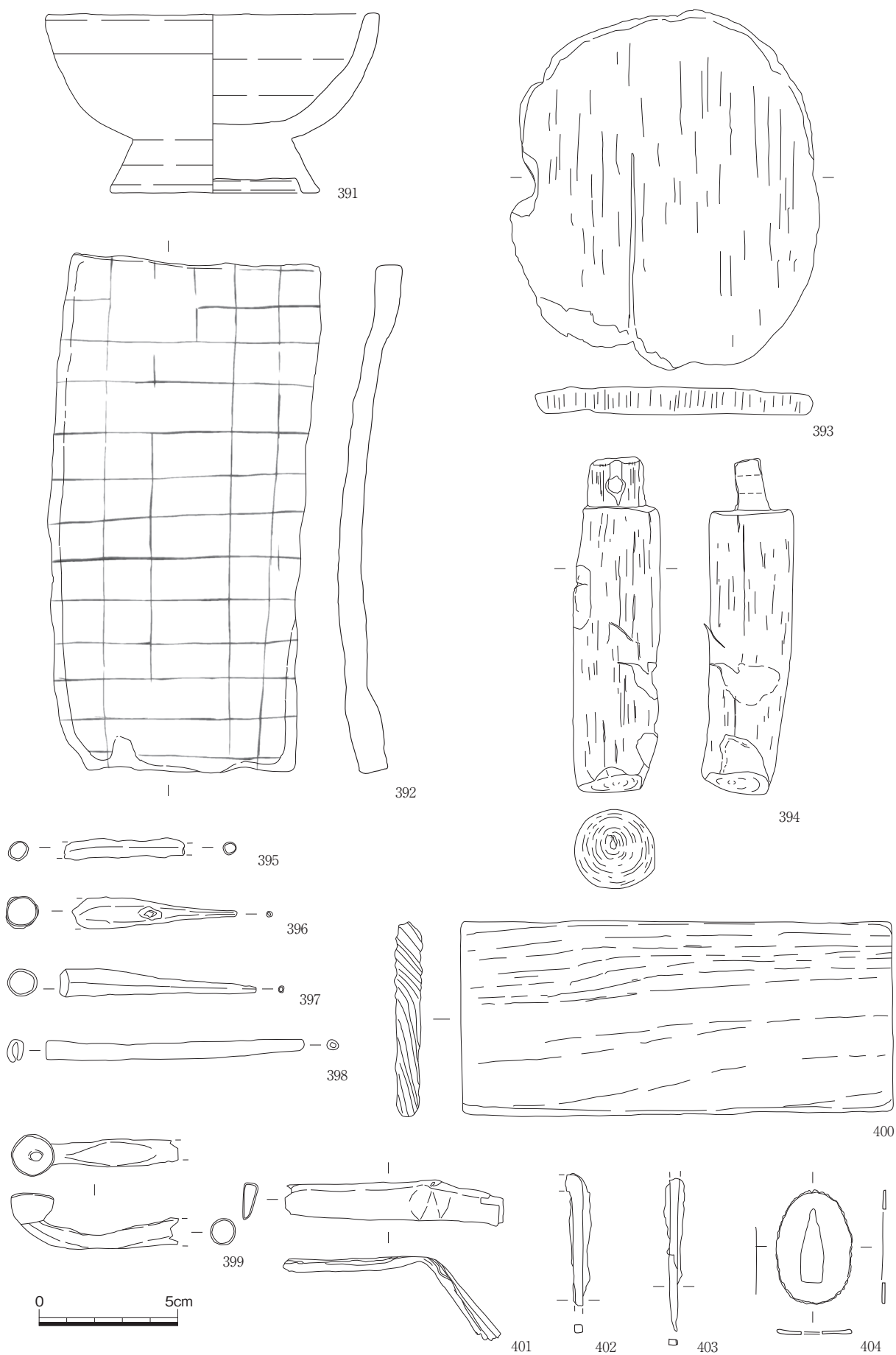
395から398は、キセルの吸い口である。395は1区第1遺構面出土の遺物である。396は1区第1遺構面出土の遺物である。397はSK-593から出土する。398はSK-593出土の遺物である。

399はキセル雁首である。1区第1遺構面出土の遺物である。

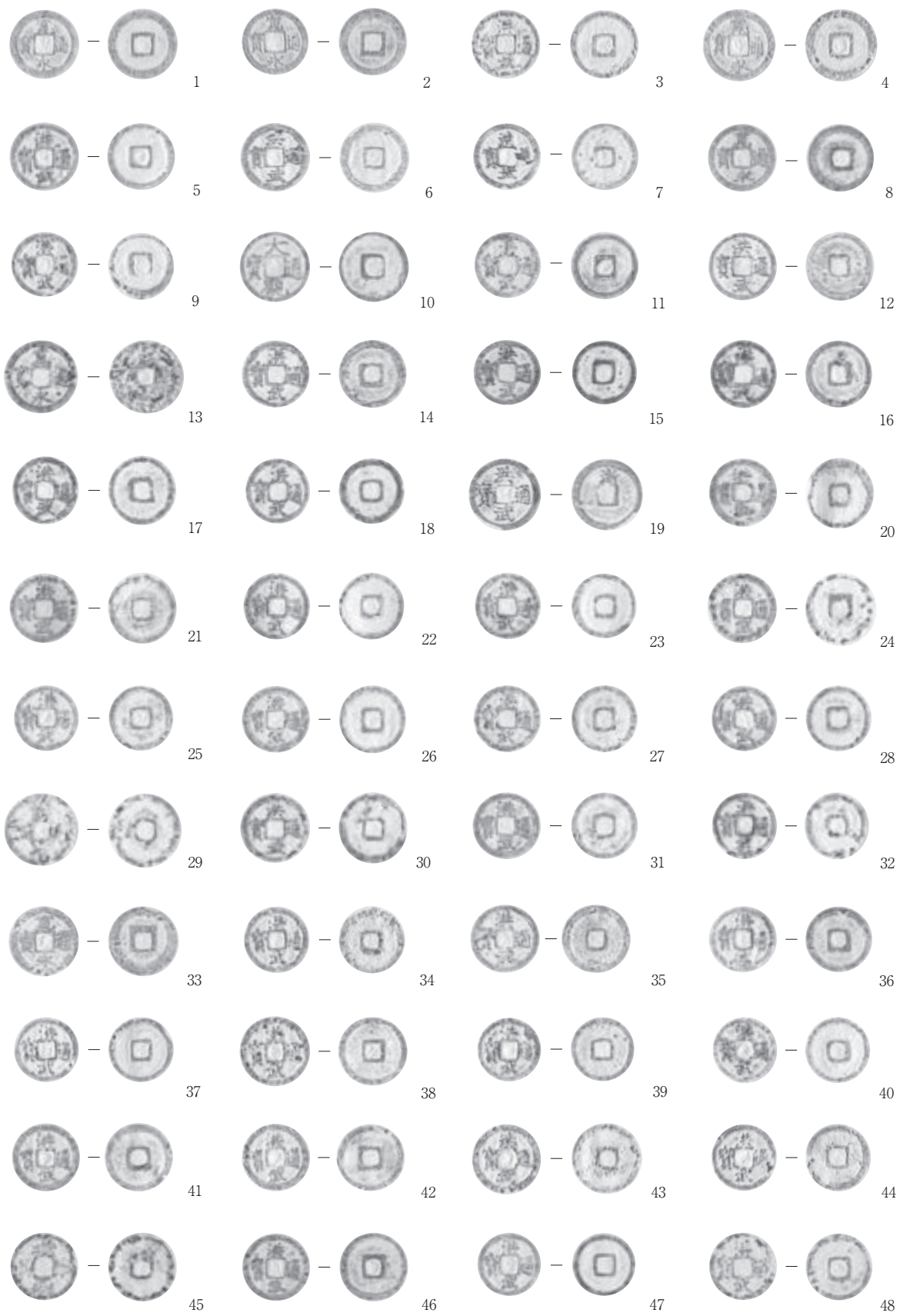
401はSK-120出土の筭の鞘である。

402及び403は、鉄製品の角釘である。402は4区第1遺構面から出土の遺物である。鉄製品の角釘である。403は4区第1遺構面出土の遺物である。

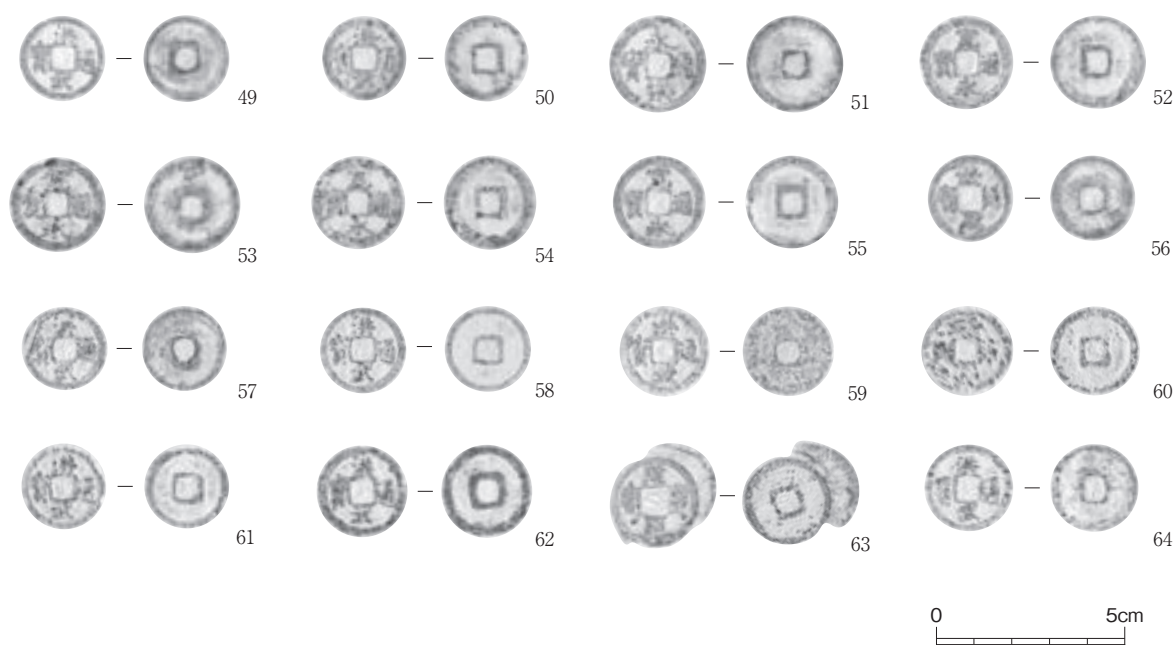
404は1区第1遺構面出土の鐙である。



第56図 木製品・金属製品実測図（1 / 2）



第57図 出土錢拓本①（1 / 2）



第58図 出土銭拓本②（1 / 2）

9 銭（第57・58図）

1 から64は銅銭である。銅銭は全部で119枚出土するが、その中で残りが良い64枚を拓本して掲載している。銅銭は洪武通宝が最も多く、次に寛永通宝が出土する。

1 及び 2 はSK-4 出土の、寛永通宝の新寛永である。3 は、SK-7 出土の洪武通宝である。4 は、SK-7 出土の寛永通宝の新寛永である。5 は、SK-13 出土の洪武通宝である。6 は、SK-17 出土の洪武通宝である。7 は、SK-31 出土の洪武通宝である。8 は、SK-77 出土の寛永通宝の新寛永である。9 は、SK-143 出土の洪武通宝である。10 は、SK-178 出土の大観通宝（北宋1107年初鑄）。11 は、SK-178 出土の洪武通宝である。12 は、1 区第 1 遺構面出土の洪武通宝である。13 は、1 区第 1 遺構面出土の寛永通宝の新寛永である。14 から 19 は、1 区第 1 遺構面出土の洪武通宝である。洪武通宝は大部分が無背であるが、19 は「浙」が背にある。20 から 28 は、2 区第 1 面遺構出土の洪武通宝である。29 は、2 区第 1 面遺構面出土で、銘は不明。30 から 32 は、2 区第 1 面遺構出土の洪武通宝である。33 は、3 区第 1 面遺構出土の寛永通宝の古寛永である。34 から 40 は、4 区第 1 面遺構出土の洪武通宝である。41 から 50、1 区第 1 遺構面出土の洪武通宝である。51 は、1 区第 1 遺構面出土の、永楽通宝である。52 から 55 は、1 区第 1 遺構面出土の寛永通宝である。その中で、52 から 55 は新寛永である。56 は、1 区第 1 遺構面出土で銘は不明である。57 は、4 区第 2 面遺構面出土で、銘は不明である。58 から 62 は、1 区第 2 遺構面出土の洪武通宝である。63 は、1 区第 2 遺構面出土で、銘は不明である。64 は、1 区遺構面不明の洪武通宝である。

また、欠損しているため掲載していないが、第 3 遺構面より祥符通宝（北宋1008年初鑄）が 1 点出土している。

上町遺跡第3次調査出土人骨

舟橋京子¹，米元史織²，富田啓貴³

1：九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

2：九州大学総合研究博物館・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

3：九州大学地球社会統合科学府

1. はじめに

福岡県柳川市上町遺跡第3次調査において、中近世の生活遺構から人骨が出土した。人骨は柳川市教育委員会から九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に搬送され、本講座および九州大学アジア埋蔵文化財研究センターにおいて、整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。年齢の表記に関しては、九州大学医学部第二解剖学教室編集の『日本民族・文化の生成2』（九州大学医学部第二解剖学教室編，1988）記載の区分に従い、乳児0-1歳，幼児1-6歳，小児6-12歳，若年12-20歳，成年20-40歳，熟年40-60歳，老年60歳以上，成人は20歳以上（詳細は不明）とする。

なお、人骨資料は現在、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

2. 人骨所見

【第2遺構面出土人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くなく、前面遠位端付近を除く右大腿骨のみが遺存している。

〔年齢性別〕

年齢は大腿骨の遠位・近位端が癒合していることから成人と推定される。性別は大腿骨粗線があまり発達しておらず中央周の値も小さいことから女性の可能性が考えられる。

〔形質的特徴〕

大腿骨は最大長が373mmであり、比較群の中でも比較的短い値であり、江戸市中の早桶出土人骨と近似した値である。中央横径・中央矢状径・中央周はいずれも比較群中最も低い値を取り、細い特徴を示す。藤井の式（1960）に基づく推定身長も144.6cmと江戸の甕棺に次いで低い値である。

【第3遺構面出土人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。本個体は左脛骨の近位内側端付近片が遺存しているのみである。

〔年齢性別〕

年齢は脛骨の近位端が癒合していることから成人と推定される。性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

4. おわりに

上町第3次遺跡において中近世の人骨が出土した。本例のような溝からの人骨の一部が出土する

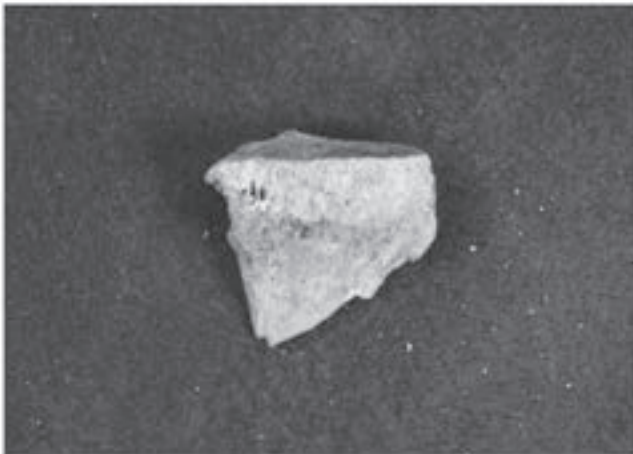


第2遺構面出土右大腿骨

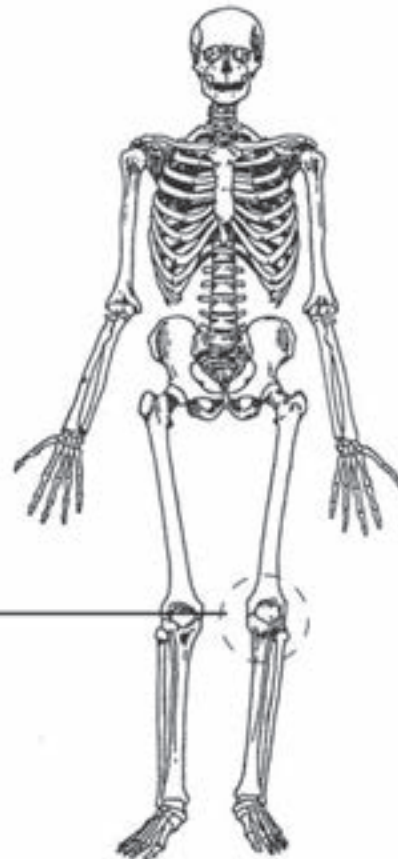


遺存部位

第2遺構面出土人骨の保存部位



第3遺構面出土左脛骨片



遺存部位

第3遺構面出土人骨の保存部位

事例は、他地域の古代の文献や中世・近世の都市部であった遺跡において確認されており、近隣地域では古代の大宰府条坊跡や中世の大友府内町においてみられる（舟橋・田中2009；邱ほか2007）。本事例は柳川城下における当時の生活を復元するうえで貴重な資料である。加えて、当該地域・時期の出土人骨の事例は少なく、今後も出土人骨の増加が望まれる。

謝辞

本報告を行うにあたり、柳川市教育委員会の橋本清美氏・堤伴治氏に多くのご配慮を賜りました。深謝いたします。

表 1

Martin No.	上町 3 次 (近世)		稲荷谷 ¹⁾ (近世)		原田 ²⁾ (近世)		席田青木 ³⁾ (近世)		薗棺 (江戸市中) ⁴⁾ (近世)		早桶 (江戸市中) ⁴⁾ (近世)		芝公園 ⁵⁾ (近世)		九州 ⁶⁾ 7) (現代)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
大腿骨																
1 最大長	1	373	8	382.0	12	382.8	15	389.1	14	363.8	15	377.6	13	382.5	13	380.1
2 自然位長	1	372	8	376.9	8	378.8	5	388.4	—	—	—	—	12	376.9	13	375.9
6 中央矢状径	1	22.0	15	24.3	27	24.1	25	24.8	15	22.2	16	23.9	37	22.9	13	23.6
7 中央横径	1	21.0	15	24.5	27	24.3	25	26.6	15	22.9	16	24.9	37	23.3	13	23.2
8 中央周	1	66.0	16	74.6	27	75.7	25	80.5	15	71.1	15	76.5	37	73.1	13	74.2
9 骨体上横径	1	24.0	14	28.7	31	28.8	25	30.2	—	—	—	—	38	27.7	13	27.5
10 骨体上矢状径	1	19.0	14	21.6	31	22.4	25	23.0	—	—	—	—	38	20.2	13	21.3
8 / 2 長厚示数	1	17.7	8	19.3	7	20.6	3	21.2	—	—	—	—	12	19.7	13	19.8
6 / 7 中央断面示数	1	104.8	15	99.4	27	99.7	25	93.6	15	97.1	16	96.5	37	98.6	13	77.1
10 / 9 上骨体断面示数	1	79.2	14	75.4	31	78.0	25	77.0	—	—	—	—	38	73.3	13	66.4

1) 岡崎ほか(2004)、2) 中橋・土肥(2008)、3) 中橋(1993)、4) 富田計測(崇源寺・正見寺・南元町Ⅱ)、5) 加藤(1991)、6) 阿部(1957)、7) 鑄鍋(1955)

表 2

女性	n	M
上町 3 次 (近世)	1	144.6
稲荷谷 ¹⁾ (近世)	8	146.8
原田 ²⁾ (近世)	12	147.0
席田青木 ³⁾ (近世)	15	148.5
薗棺 (江戸) ⁴⁾ (近世)	14	142.5
早桶 (江戸) ⁴⁾ (近世)	15	145.6
芝公園 ⁵⁾ (近世)	13	147.0
九州 ⁶⁾ (現代)	13	146.4

1) 岡崎ほか(2004)、2) 中橋・土肥(2008)、3) 中橋(1993)、4) 富田計測(崇源寺・正見寺・南元町Ⅱ)、5) 加藤(1991)、6) 阿部(1957)、7) 鑄鍋(1955)

参考文献

阿部英世（1957）現代九州人大腿骨の人類学的研究. 人類学研究 2（2），301-346.

岡崎健治・重松辰治・舟橋京子・石川健・田中良之（2004）稲荷谷近世墓地群から出土した近世人骨. 国道502号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書.

加藤征（1991）江戸時代人骨の形質に関する人類学的研究. 平成2年度科学研究費補助金一般研究B研究成果報告.

九州大学医学部解剖第二講座編（1988）日本民族・文化の生成 2. 九州大学医学部解剖第二講座所蔵個人骨資料集成，六興出版.

邱鴻霖・田中良之・舟橋京子（2007）大友府内跡20次C調査の万寿寺堀埋土内の出土人骨について。
豊後府内7・中世大友府内町跡第20次調査区，大分県教育庁埋蔵文化財センター。

中橋孝博（1993）福岡市席田青木遺跡出土の弥生・近世人骨。席田青木遺跡，福岡市教育委員会。

中橋孝博・土肥直美（2008）原田第1・2・40・41号墓地出土の近世人骨。原田第1・2・40・41
号墓地下巻，筑紫野市教育委員会。

藤井 明（1960）四肢長骨の長さと身長との関係に就いて。順天堂大学体育学部紀要。第3号

舟橋京子・田中良之（2009）大宰府条坊跡第224次調査出土人骨について。大宰府条坊跡40－第
217・224次調査－，太宰府市教育委員会。

V 遺物の考察

別府大学文学部 史学・文化財学科 准教授 上野 淳也

上町遺跡出土遺物は、低湿地遺跡であることから木製品の残存状況も良好で、石製品や、銅銭に代表される金属製品等をはじめとして、多岐に渡る種類の遺物が出土している。その中で、遺物群中の主体を占め、且つ年代観を把握しやすいのが陶磁器資料である。

まずは、以下のような各年代を代表する陶磁資料をメルクマールとして、当該遺跡における各遺構面の年代観を見てゆきたい。

国産陶磁器の年代観に関しては、新しい時代から古い時代へと時代を遡りながら、端反碗が19世紀前半～中頃、広東碗及び筒形碗が18世紀末から19世紀初頭を中心としながらも18世紀中頃から19世紀中頃、くらわんか碗に代表される粗製の製品が18世紀後半前後、刷毛目唐津及び京焼風陶器が17世紀後半～18世紀中頃、長崎県の諫早で焼かれた現川窯製品が17世紀末～18世紀前半、芙蓉手に代表される輸出用の肥前系磁器が17世紀後半～18世紀初頭、砂目積段階の唐津焼が17世紀前半、絵唐津に代表される胎土目積段階の唐津焼が16世紀末～17世紀初頭と、使用期間を加味して、若干の年代観のゆとりをもって概観する。蛇ノ目凹形高台を呈する皿等も、18世紀中頃以降に製作され始め、18世紀末葉～19世紀前葉を中心に分布する遺物であるので、目安となる遺物であるが、今回の調査では、第1面のみでしか確認されていない。その他、1714（正徳4）～1728（享保13）年という、ごく限られた期間に久留米有馬領内で焼造された朝妻焼も1面でのみ確認されており、メルクマールとなる遺物である。なお、報告の中では、端反碗や広東碗等の実測図が不掲載となっているが、出土が確認されている。

	第1面	第2面	第3面
近現代陶磁器	○	○	○
近世陶磁器 端反碗	○		
広東碗	○		
筒形碗	○		
くらわんか手	○		
陶胎染付	○		
現川窯系陶器	○		
京焼風陶器	○	○	
刷毛目唐津	○	○	
芙蓉手等輸出用肥前磁器	○	○	
砂目積段階唐津	○		
胎土目積段階唐津	○	○	○
朝鮮産陶器・白磁	○	○	○
漳州窯系青花	○	○	○
景德鎮系青花	○	○	○

第2表 遺構面と遺物組成対応表

また、貿易陶磁器としては、上町出土の景德鎮系・漳州窯系青花及び朝鮮産陶磁器は、16世紀後半の様相を残しつつも17世紀初頭の大坂城跡における大坂の陣前後頃の様相を示す。層位学的な成果にもとづき、本報告書6ページの「第1表 遺構面对応表」と対照しながら、型式学的な成果にもとづく遺物組成の様相を整理すると第2表ようになる（第2表参照）。

表からは、遺構面が下位へ行くほど遺物の種類が減少し、且つ古い遺物組成へと遷移してゆくことが把握され、発掘調査が層位ごとに整理されながら実施されたことが読み取れる。しかし、各調査区及び各遺構検出面において、近現代及び幕末の陶磁器を含む状況が見られ、各面ともに若干のノイズが含まれることも指摘される。また、遺物量に関しても、遺構面が下位へ行くほど減少傾向を示すことを、ここに明記しておく。

注目すべきは、第2面以下からは、18世紀後半以後の遺物が出土しないという点である。また、第3面からは17世紀初頭以前の製品のみが出土している。以上の点から陶磁器の組成から判断できる各遺構面の帰属年代は、若干の年代幅をもって以下の通りである。

第1面 18世紀後半～近現代

第2面 17世紀中頃～18世紀前半

第3面 16世紀後半～17世紀初頭

第1面に関しては、16世紀末から20世紀までの陶磁器のあり方を概観することができる。これは、この面の使用期間が長いことを示している可能性もあるが、下層位からの遺物混入である可能性も指摘しておかねばならない。或いは、柳川城下町における1780（安永9）年及び1794（寛政6）年の2度の大火後に第3面が形成されたと考えるのであれば、第1面と第2面の境の整地層を18世紀第4四半期と想定することができよう。この場合には、第1面に含まれる16世紀後半から18世紀前半までの遺物は、蔵などが焼けた場合の伝世品が埋没したもの、或いは16世紀後半から18世紀前半までの遺構を削平して得られた土で客土整地した結果、第1面の遺構形成時に古い遺物が混入したものとの可能性も考慮しなければならない。このことは、出土銭を検討しても、64枚出土した銅銭の内、洪武通宝が49枚（≒76.5%）、永楽通宝が1枚（≒1.5%）、16世紀末発行の新寛永も含む寛永通宝が10枚（≒15.6%）、大観通宝が1枚（≒1.5%）、不明銭が3枚（≒4.5%）となっており、明銭が最多出土銭となってしまうことから、江戸時代の遺構を主体とする遺跡としては層位が逆転している印象を示してしまっており、整地土の供給地の問題を考える必要がある。

そのような意味合いでは、第2遺構面と第3遺構面の間にある整地層も、何故、整地をしない必要があったのか、城下町の整備及び水害等の災害史的観点からも究明してゆく必要があろう。今後、遺構面と遺構面の間に横たわる整地層内の遺物を、丁寧に見極めてゆくことにより各整地層及び各遺構面の年代観を、より明らかにし、且つ、その整地層の存在意義を考えてゆく必要がある。

—参考文献—

- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55 ニューサイエンス社
小野正敏 1982 「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
九州近世陶磁研究会 2000 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
森 毅 1997 「大坂出土の十六・十七世紀の陶磁器」『東洋陶磁1996 - 1997』Vol.26 東洋陶磁学会

VI 総括

今回の調査区は、隣接する4ヶ所であり、井出橋南側の町屋敷に位置する。今回の調査区では現在の道路に平行するように溝が検出されている。

本報告では、調査時に各調査区で遺構面の数に差違のあった遺構面を、調査面の標高を元に3遺構面に整理し報告を行った。

第1遺構面は、1780（安永9）年の外町大火、1794（寛永4）年の外町大火に伴うものと考えられる、焼土層を検出。土坑は調査区全体に及び、建物の基礎と考えられる、礎石が1区及び2区より出土。

第2遺構面の土坑は調査区全体に及び調査区南側では、現在の道路に平行する様に溝を検出した。1区では、調査区の中央を横断する溝を検出している。この1区出土の溝と3区、4区出土の溝との関係性については不明であるものの、第2遺構面で検出した、溝の特徴としては、南側において、建物に伴うと考えられる小穴を検出しており、その位置関係から3区及び4区では4軒の建物が存在した可能性を考えられる。その他の、第2遺構面出土の木製品として、本文中の報告は行っていないものの、4区東南から出土した長方形の木製品についても用途不明ではあるもの、本調査において新たに検出を行なった遺物が存在する。

第3遺構面の土坑は、調査区全体に及び、調査区南側では、第2遺構面同様に現在の道路に平行する溝を検出した。また、3区において、溝を横断するように整形された木材を検出している。その、木材検出位置の西側には、建物が位置しており、建物と溝、溝検出の木材の利用を考える上で、新たな資料となった。今回の調査で出土した青花の年代などから、第3遺構面は中世に遡る可能性を検討する必要がある考果となった。

今回の調査において、第1遺構面では、近世柳川城下町における大火の焦土層を検出することができ、城下町における大火時の様相を知る手がかりとなった。また、第3遺構面の調査では出土遺物等から16世紀代に遡る可能性を、掴むことができた。この城下町下層における中世に由来する遺物の出土は、近世柳川城下における城下町以前の姿を解明するにあたり重要な成果となった。

今後の調査の蓄積により、近世柳川における町人地と武家地との出土遺物の比較から様相の違いを検討することができるであろう。

—参考文献—

- 『九州陶磁器の編年—九州陶磁学会10周年記念—』2000 九州陶磁学会
『京町遺跡』柳川市文化財調査報告書 第7集 2009 柳川市教育委員会
『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 2005 福岡県教育委員会
『矢加部町屋敷遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集 2007 福岡県教育委員会
『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集 2009 福岡県教育委員会
『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第12集 2012 九州歴史資料館